



米
国
帆
船

チ
エ
ス
ボ
ロ
ー
号
漫
画
誌

一八八九年（明治22年）

アメリカメイン州バス市から

出航した三本マストの帆船

チェスボロー号は、石油

6000箱を積み、神戸港に

8月に着きました。

残りを売るため函館港に寄り

すべての石油を完売し

そこで買った硫黄を積みこみ

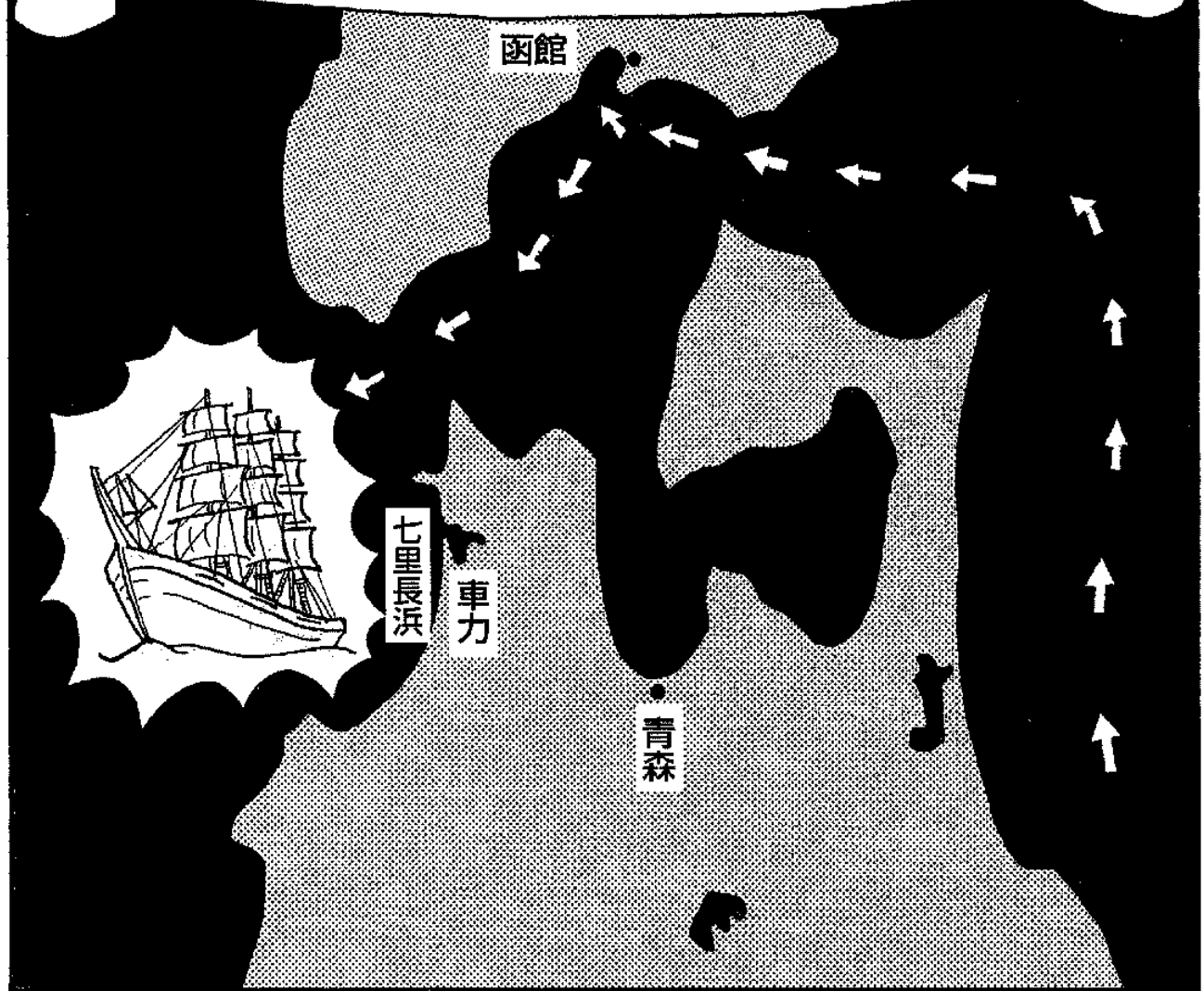
あとは故郷に戻るだけでした。

これから起こるお話は

乗組員23人の運命と

車力村の人々が遭遇する

感動的な実話であります。



米^{べい}国^{こく}帆^{はん}船^{せん}

チエスボロ一^{ごう}号

漫^{まん}画^が誌^し

目次^{もくじ}

第^{だい}1^わ話

遭難^{そうなん}

.....
1

第^{だい}2^わ話

村人^{むらびと}たち

.....
26

第^{だい}3^わ話

二人^{ふたり}が走る^{はし}

.....
41

第^{だい}4^わ話

悲^{かな}しみ

.....
59

第^{だい}5^わ話

言^{こと}葉^はが通^{つう}じた

.....
77

第^{だい}6^わ話

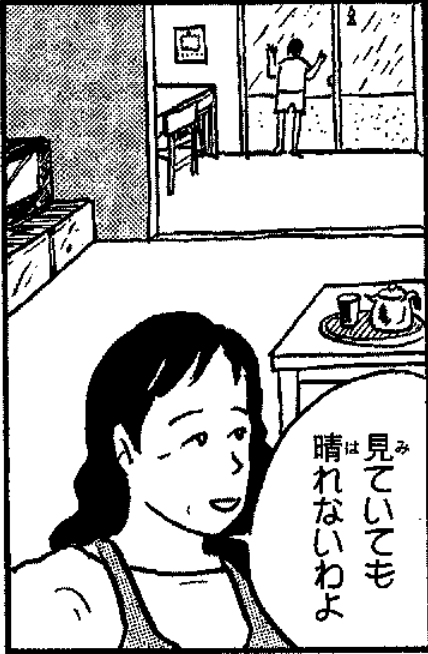
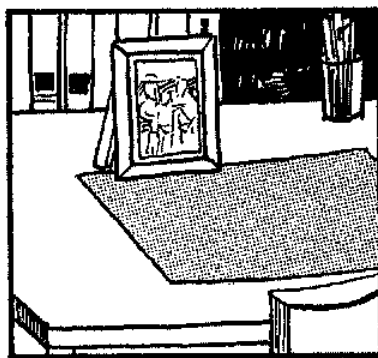
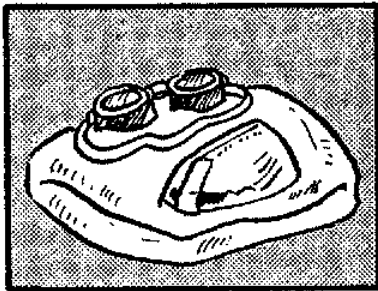
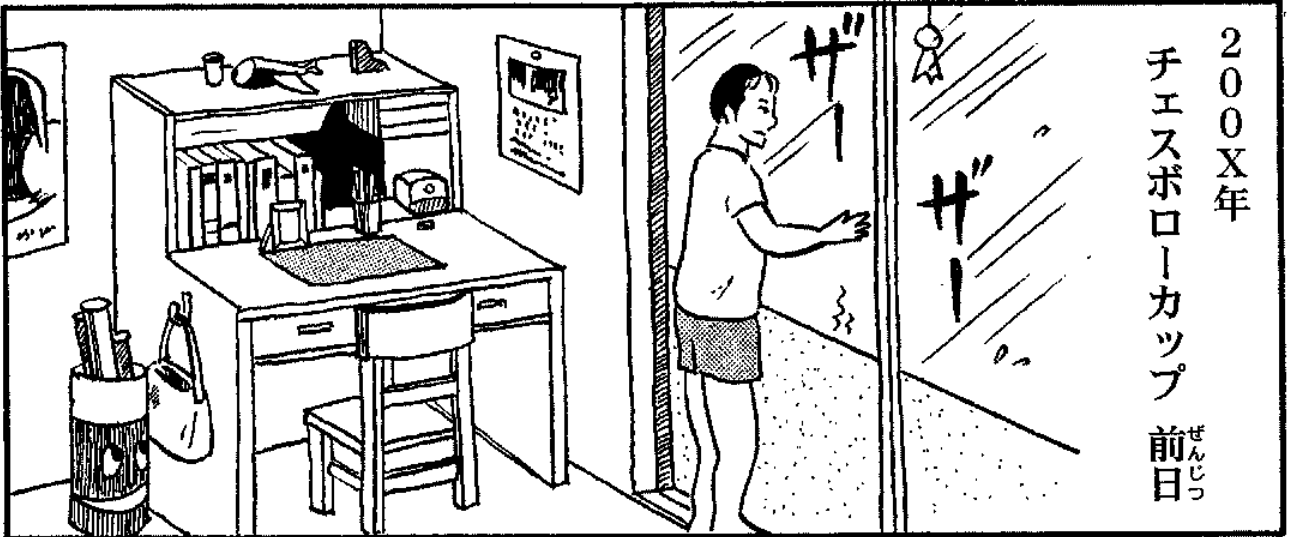
出^{しゅつ}発^{ぱつ}

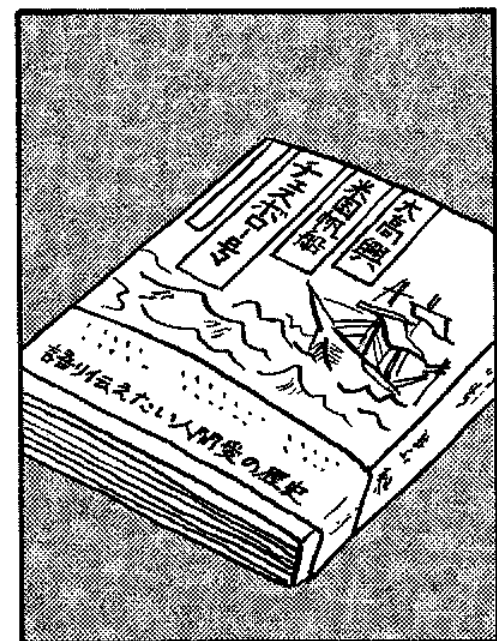
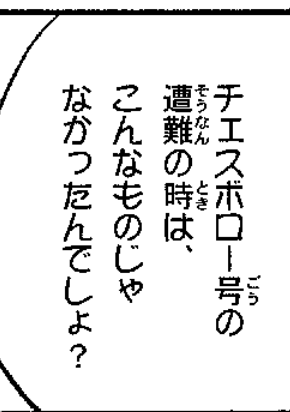
.....
87



200X年

チエスポローカップ 前日^{ぜんじつ}





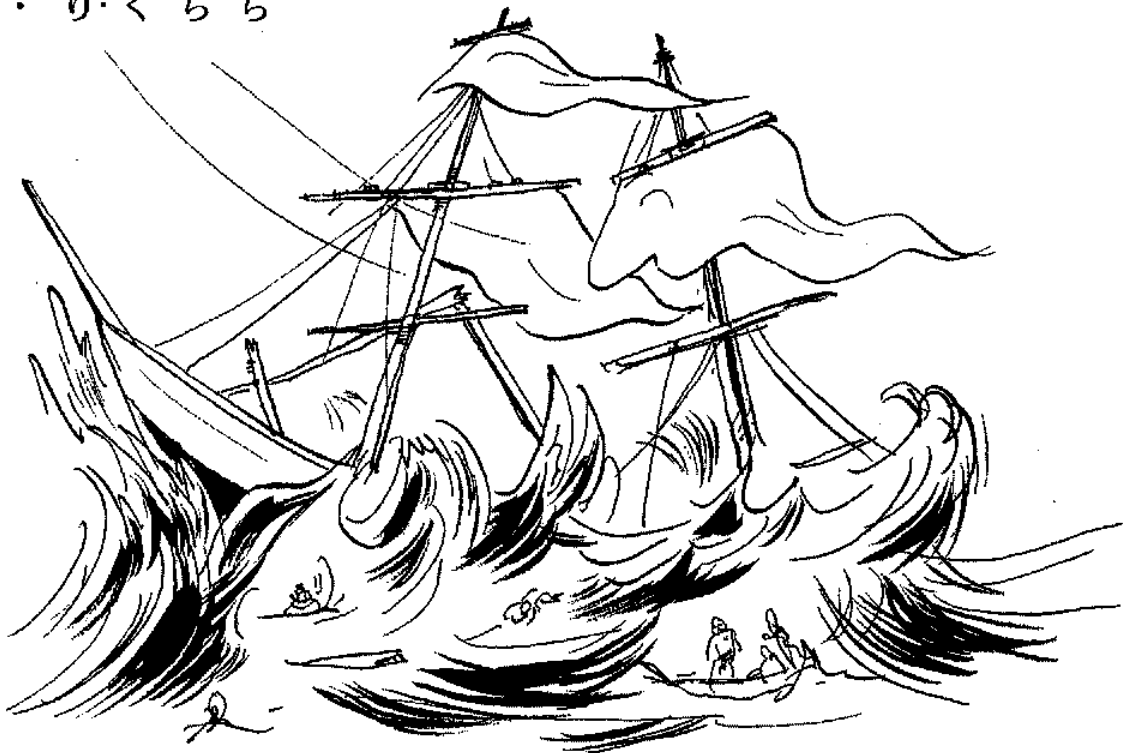
第1話

— 遭^{そう}

難^{なん} —

運命の積荷

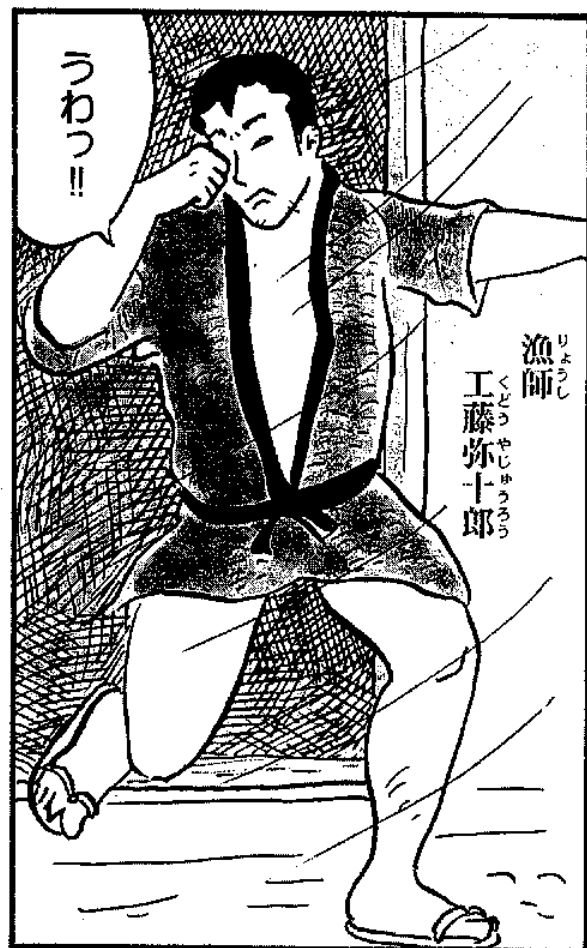
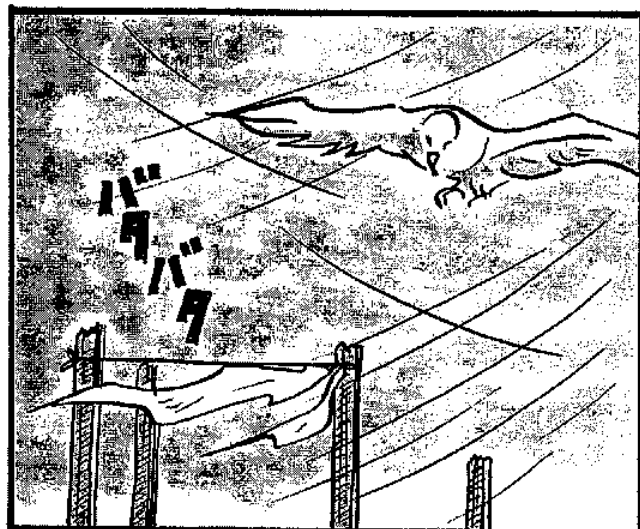
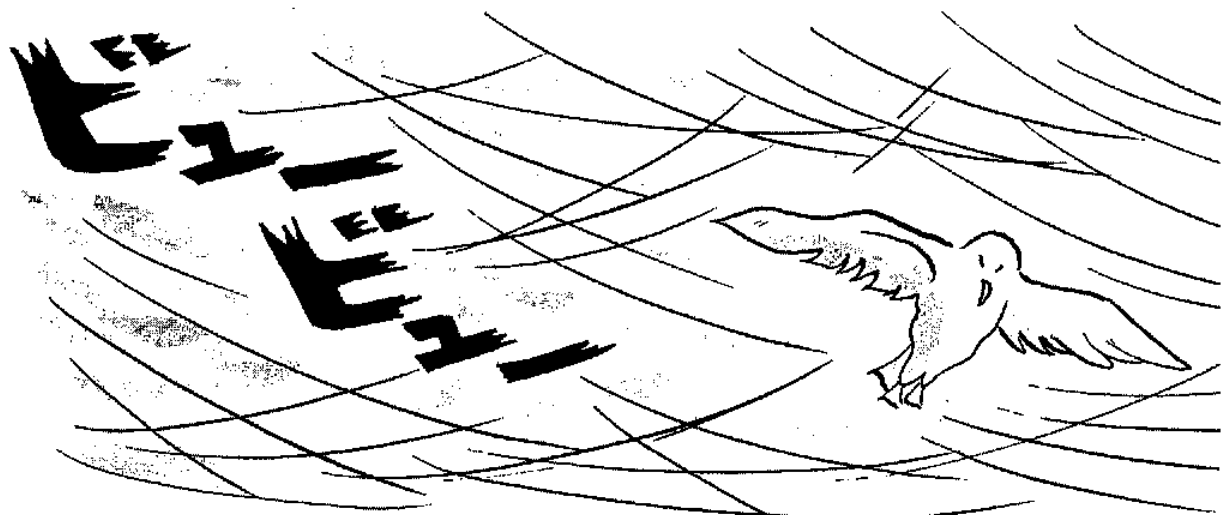
すでにライバル会社の船が上海（中国）から
硫黄を積んで出航していた。先を越されたら
自分たちは損をしてしまう。彼らよりも早く
ニューヨークへ着かなければ、というあせり
が、悪天候の中での出航を、船長ピーター・
エリクソンに決断をさせた。

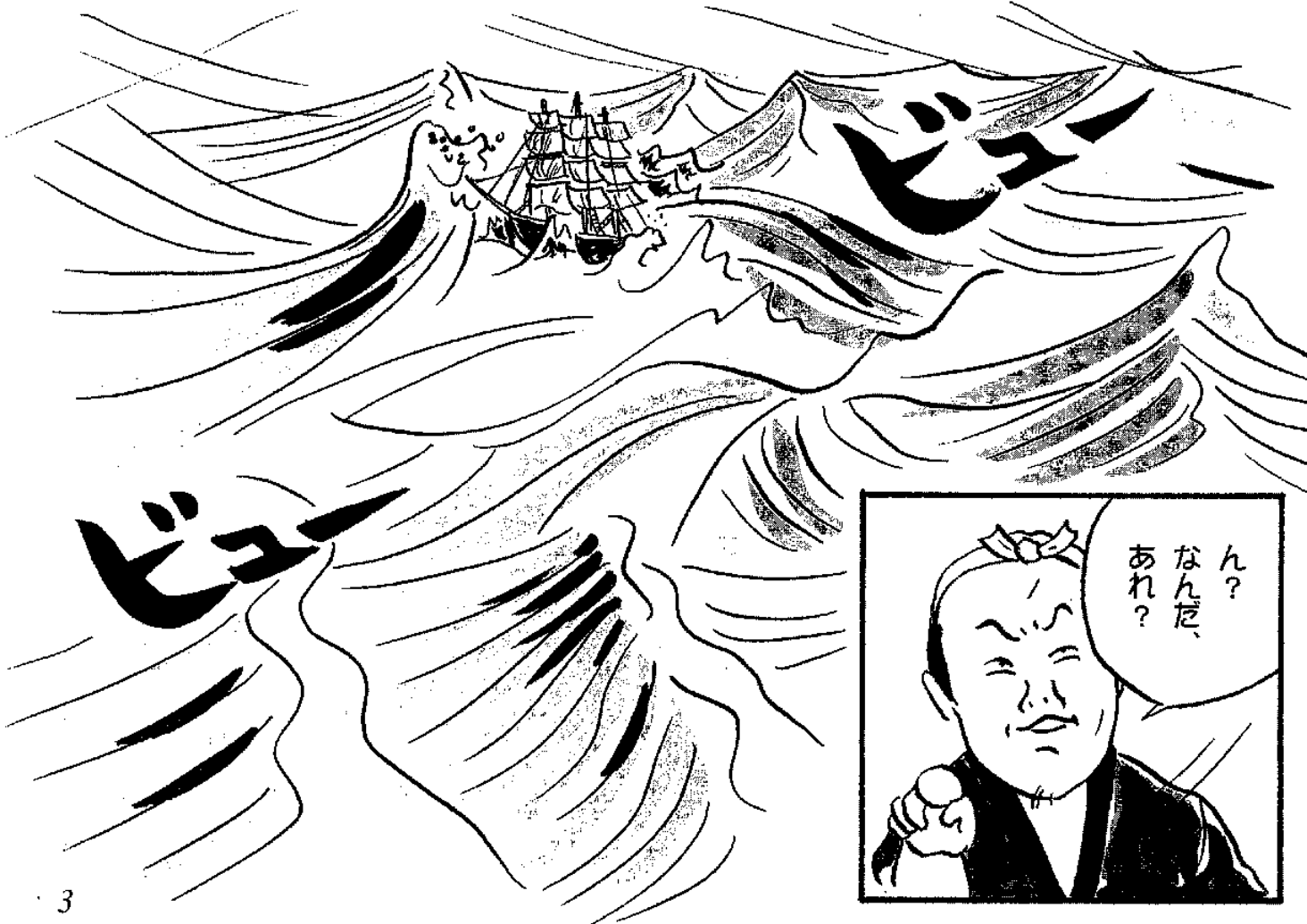
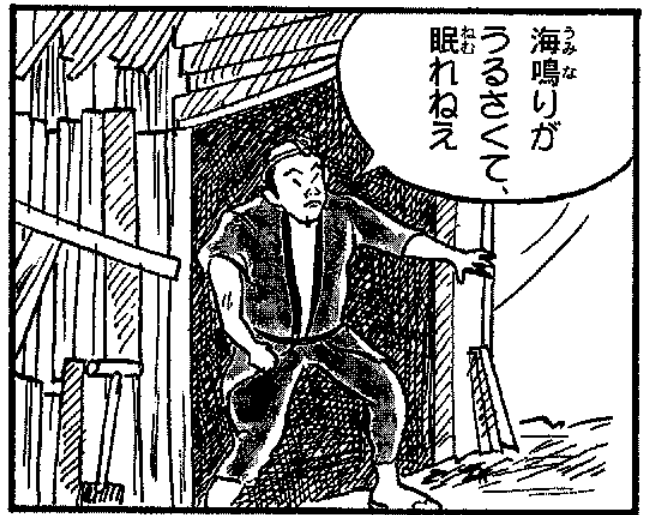


明治二十二年

十月三十日 早朝

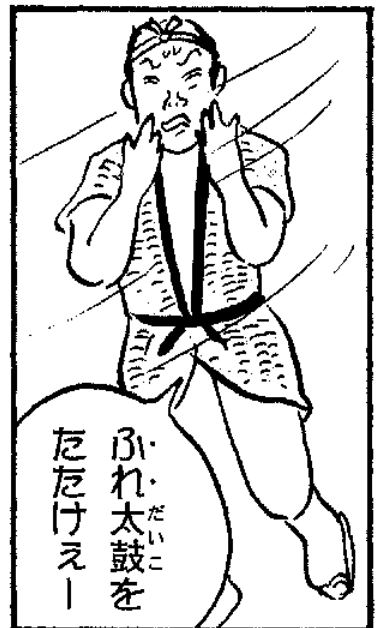
「牛潟地区・中の森」

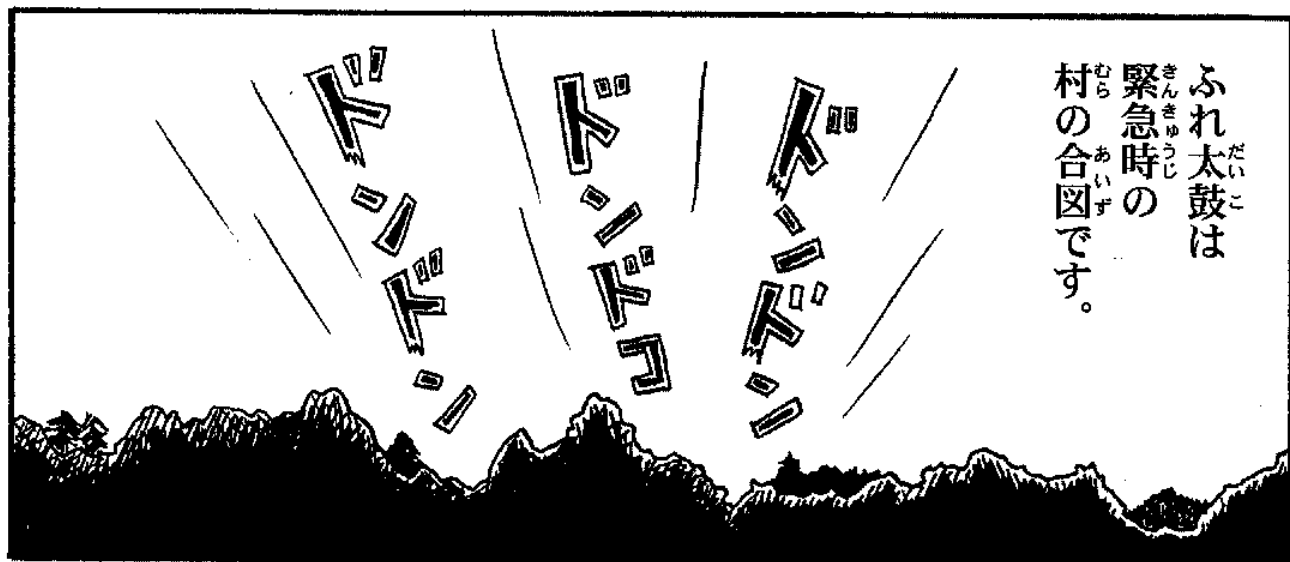












ふれ太鼓は
緊急時の
村の合図です。



とにかへ
浜に
行ってよ



いやな
予感
が
する
ねえ



なんだ、
どうした



こんな
日に漁に
出たのか？

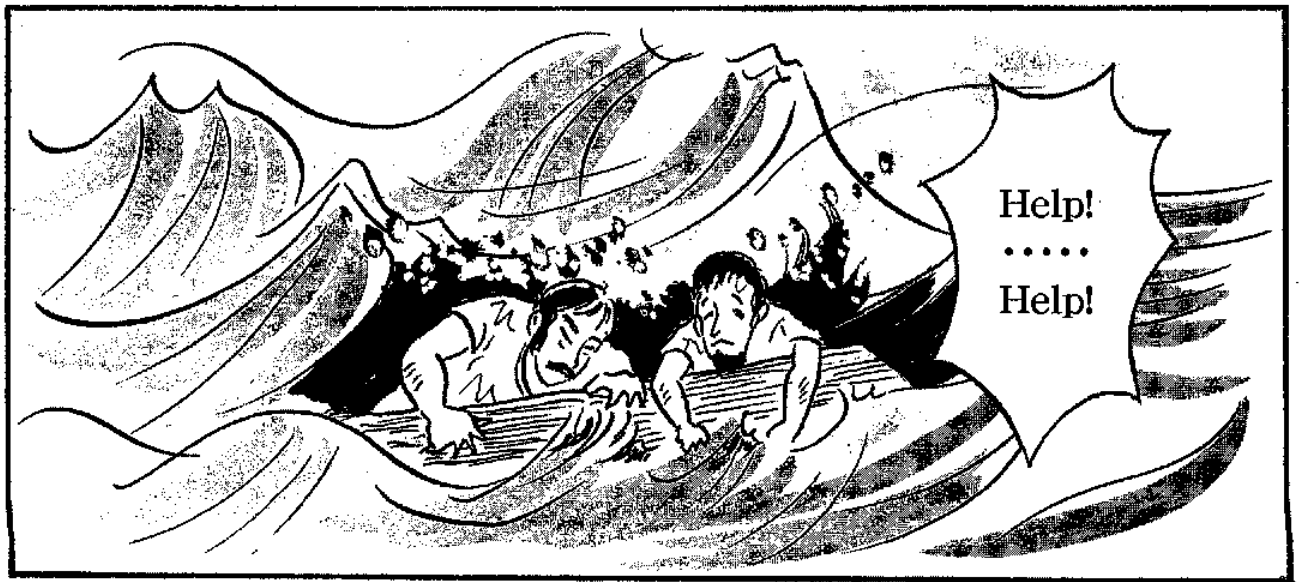
誰の船だ？

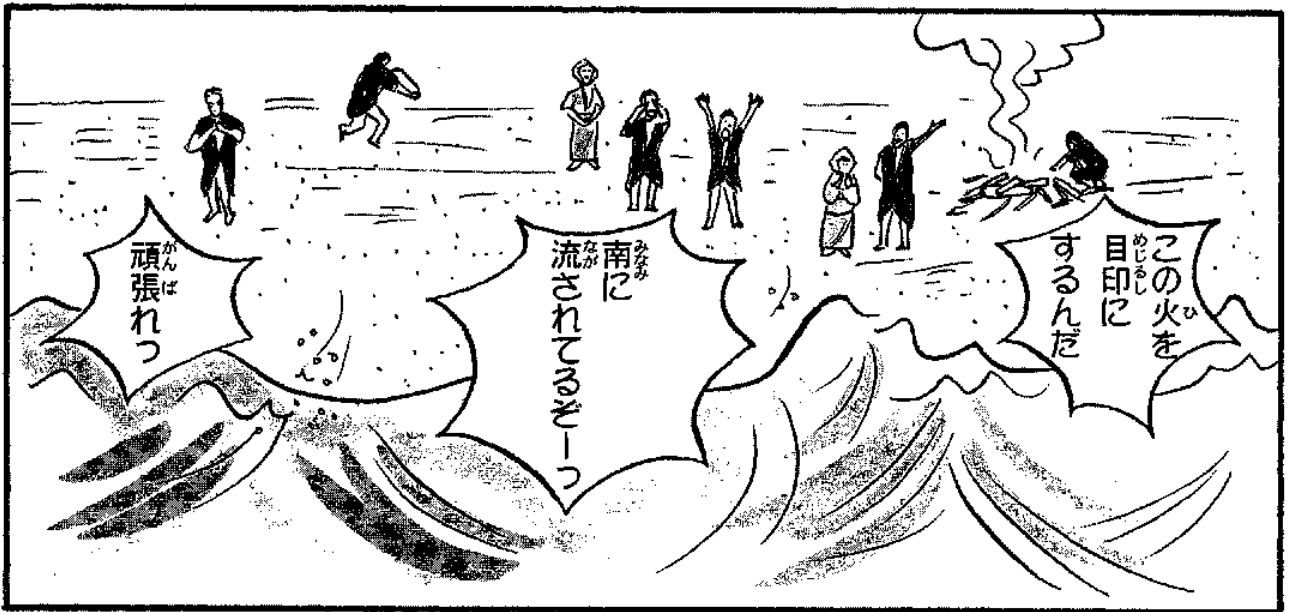


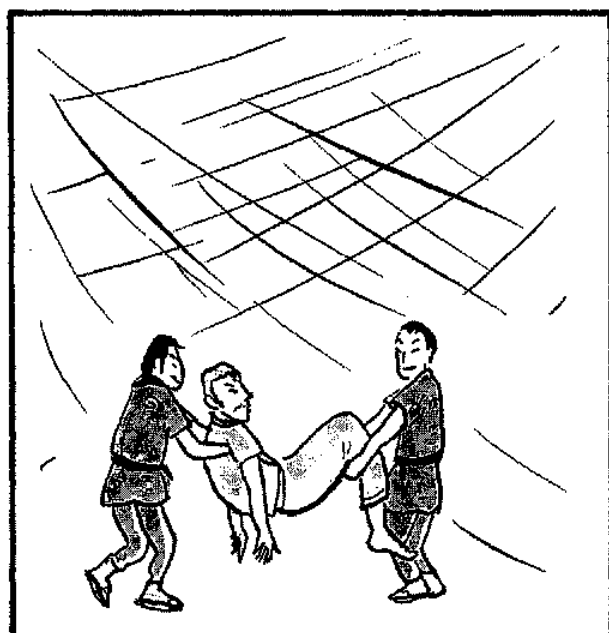
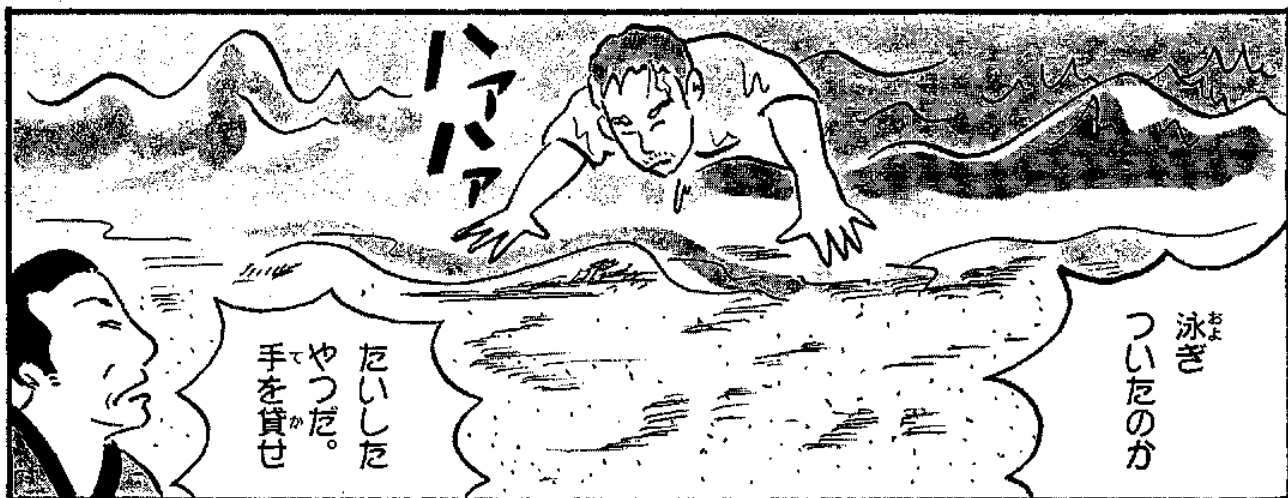
船が難破したらしい

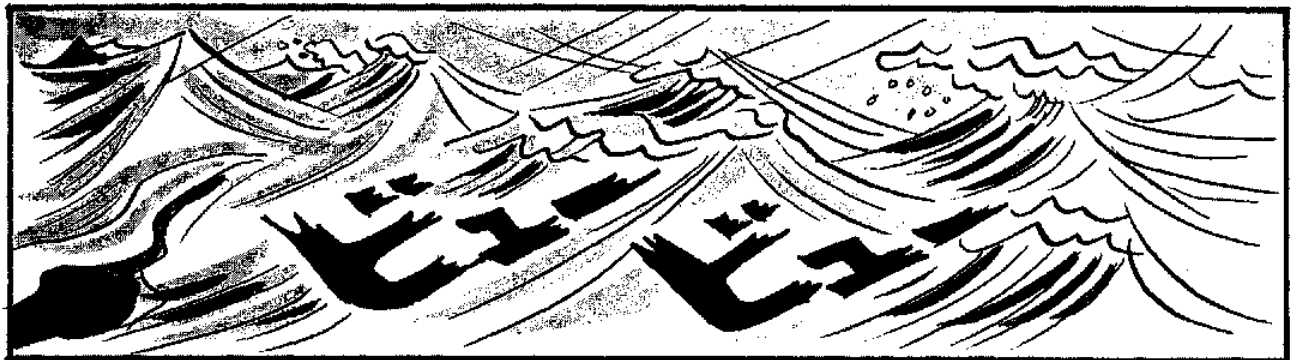
チエスボロー号は
ついに座礁して、船体も
壊れはじめました。

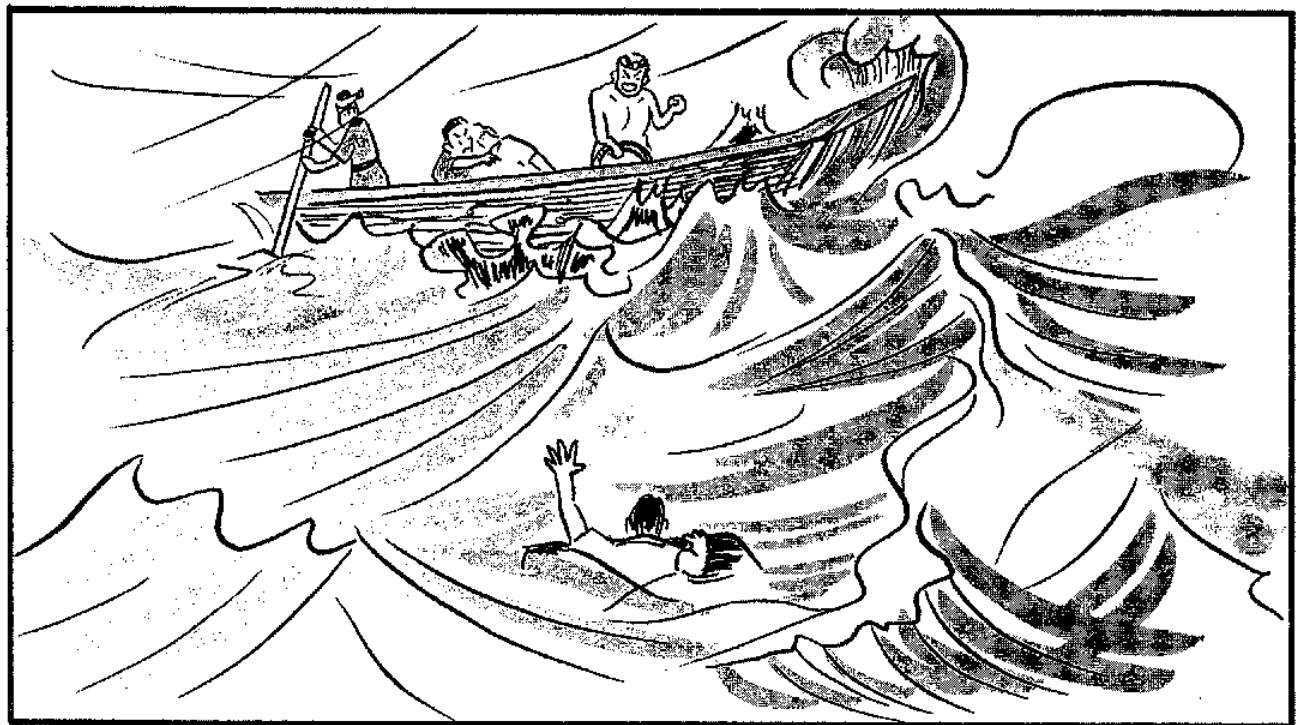
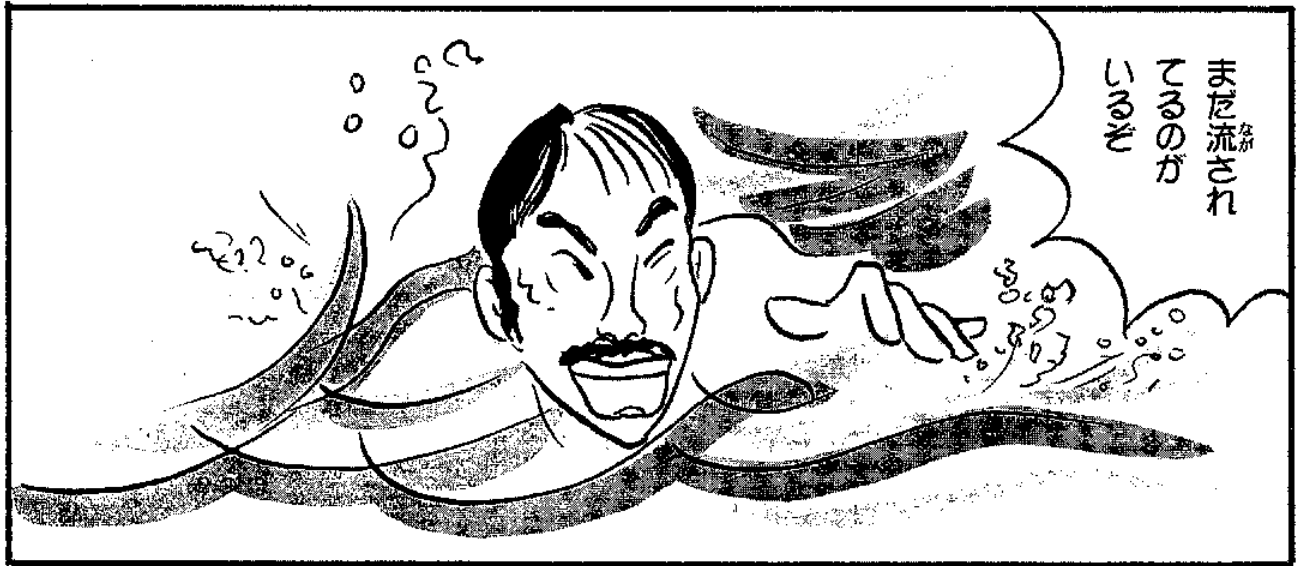


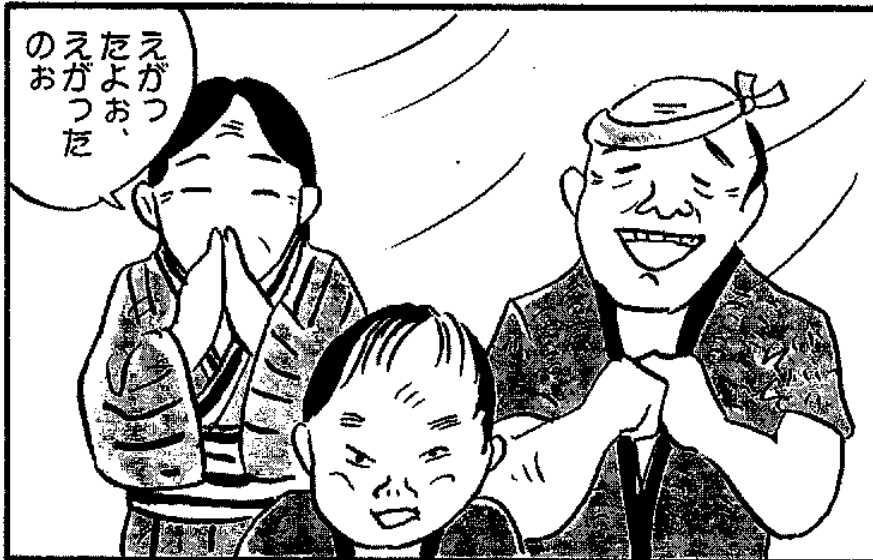


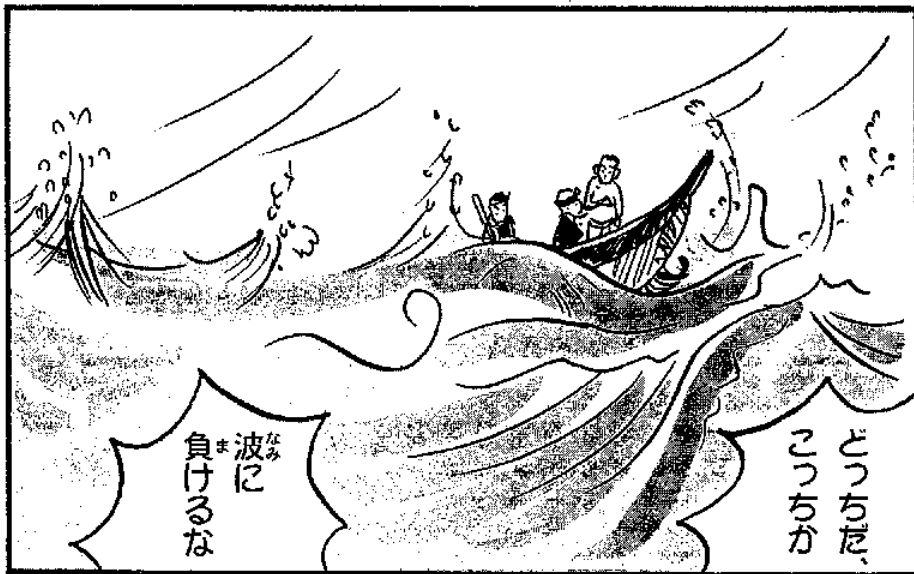


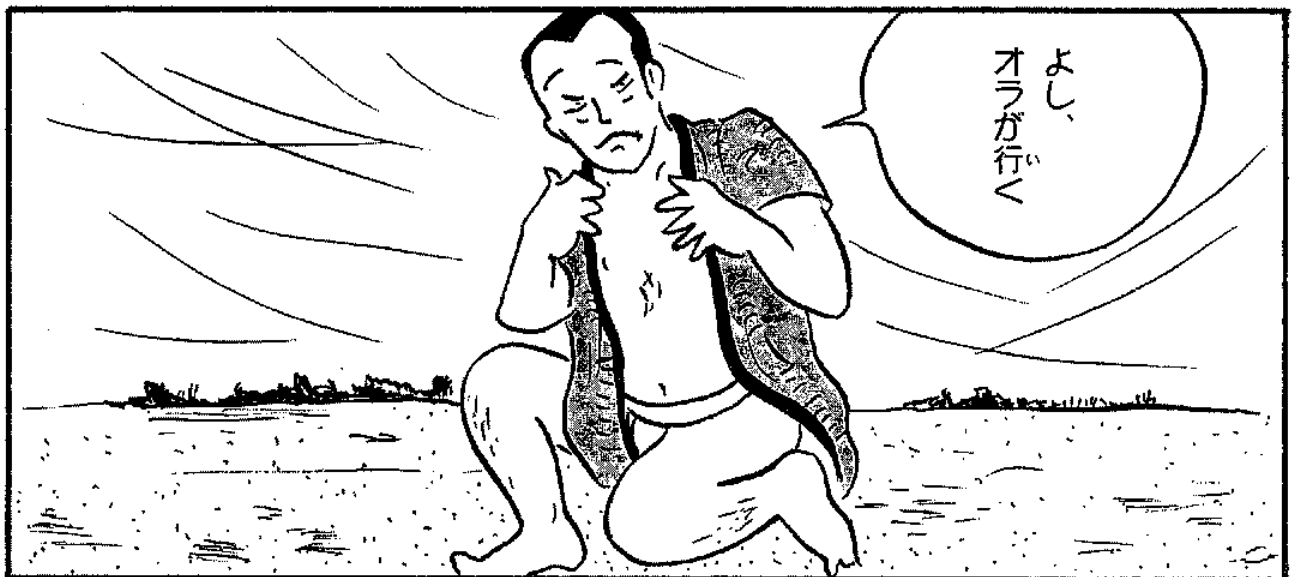
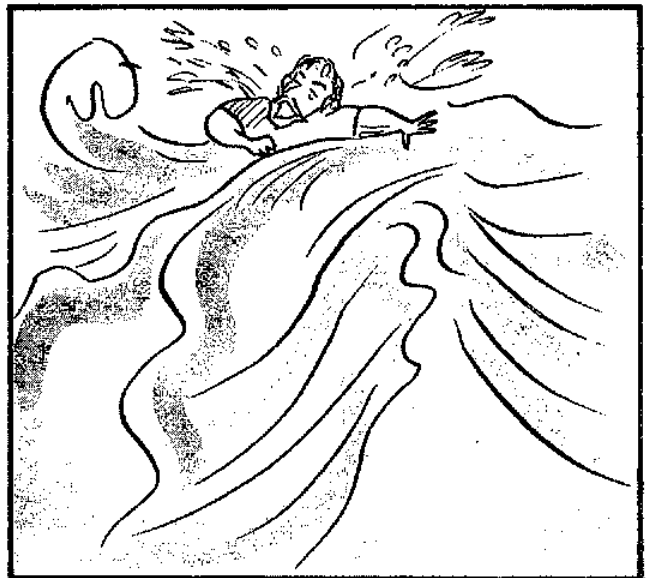
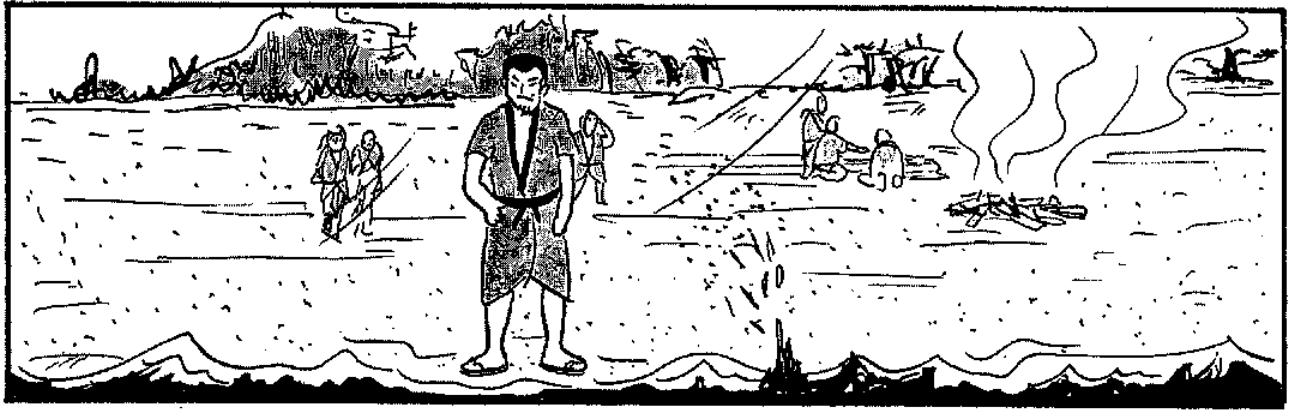




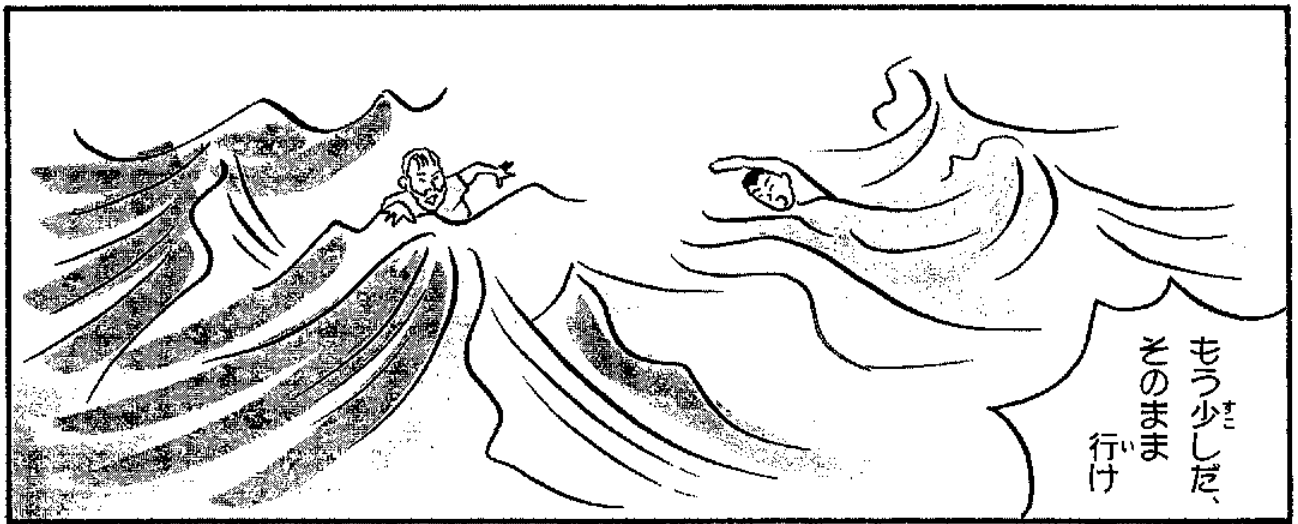












もう少しだ、
そのまま
行け



やった、
たどりついた

つかんだぞ、
もう大丈夫だ

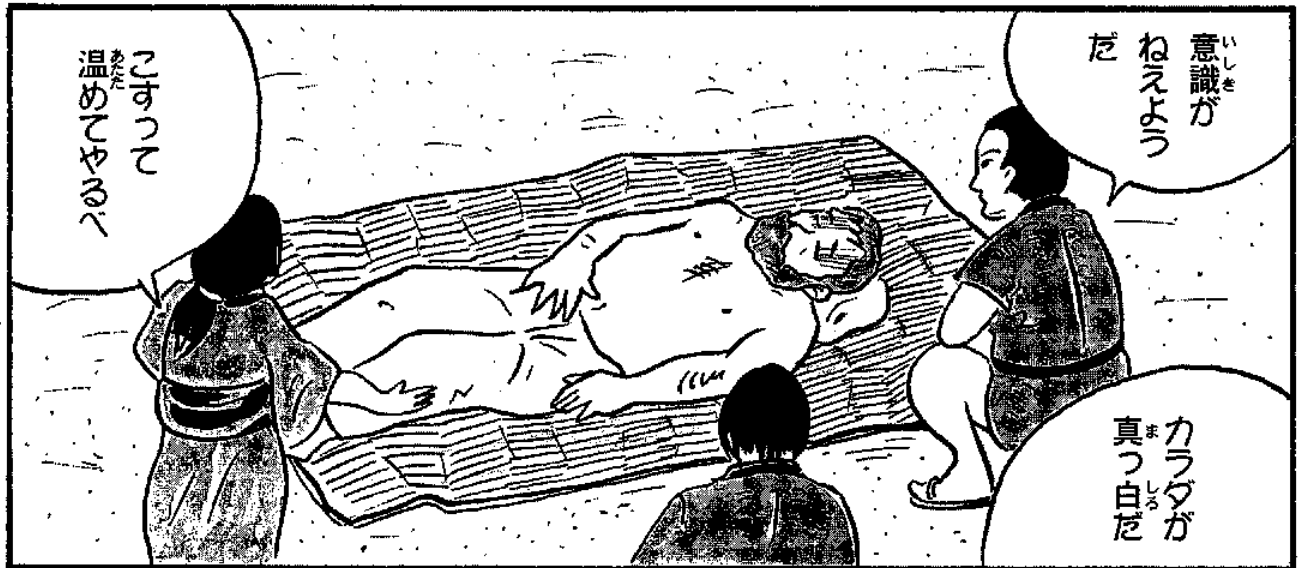
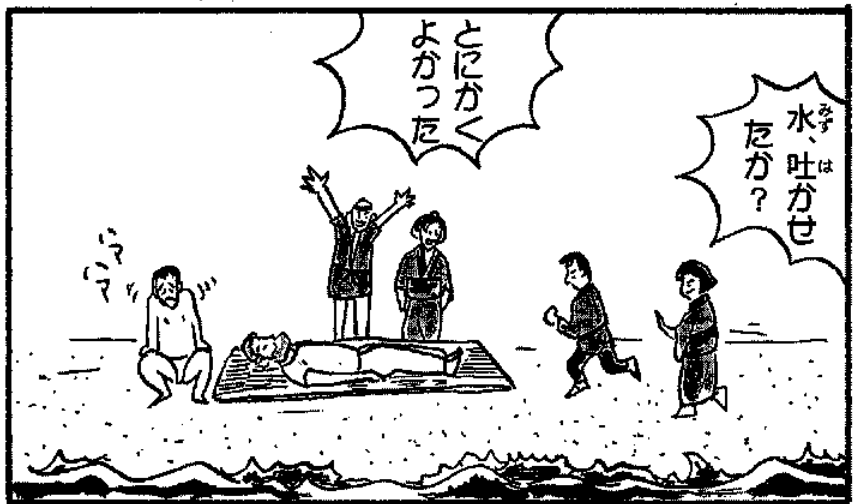


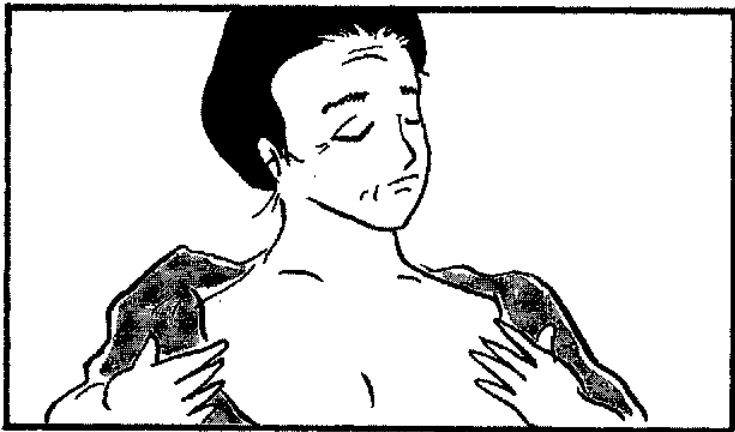
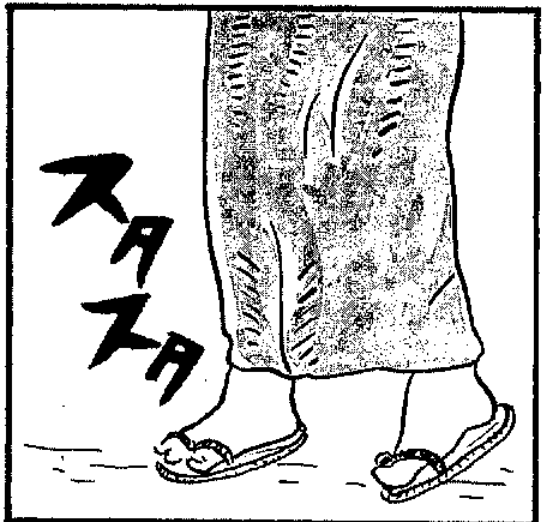
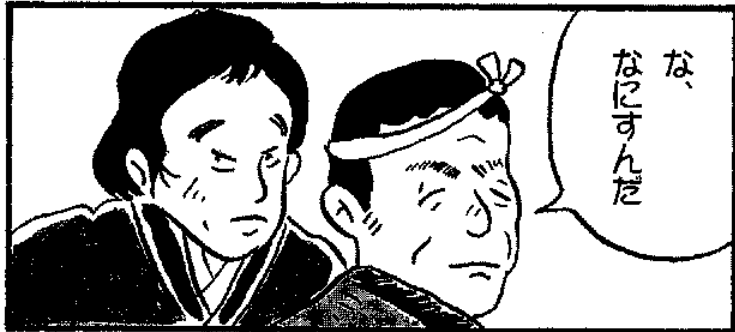
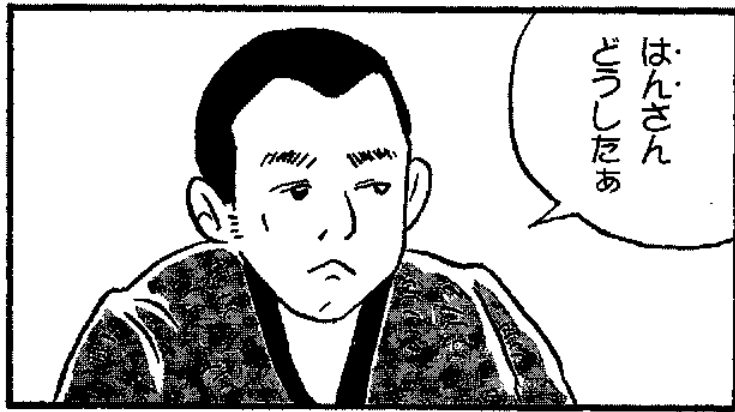
よく
やったなあ



ヘンリー・ウィルソン (42)

ハァハァ

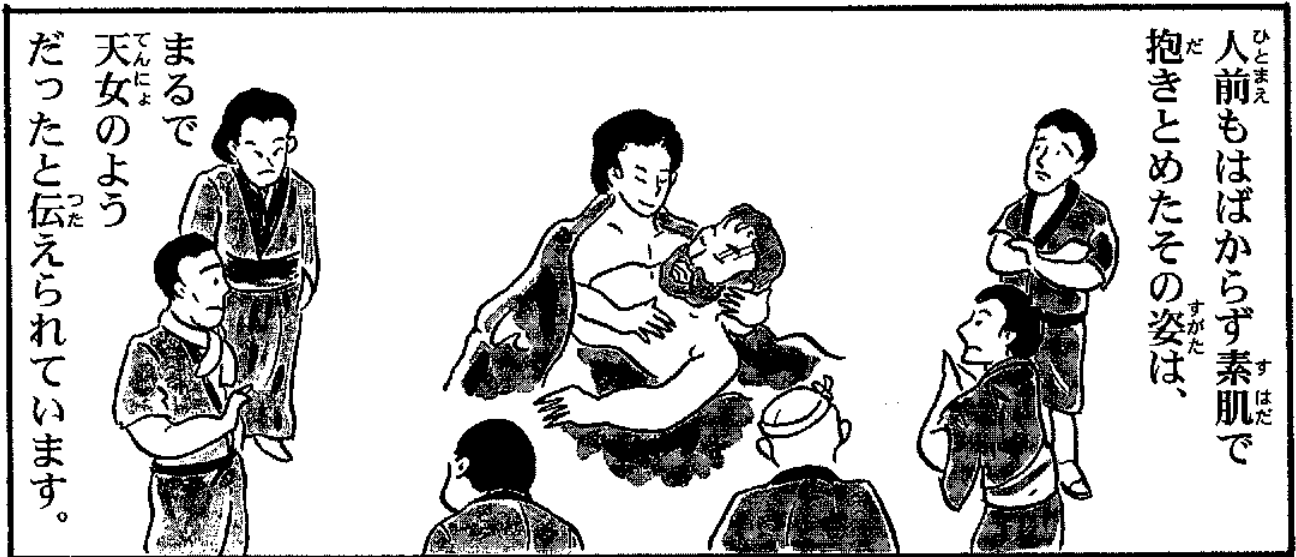




急に暖めるより、
人肌でゆつくり暖めるほうが
いいことを知っていたのです。
たとえ初めて見る外国人でも、
助けたいという気持ち
が
そうさせたのでしよう。



漁夫・工藤吉右衛門の妻、
「はん」は、以前に凍死寸前の
人を助けたことがあり、寒さで
極度に弱っている者は、



ひとまえもはばかり素肌で
抱きとめたその姿は、

まるで
天女のように
だったと伝えられています。

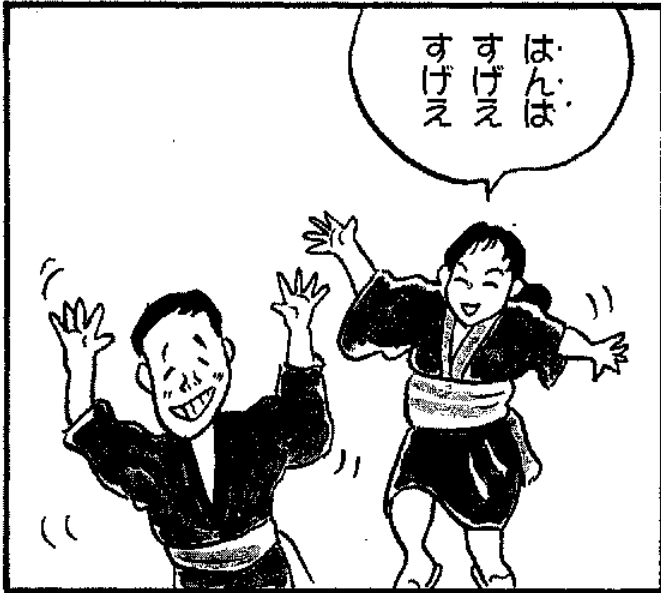
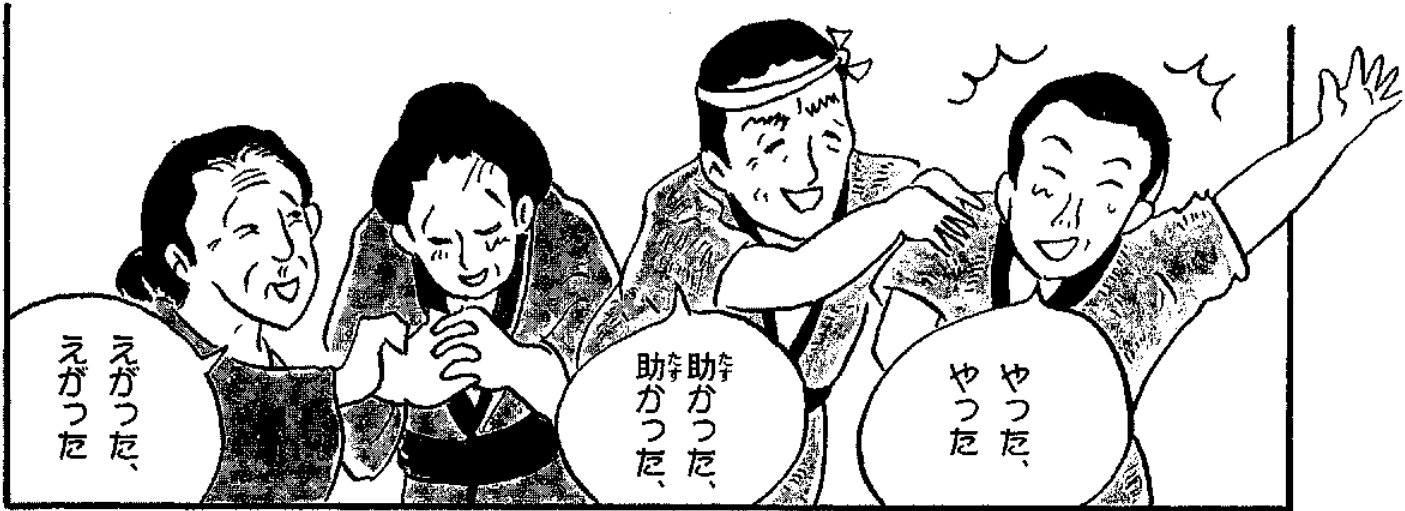


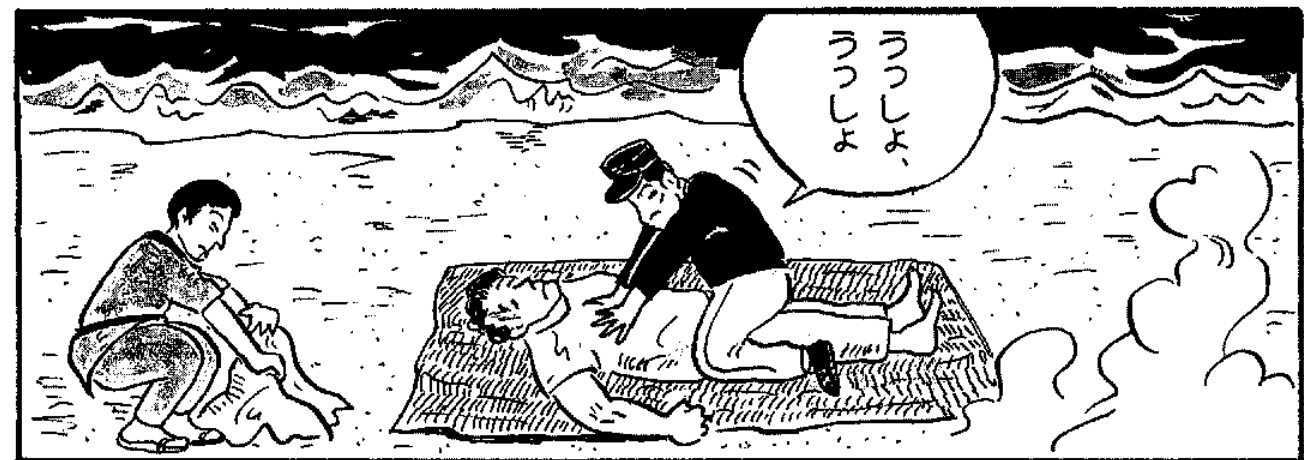
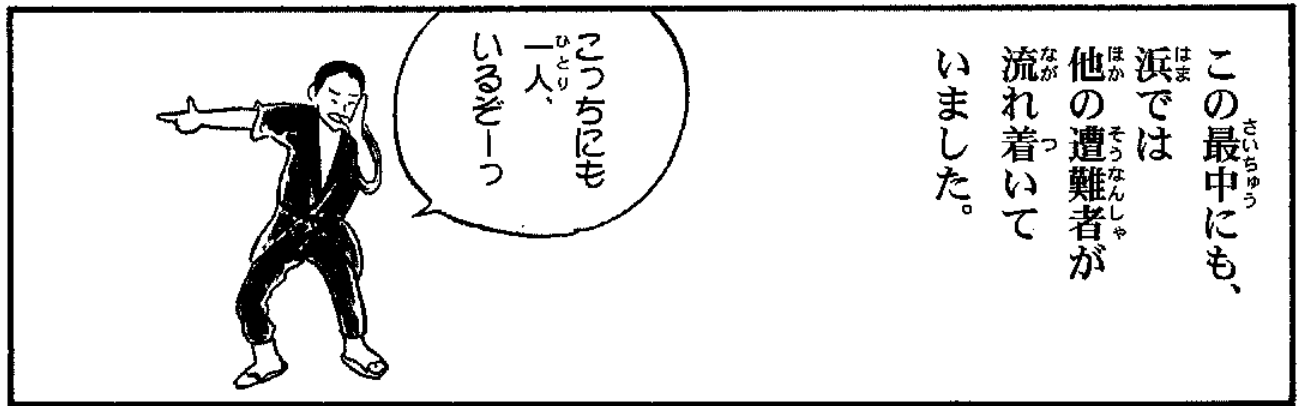
死ぬな、
生きろ

かみさま、ほとけさま
神様、仏様
助けて
ください



あ、目が開いた。
気がついたか

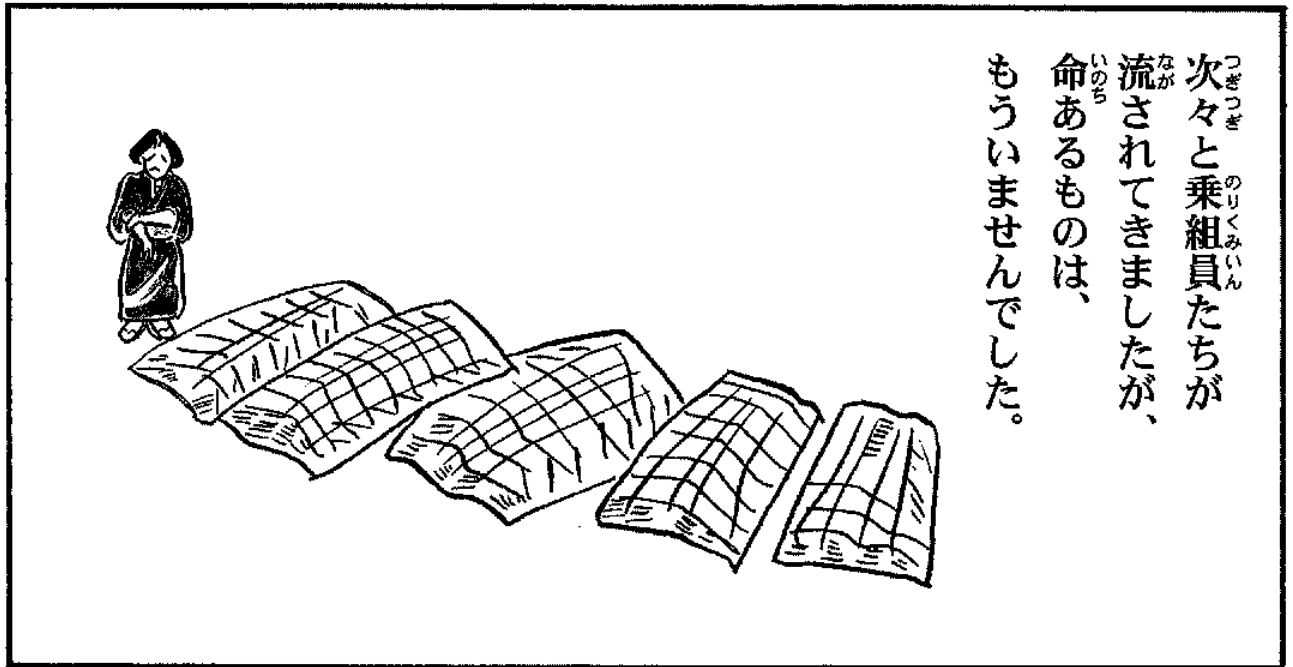








ダメだ、
残念だけど



次々と乗組員たちが
流されてきました、
命あるものは、
もういませんでした。



時間が過ぎるのを忘れ、
すでに
救助開始から
3時間が
たちました。



あと何人残っているのか
知るよしもない村人たちは、
浜から離れません。

第2話

— 村人たち —

冷つめたくなつた体からだを暖あためるために、
火ひを燃もやし続つづける人ひと、
そのための枯かれ枝えだを集あつめる人ひと、
みそ汁しるを煮にえる人ひと、……。
みんな、それぞれが分ぶん担たんして、
動ごきまわっていました。





明治二十二年ごろ

津軽半島の北にある車力村は

夏でも冷たい風が吹き、

三年に一回は凶作、不作に

見舞われる貧しい村でした。

小作人である多くの村人は

地主から田を借り

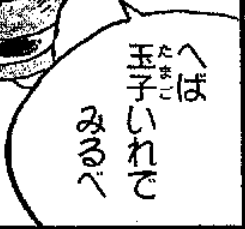
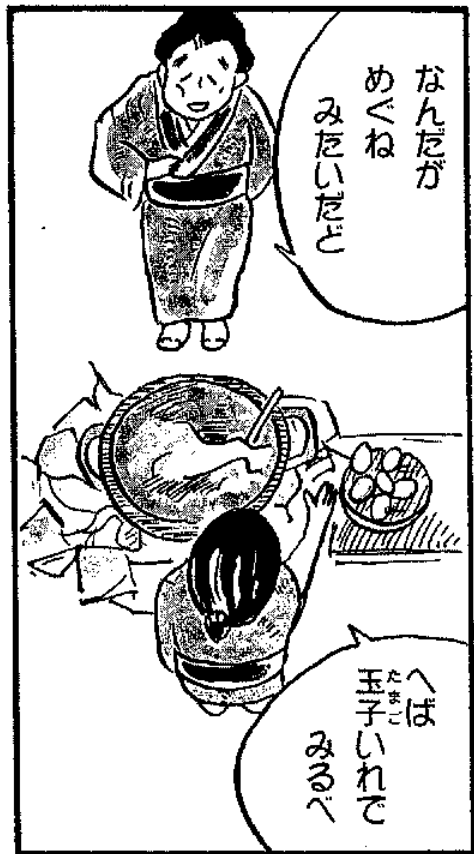
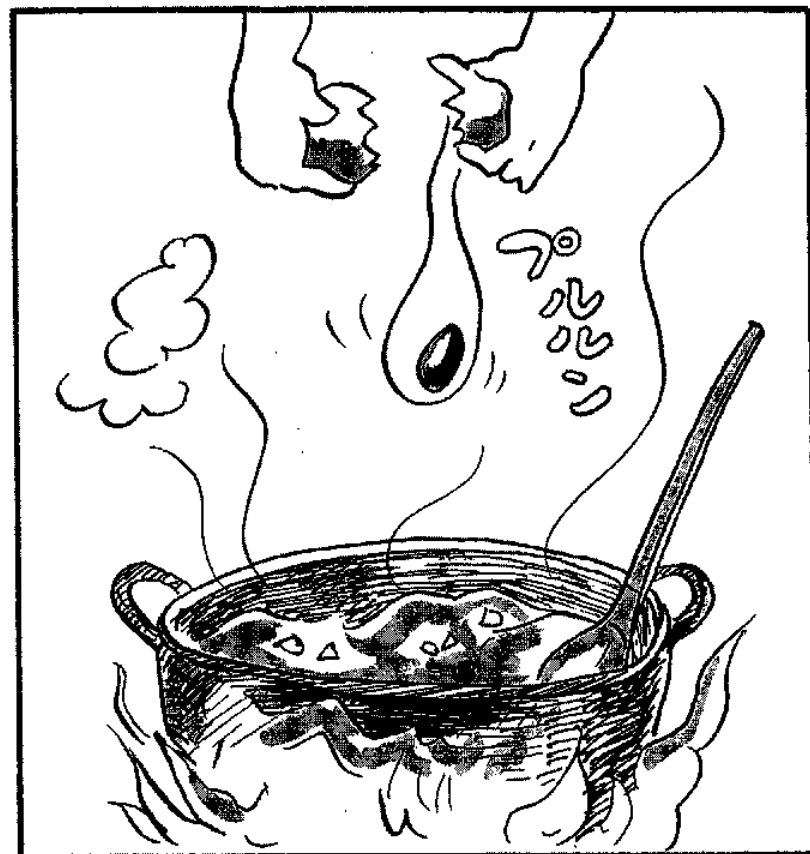
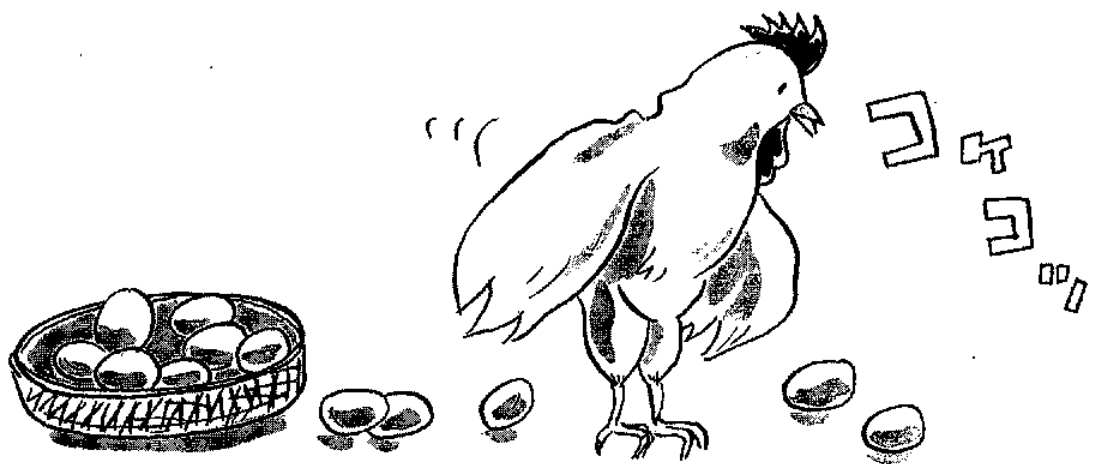
年貢を納めなければ

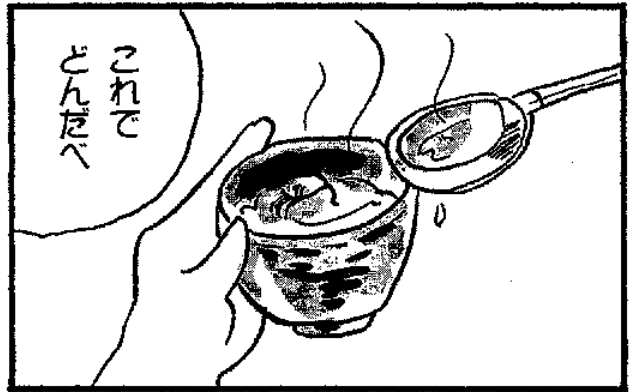
いけませんでした。

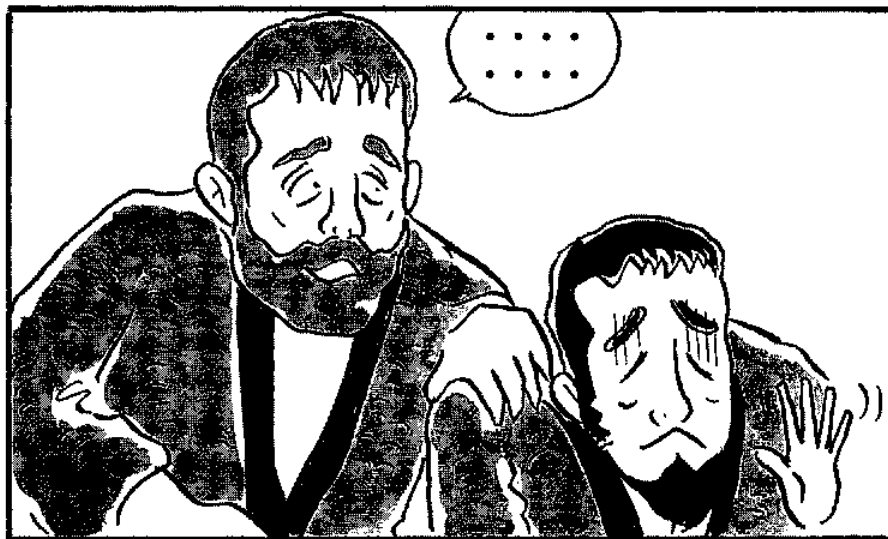
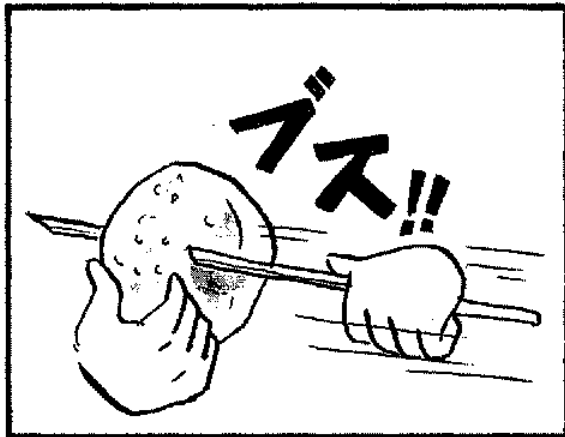
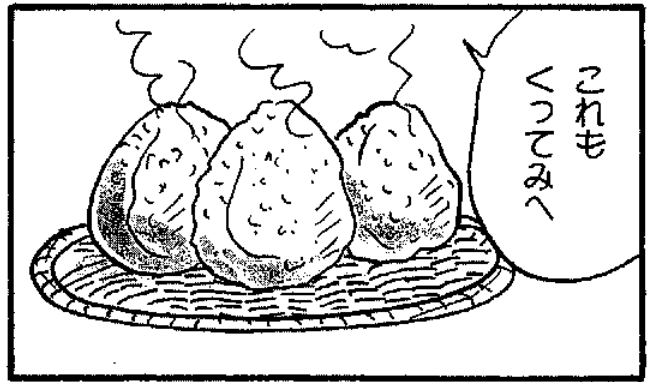
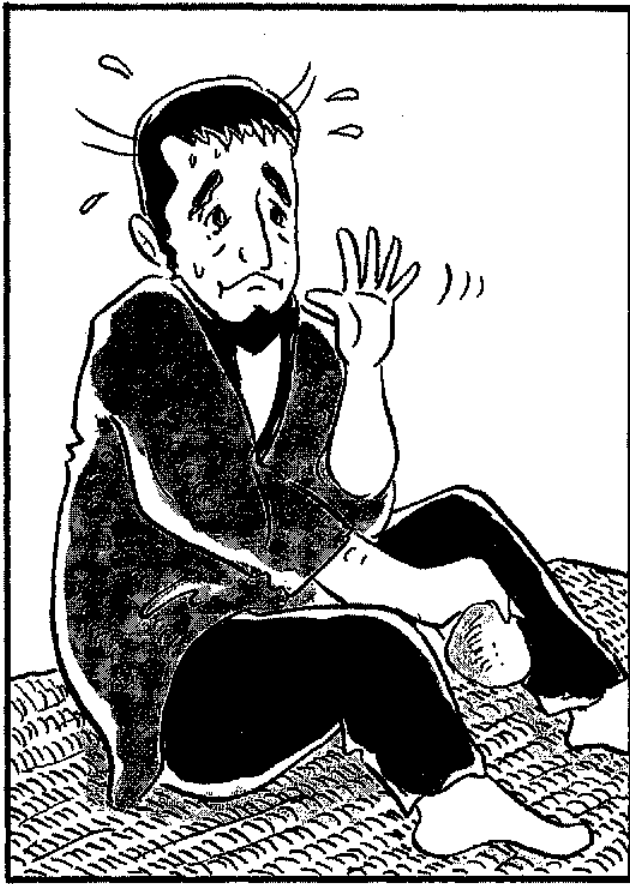


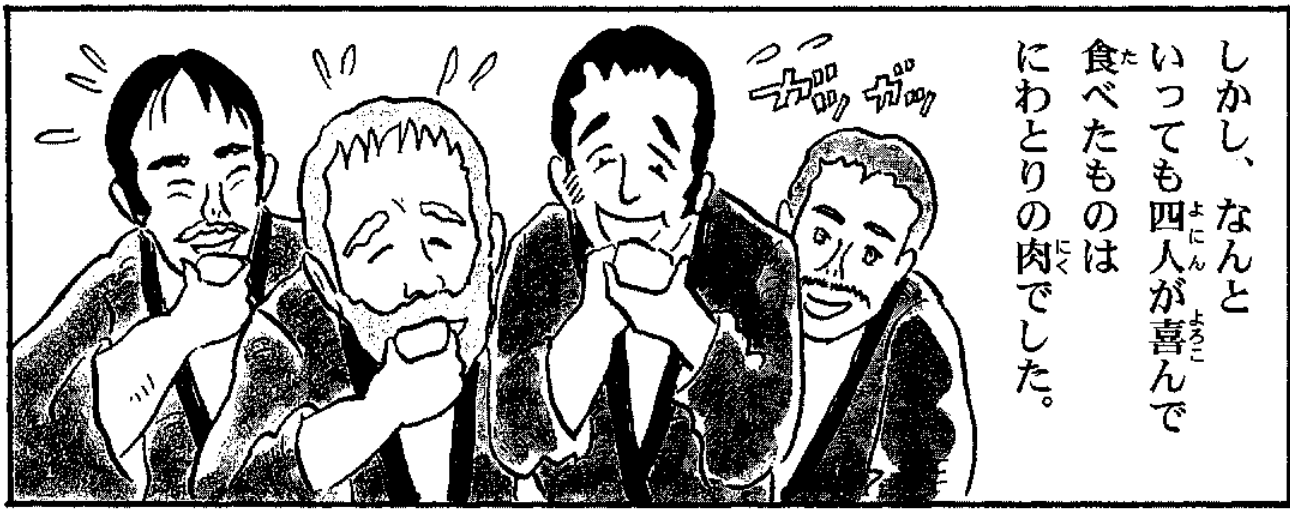
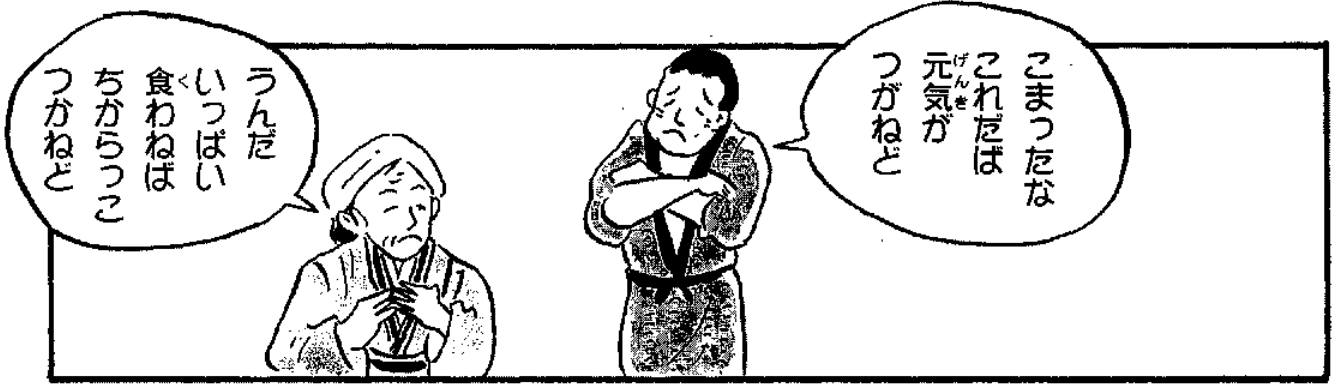
玉子たまごはとても貴重きちょうなもので
食たべるものではなく
売うるものと考えかんがていました。
玉子たまごを産うむ、にわとりは
もつと大切たいせつなものです。
それでも車力村しやりきむらの人々ひとびとは
おしみもなく
命いのちを失うしないかけた遭難者そうなんしゃに
提てい供きょうしました。

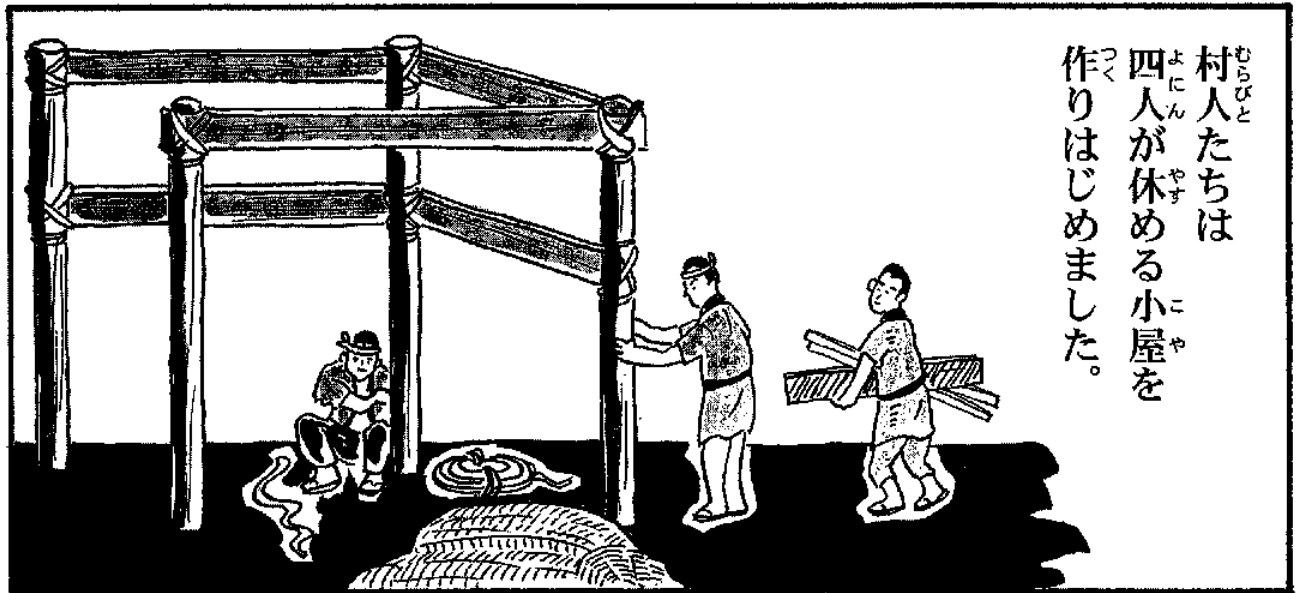








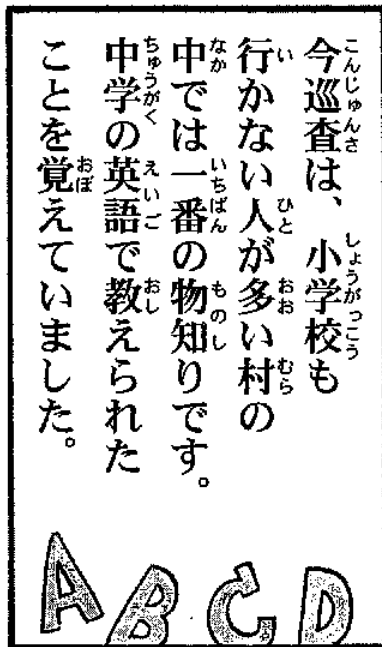




村人たちは
四人が休める小屋を
作りはじめました。



そんな
見たことも
ないもの、
作れねえ



今巡査は、小学校も
行かない人が多い村の
中では一番の物知りです。
中学の英語で教えられた
ことを覚えていました。

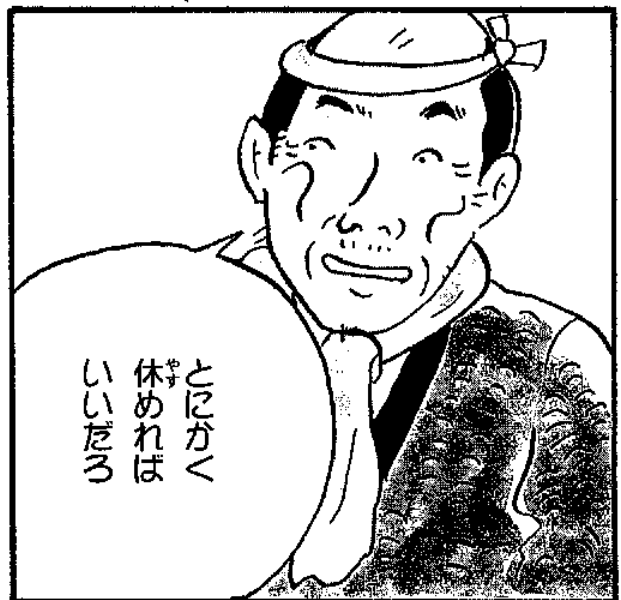
A B C D



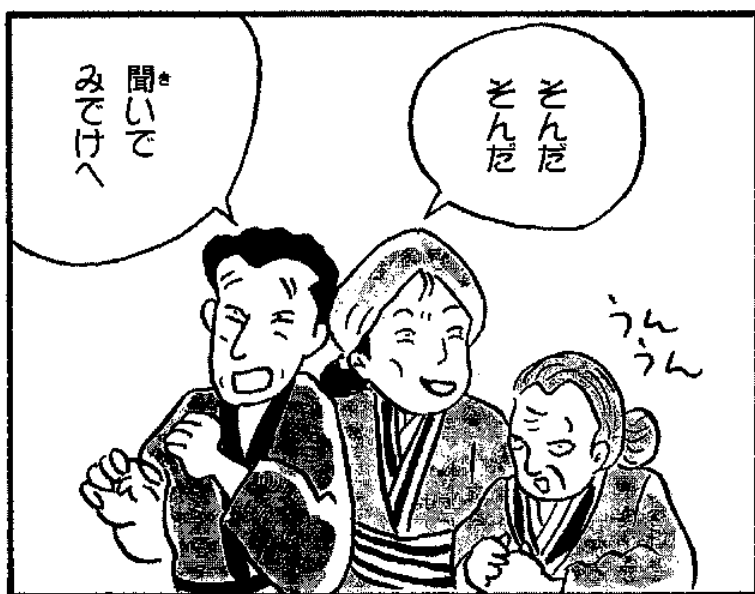
外国では、
ベッドとか
いっものだ
寝るのじょうず

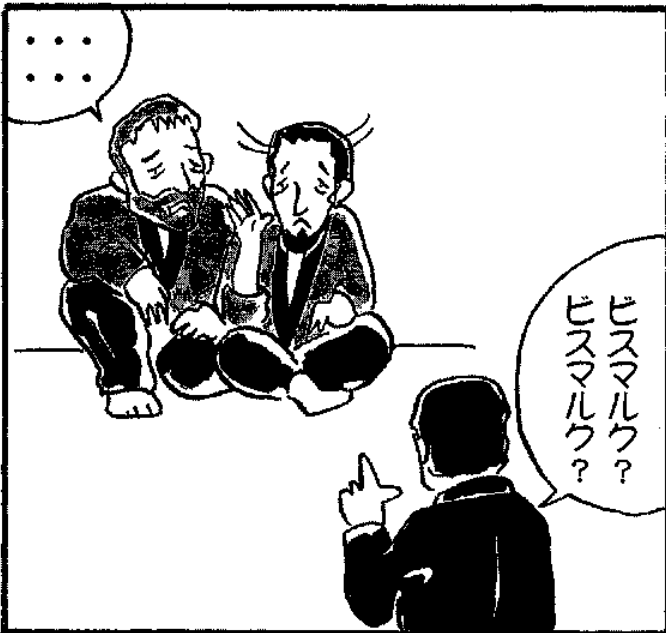


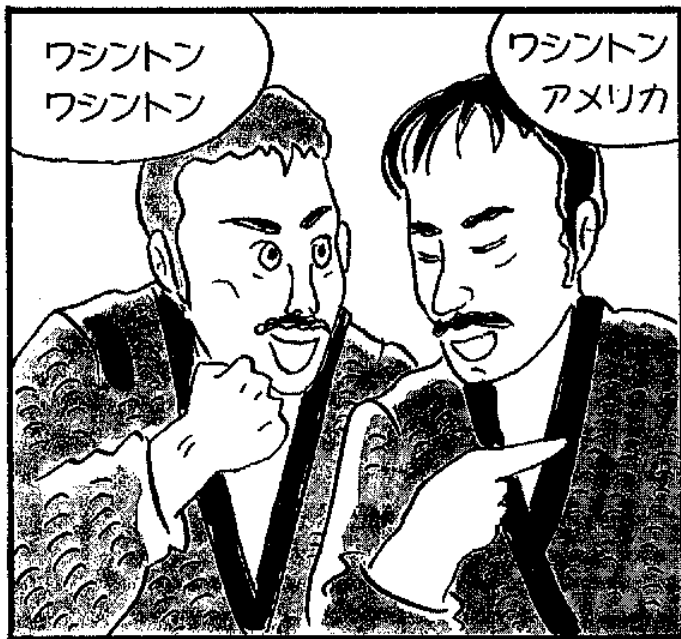
この
桃太郎の
鬼みたいな
人たちが、
どこの
国から
来たん
だべ

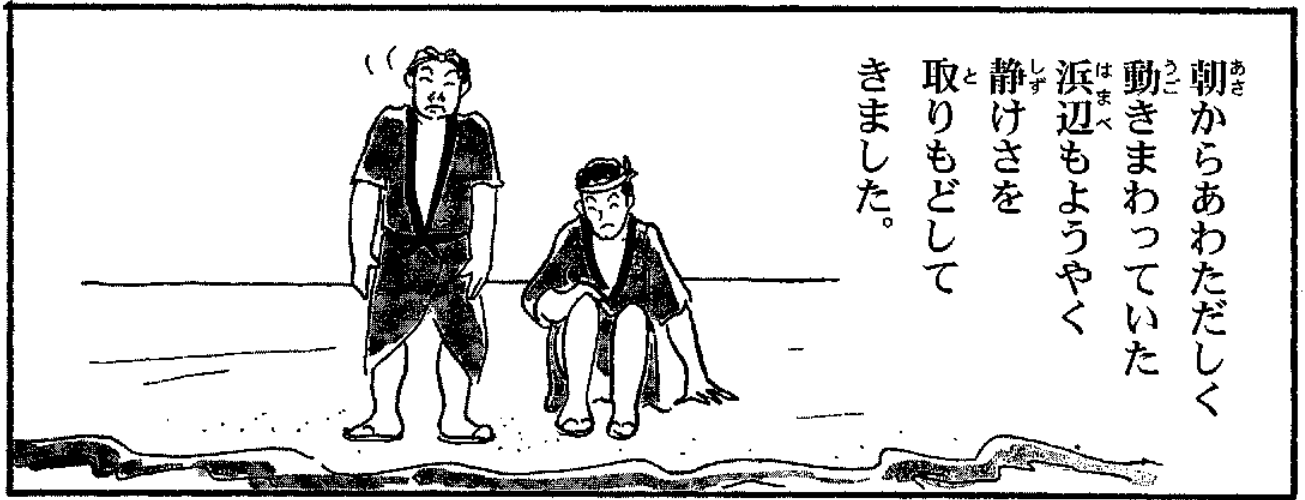


とにかく
休めれば
いいだろ









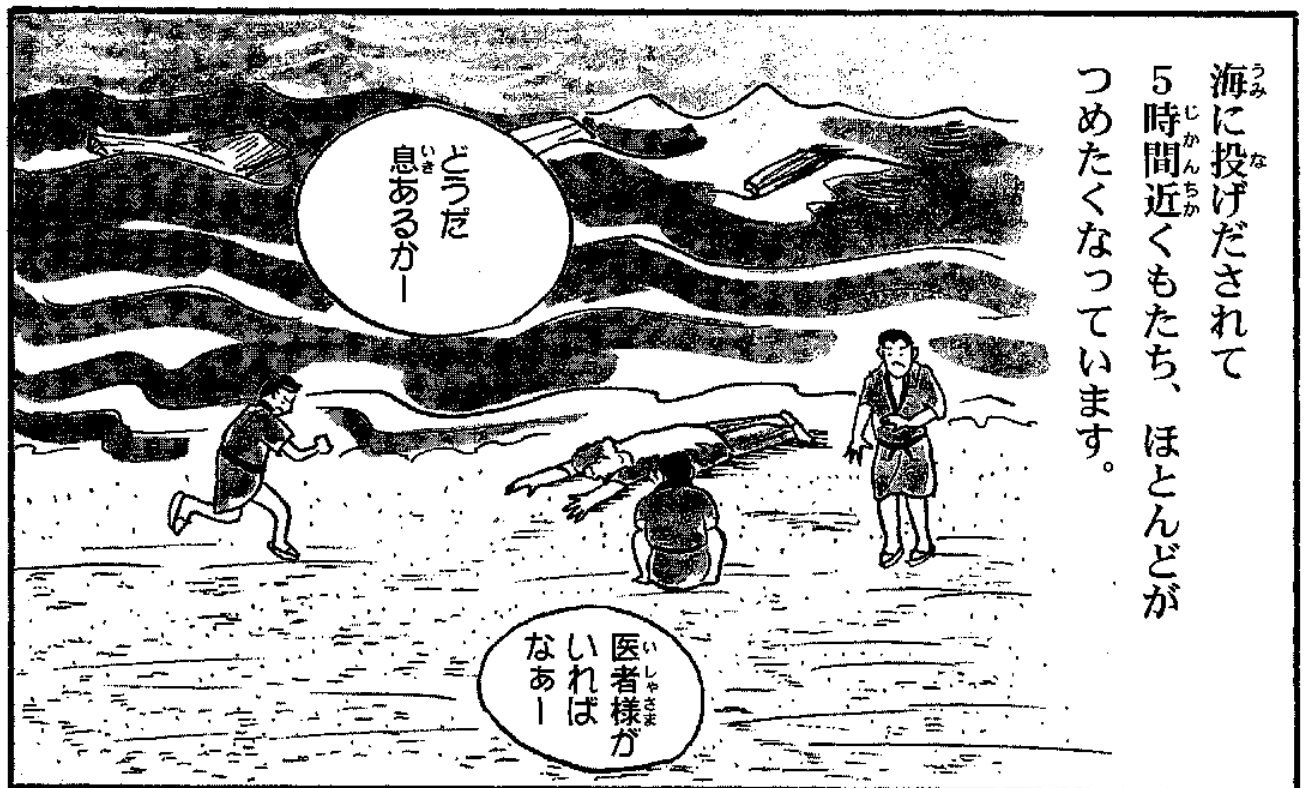
朝からあわただしく
動きまわっていた
浜辺もようやく
静けさを
取りもどして
きました。



よし！
いって
引き
上げるぞ！



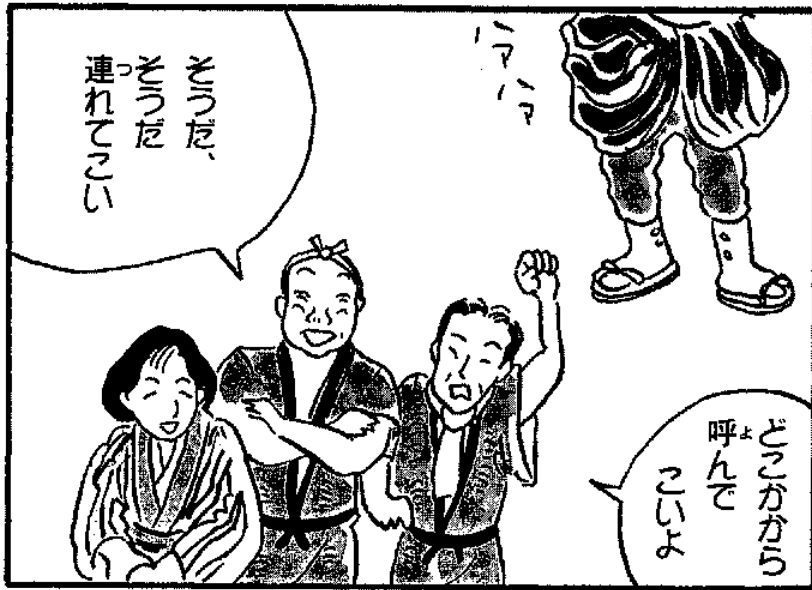
しかし、また
流れつく乗組員が
います。
おーい
むじの
浜にまいるぞー



海に投げだされて
5時間近くもたち、ほとんどが
つめたくなっています。

医者様が
いれば
なあー

どつた
息が
あがるかー



そつだ
そつだ
連れてこい

どこかから
呼んで
こいよ



医者に
診せたいけど、
村には
いなえしなあ



誰か
県庁さ
行って医者様
よこして
もらうやつ
頼めばいい

おつ
村長



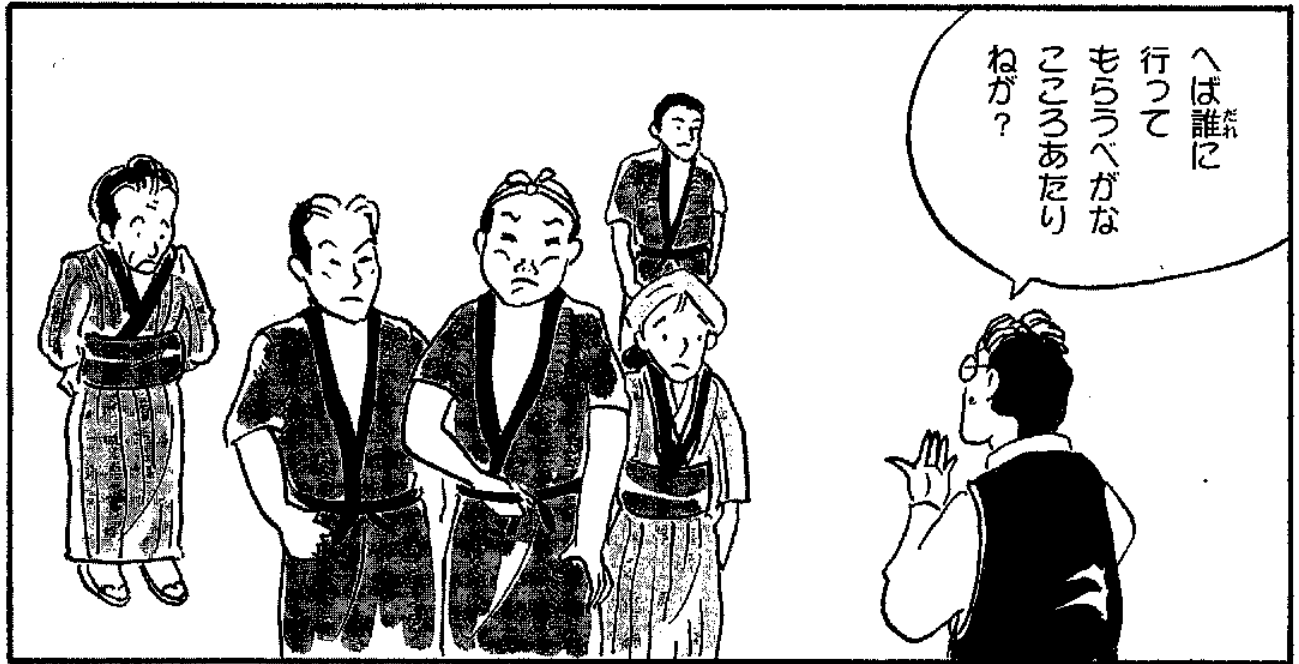
それだば
県庁さ
たのめば
いいんでねが

車力村長
北沢石太郎



それに
これは大事件だぞ
早く、県庁さ
知らせねばまいねど

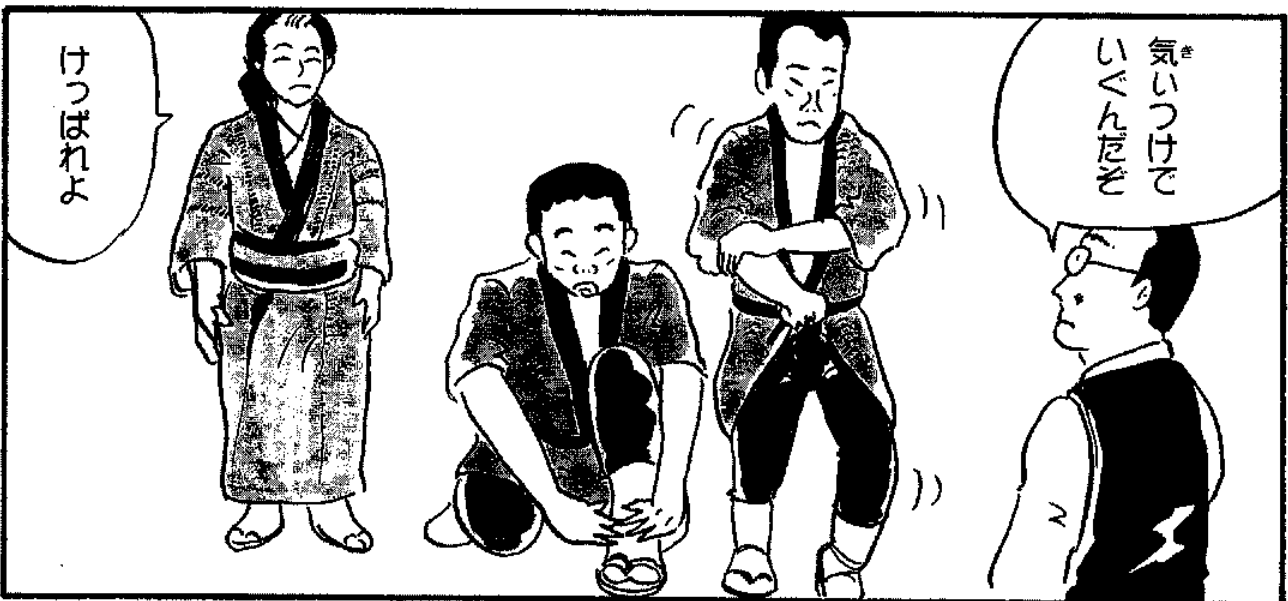
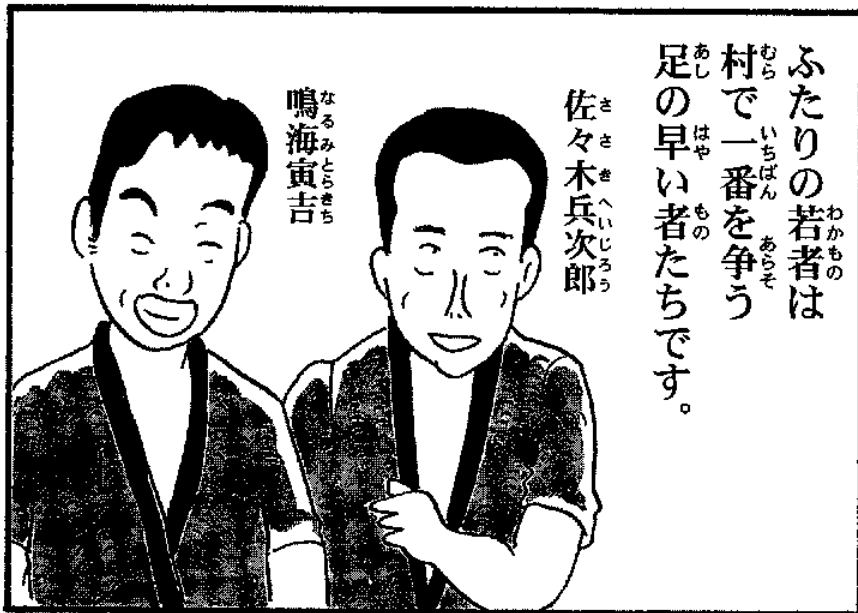
どんたべ
北沢助役さん

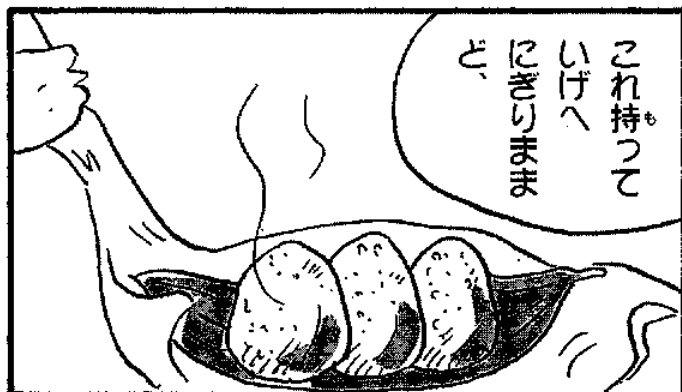
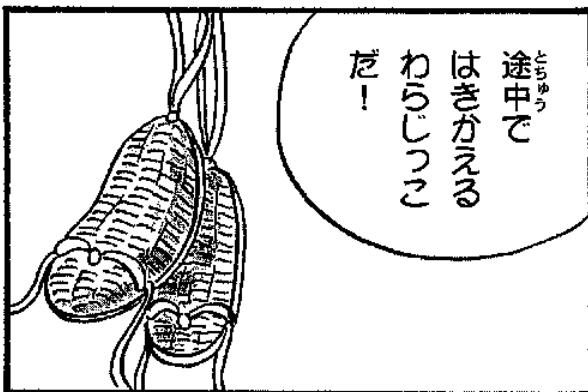


第3話

—
二人^{ふたり}が走る^{はし}
—







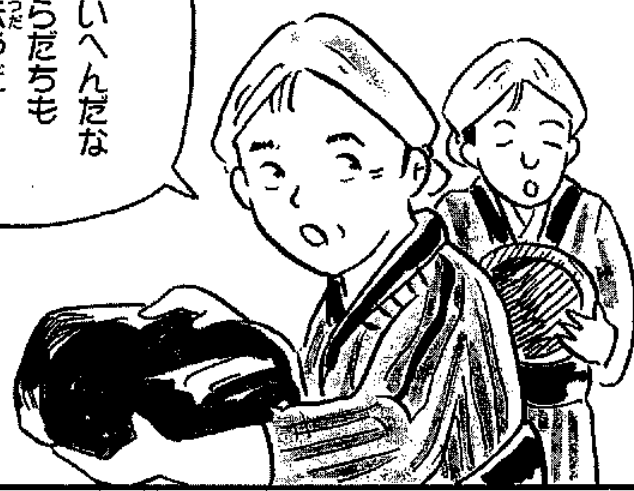
こうして、夜道を走る
覚悟で二人は走り始めました。





浜辺には、この頃
とみやち とよとみ しやりき うしがた
 富港、豊富、車力、牛瀧など
しやりきむら ひと
 車力村の人たちだけでなく
とな むら たておかむら ひらたき
 隣り村の館岡村の平滝や
どうぎまか そんらく ひとひと
 筒木坂の村落の人々も
きゆうじよかつどう
 救助活動に
 加わっていました。

たいへんだな
 おおださまも
てくだ
 手伝ってください



にわとり
 もつてきてほしい



わら布団
ふとん
 もつてきてほしい



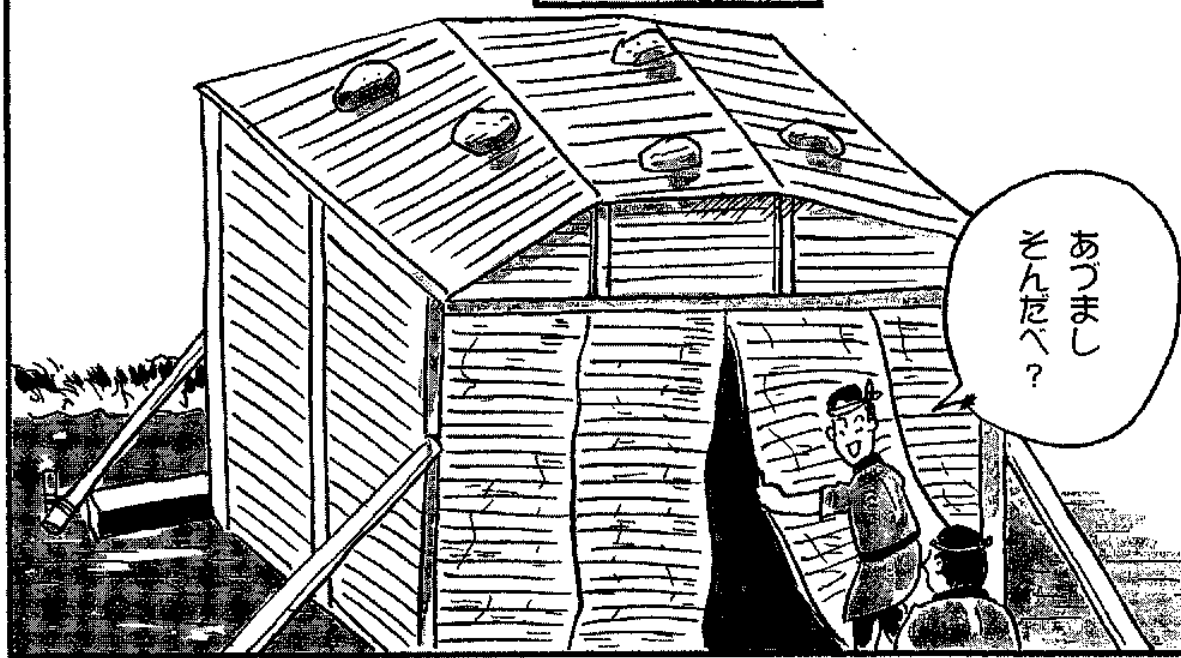
おい

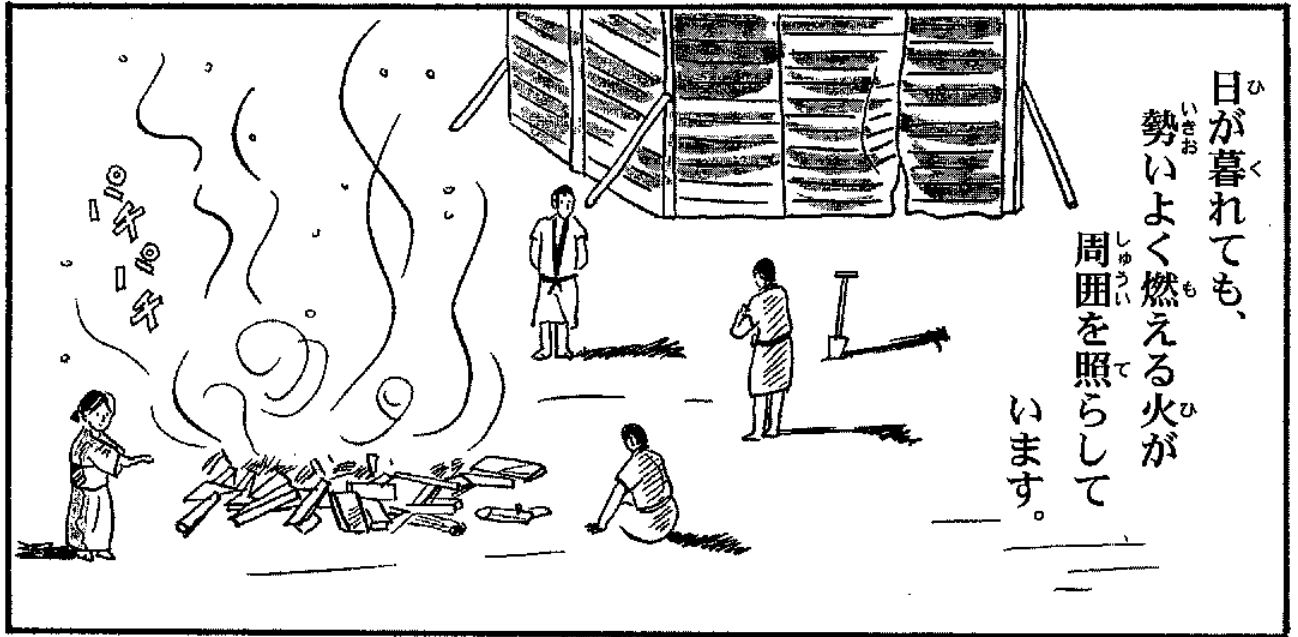
たまご
 玉子も
 あるよ



小屋もできあがりました。

あづまし
 さんだへ？





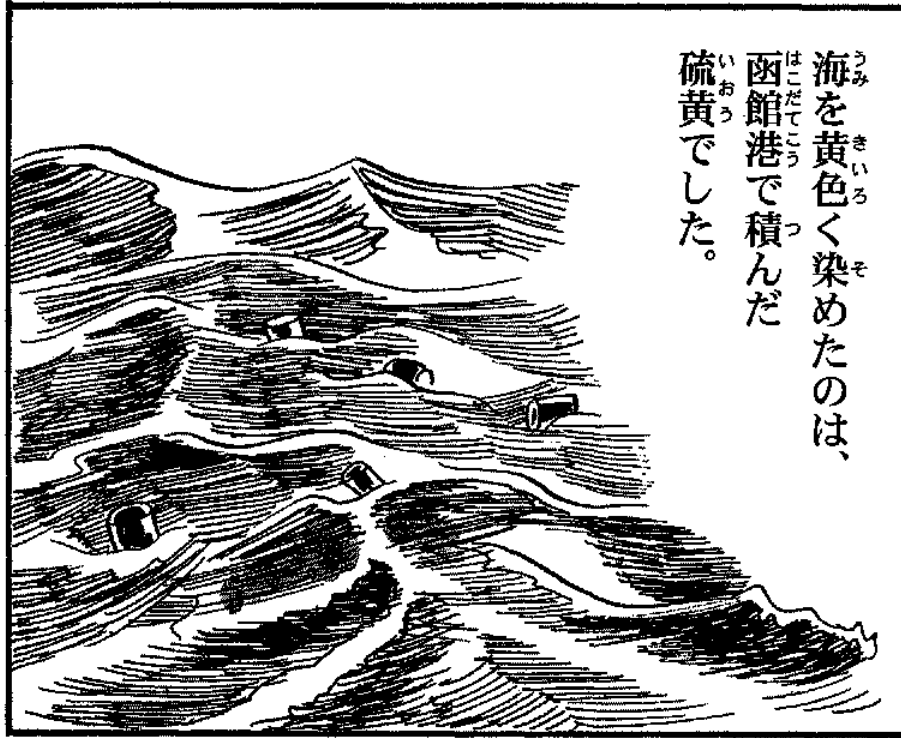
日が暮れても、
勢いよく燃える火が
周囲を照らして
います。



おい、積み
荷が流れ
着いてきた
みたいだ



浜には船に積まれていた
食料や船具などが
打ち上げられて
きました。



海を黄色く染めたのは、
函館港で積んだ
硫黄でした。



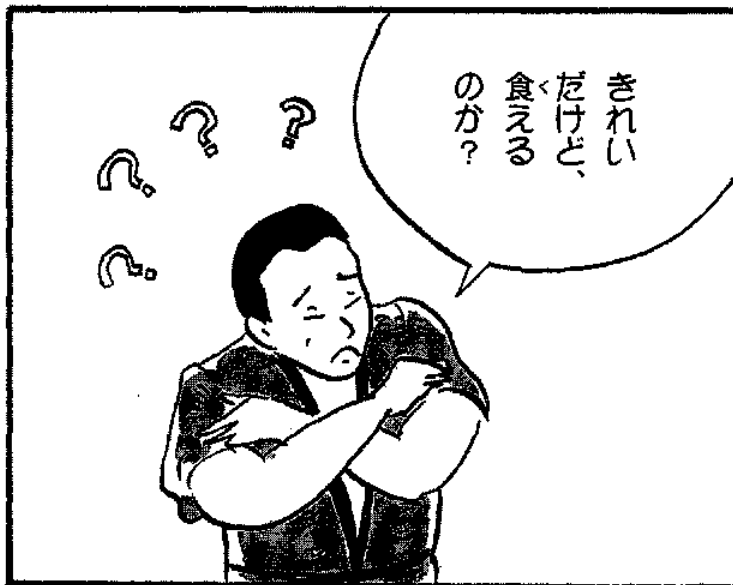
海が真っ黄色だ



村人が初めて見る
缶詰めでした。



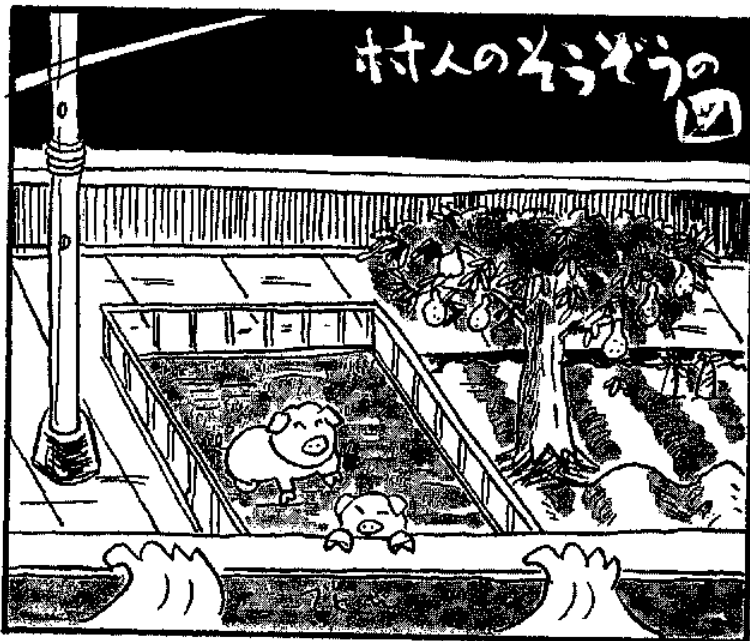
なんだ？
あの丸い
筒みたいの

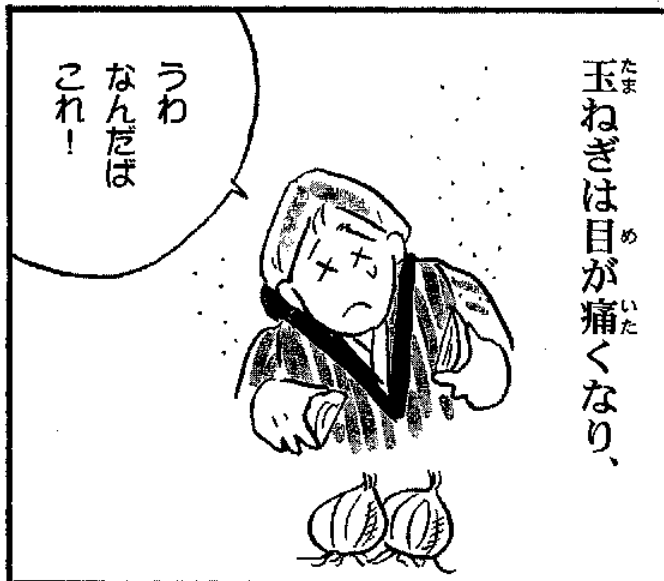


きれい
だけど、
食べる
のか？



これは
桃の絵だ





うわ
なんだば
これ！

玉ねぎは目が痛くなり、



これらの品物は
事故がかたづいてから
皆で分けました。
じゃがいもはとても
喜ばれました。

うめく

ほくほく



木心？
ももがあ？

果物のかんづめは、



土にうめてしまいました。



うわ
涙つこ
てるー

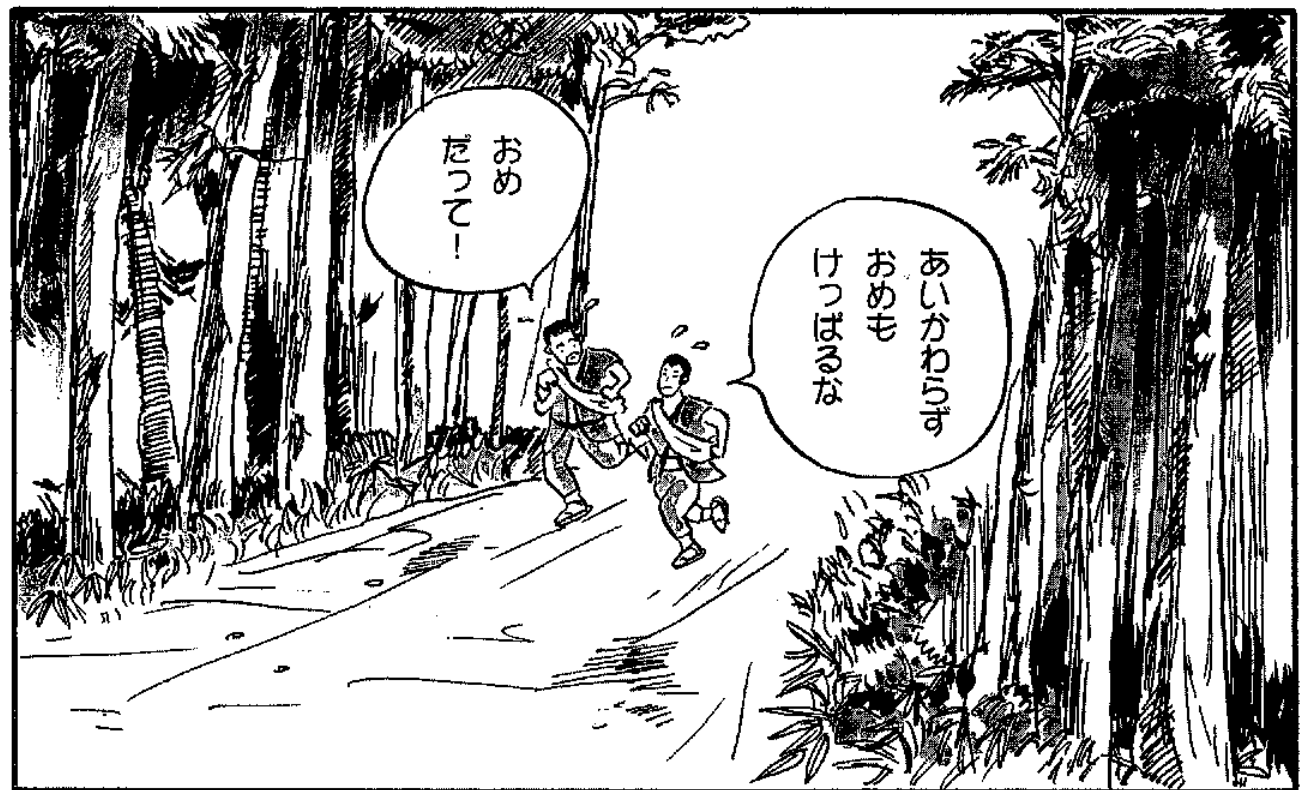
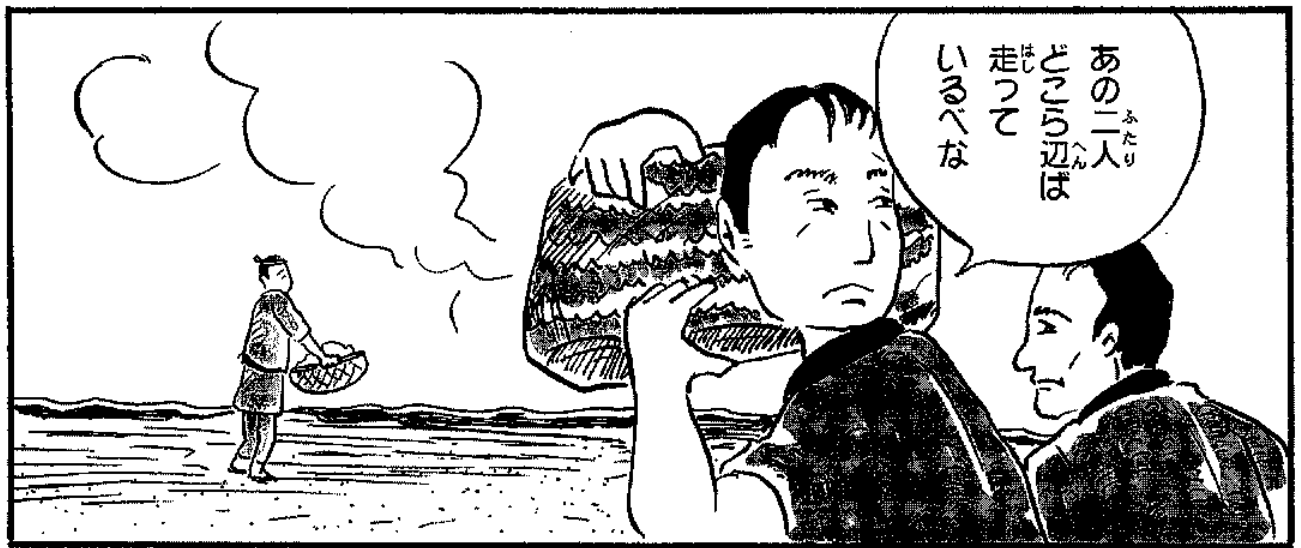


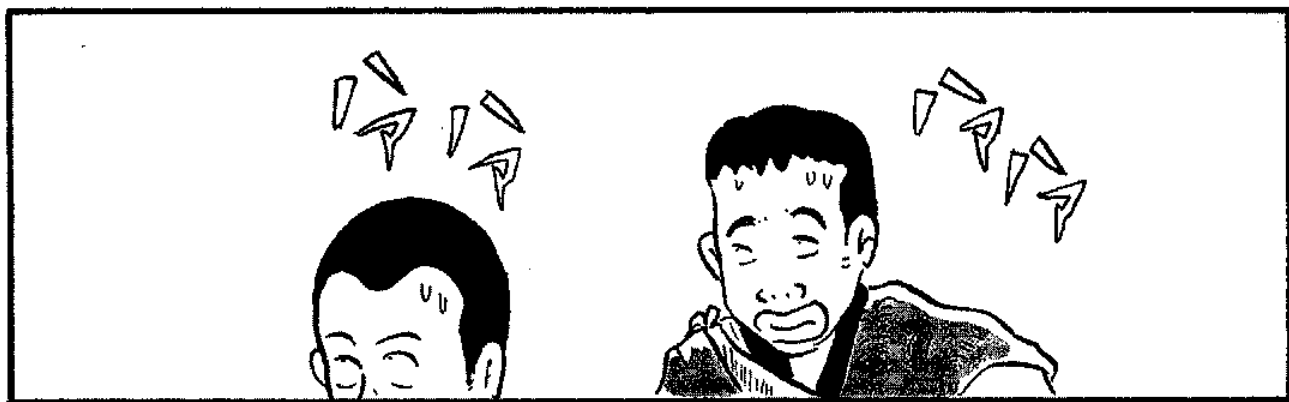
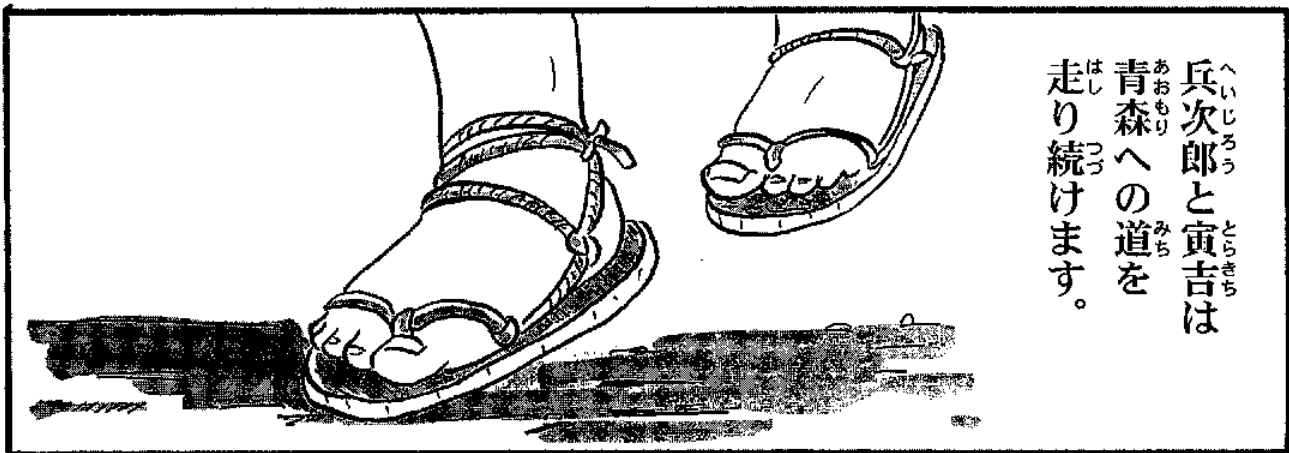
この変わった
かたちの梨は
うめえなあ

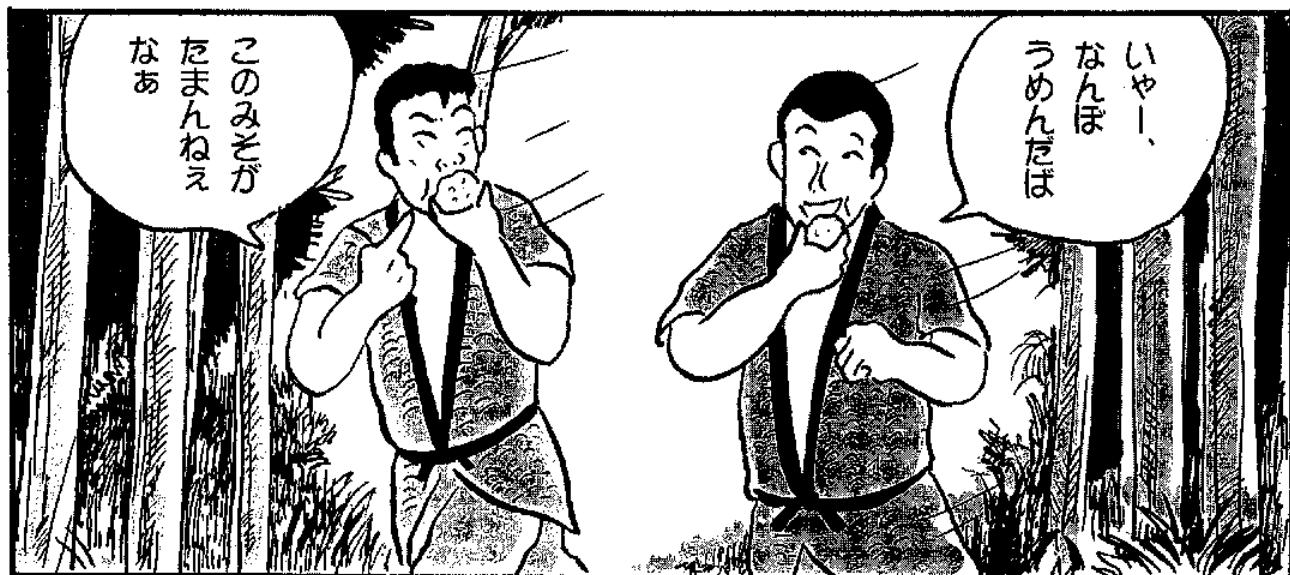
見たことも食べたこともない
品物に村人は大変驚きました。

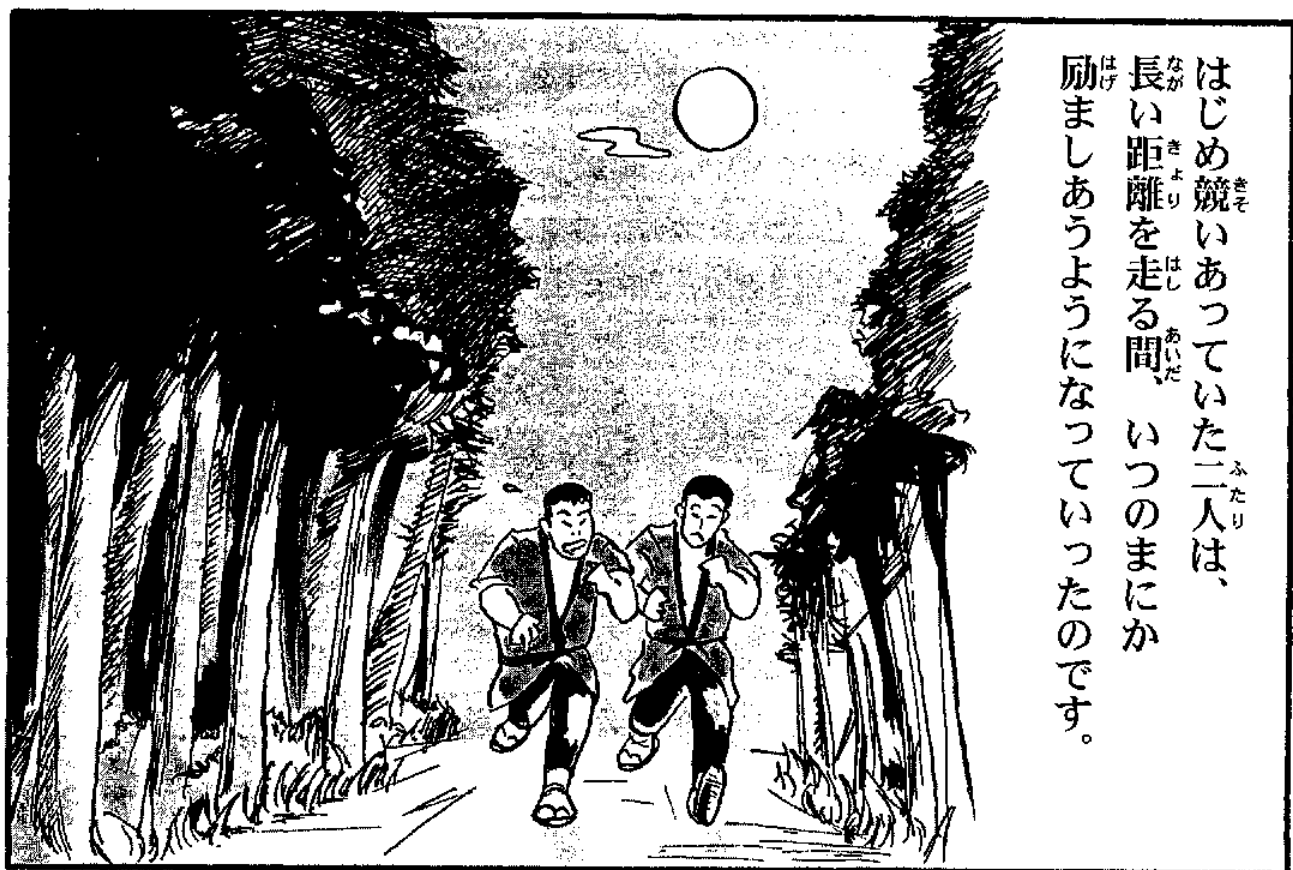
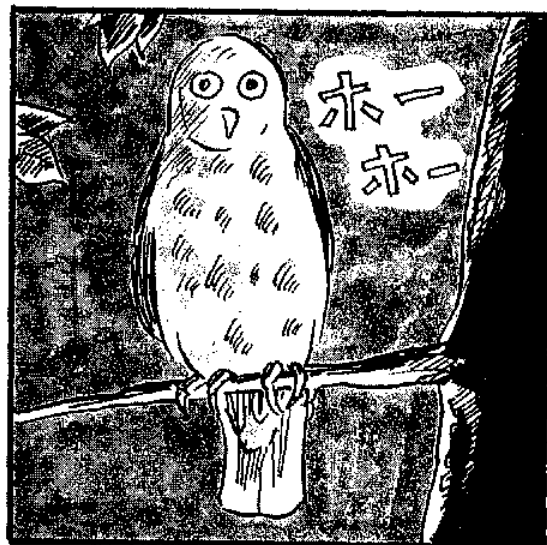


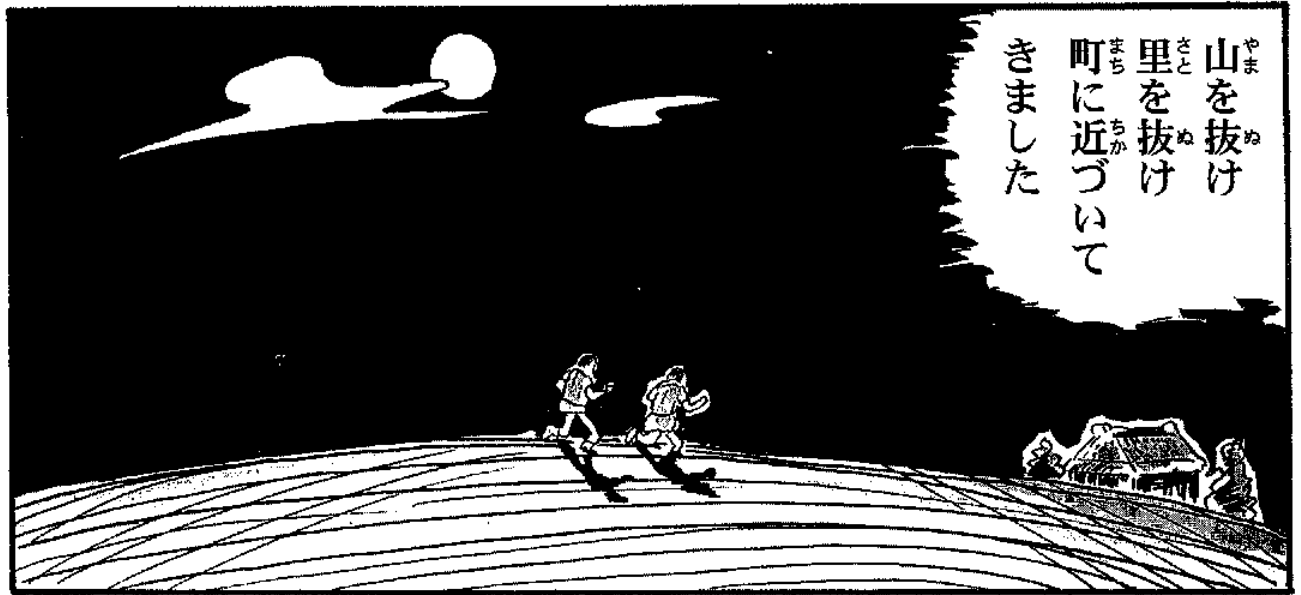
あまりの甘さに
めまいをおこす人が
いたとのことです。

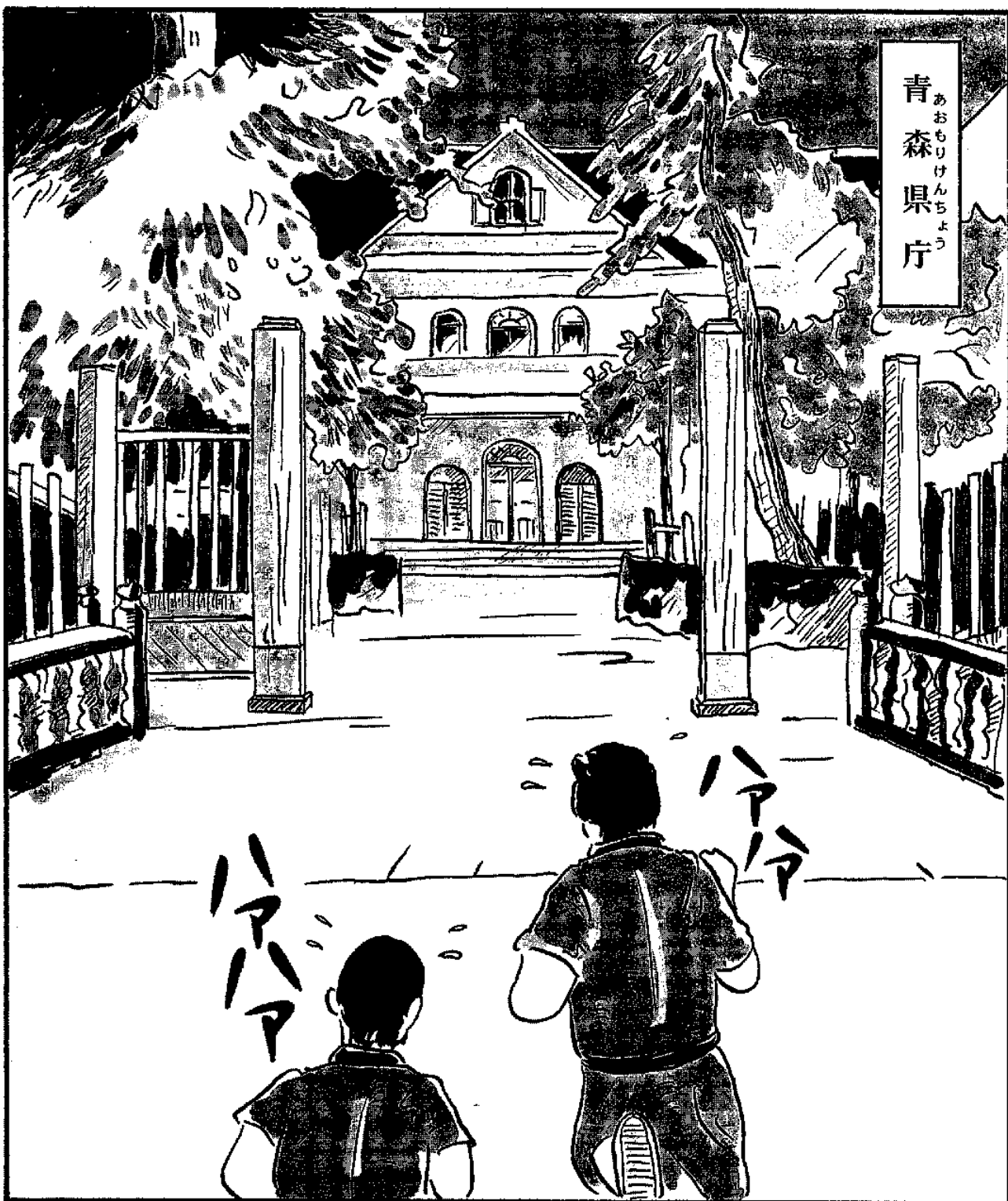


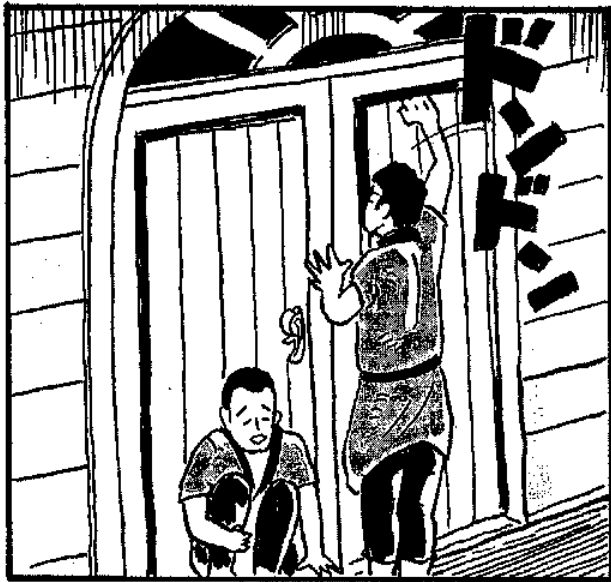












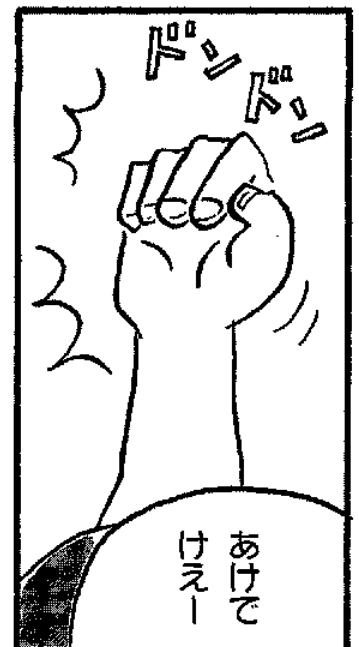
はあー
やっとな
着いだな

「ハハハ」

しやりまむら
車力村を午後3時に出で
よなか
夜中の12時に着きました。
64kmを9時間で走った
ことになります。

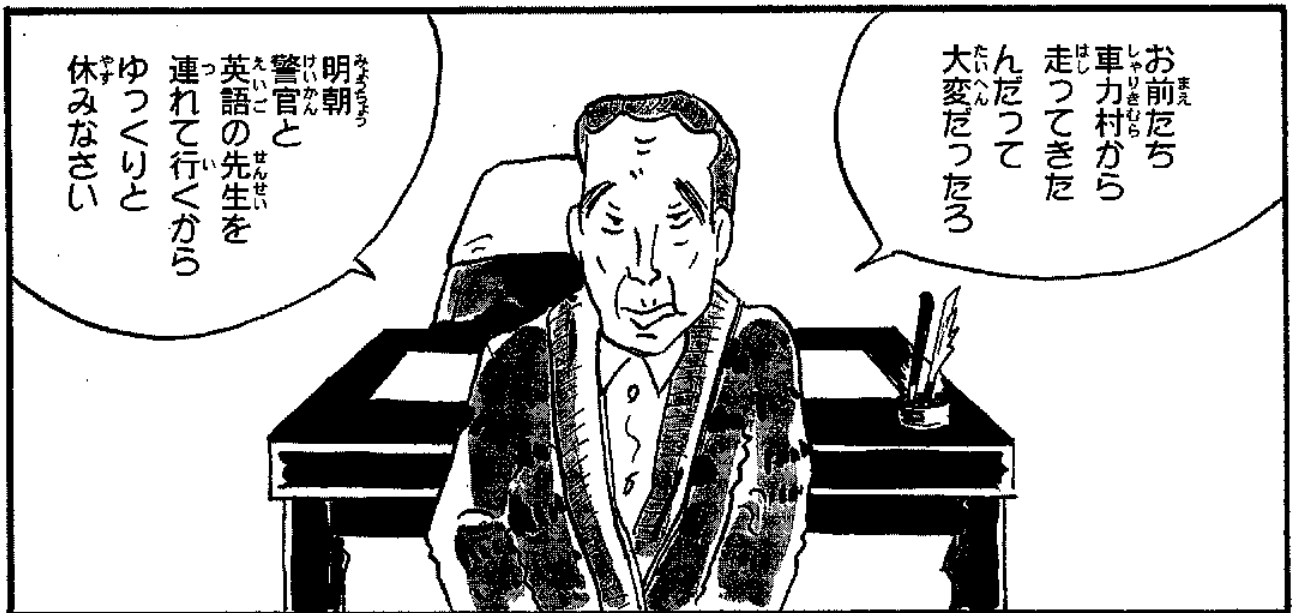
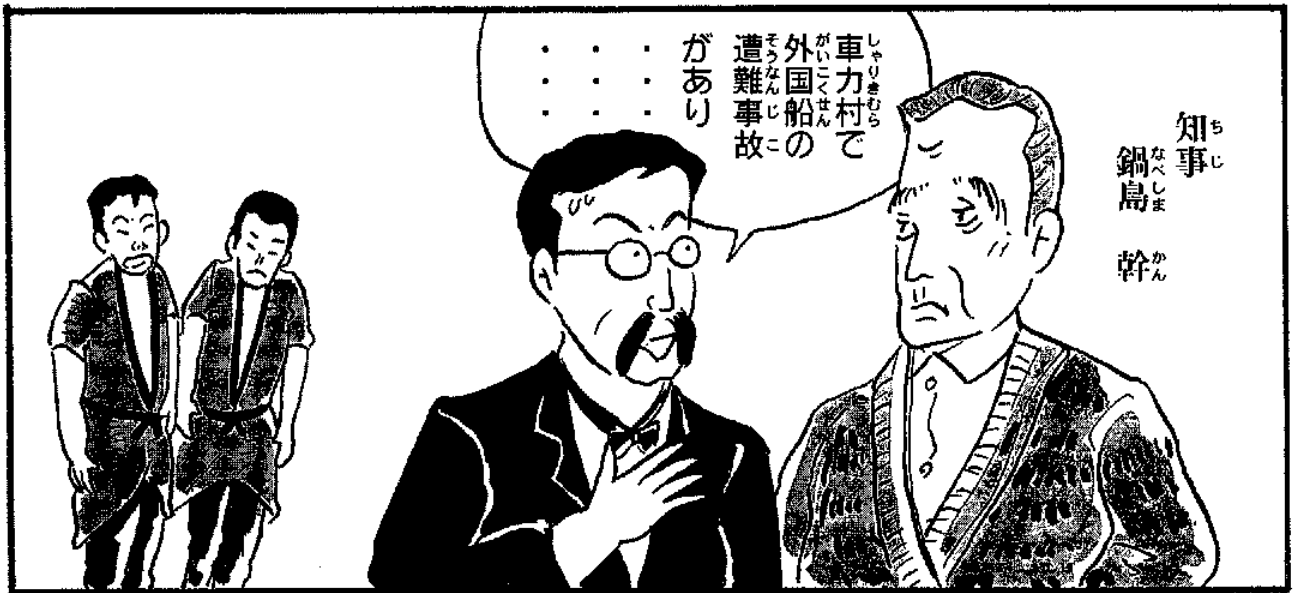


こつたろ
遅くに
どつした



よがった
よがった
これで
大丈夫だ

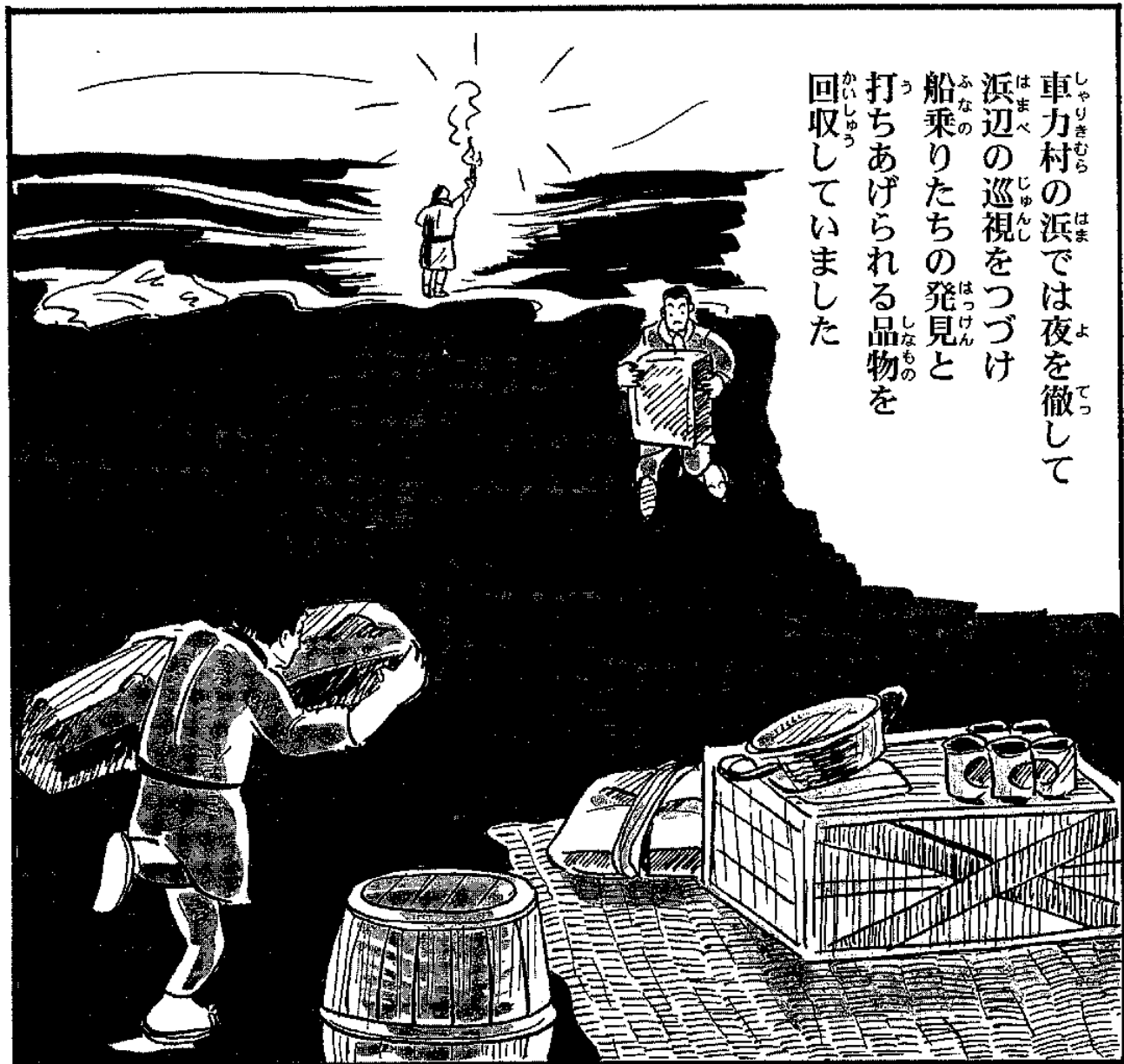
それは
大変なことだ
すぐ知事に
知らせなく
ては！



第4話

— 悲^{かな}
しみ —



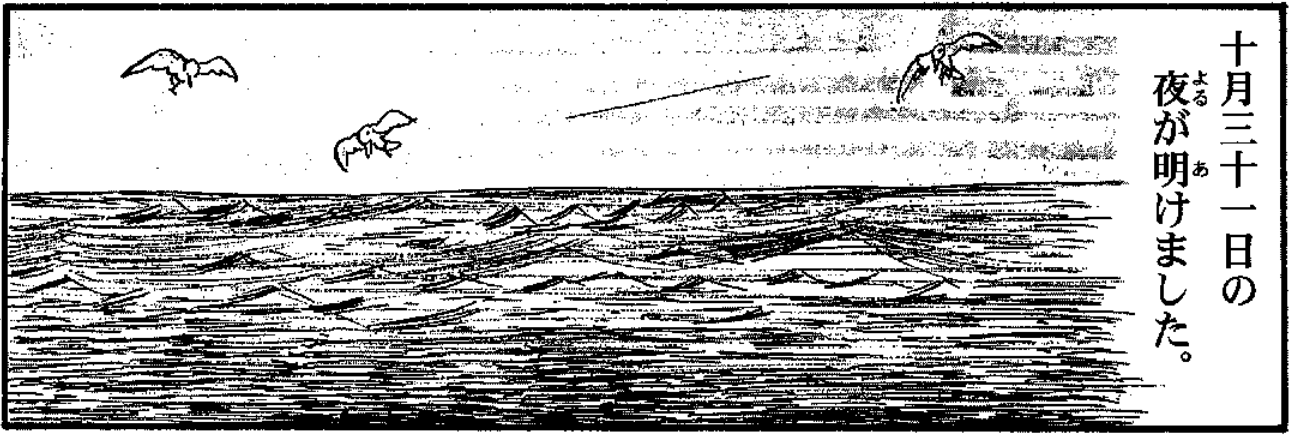


車力村の浜では夜を徹して
浜辺の巡視をつづけ
船乗りたちの発見と
打ちあげられる品物を
回収していました

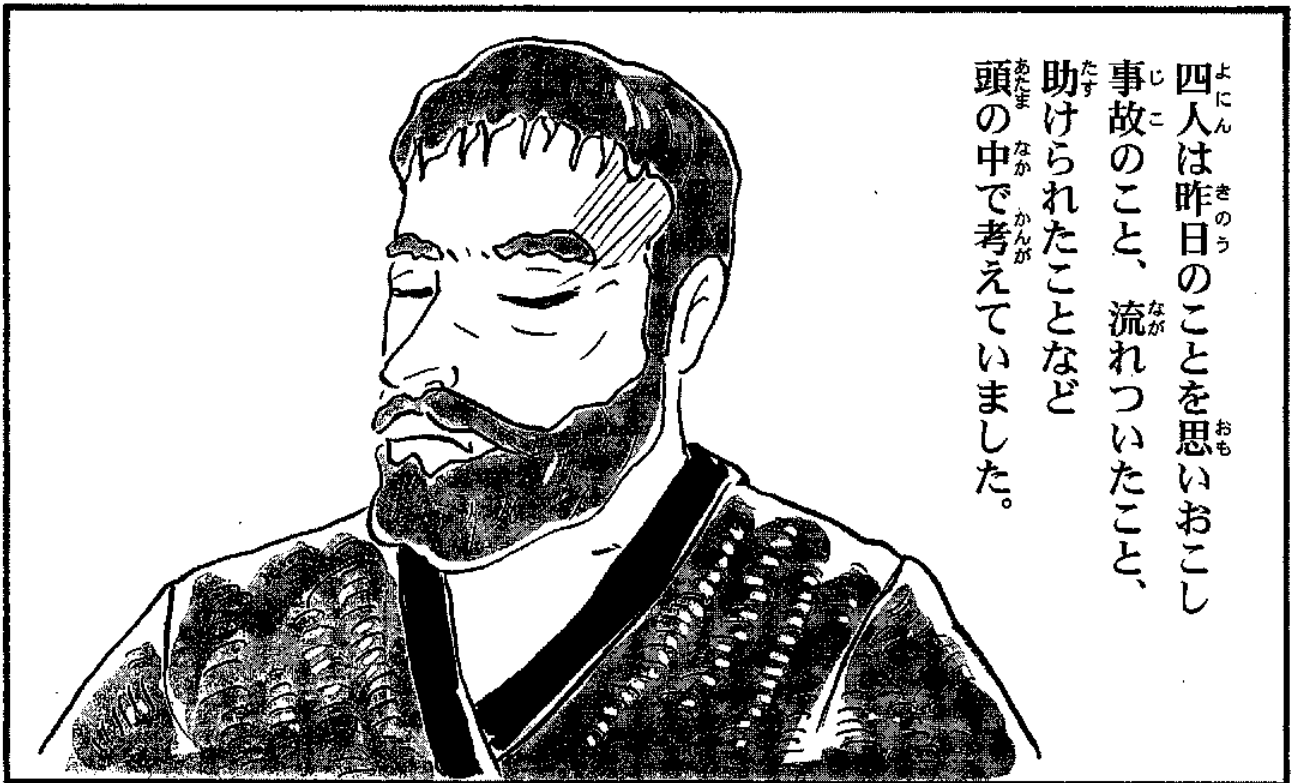


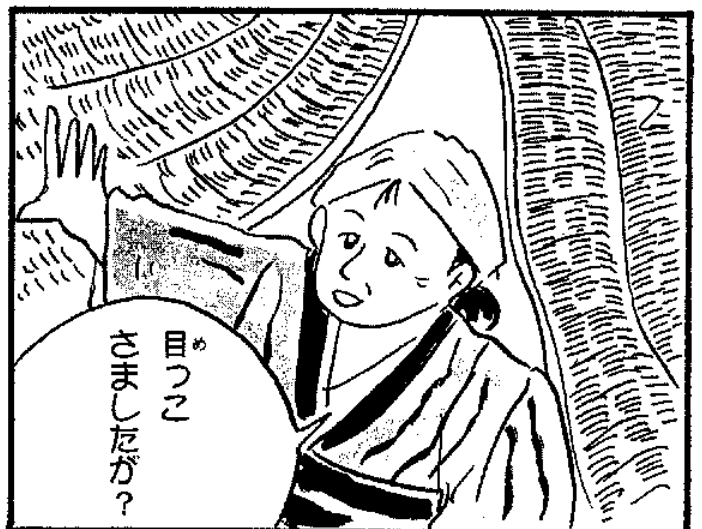
むしろで囲った小屋では
四人の船乗りたちが
疲れきって眠り続けています。

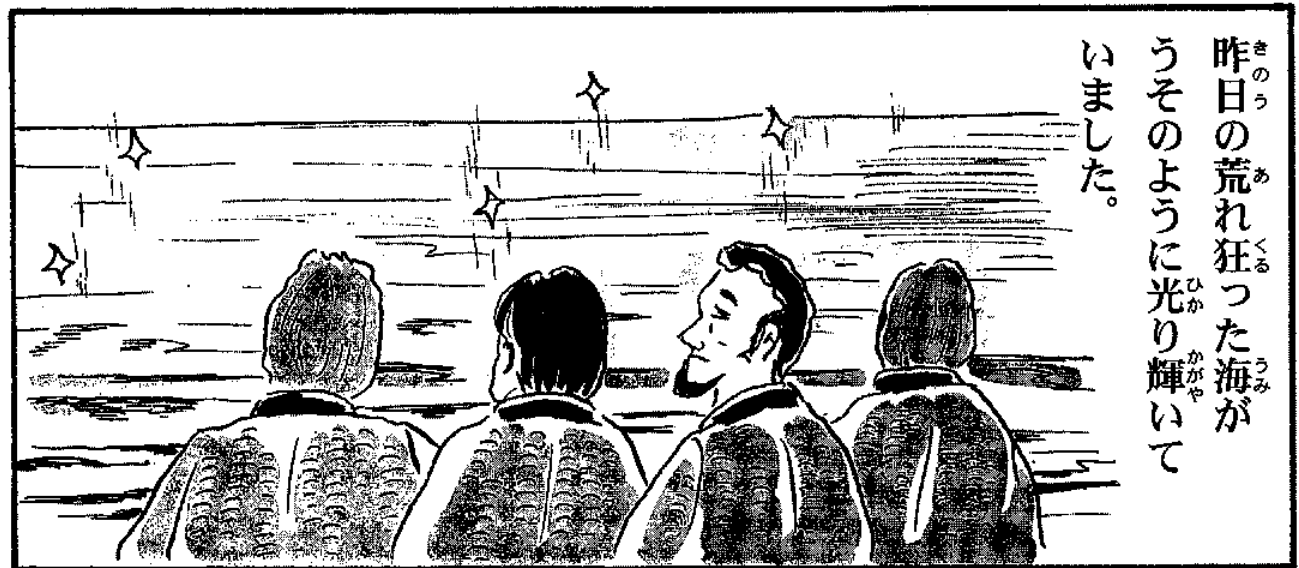
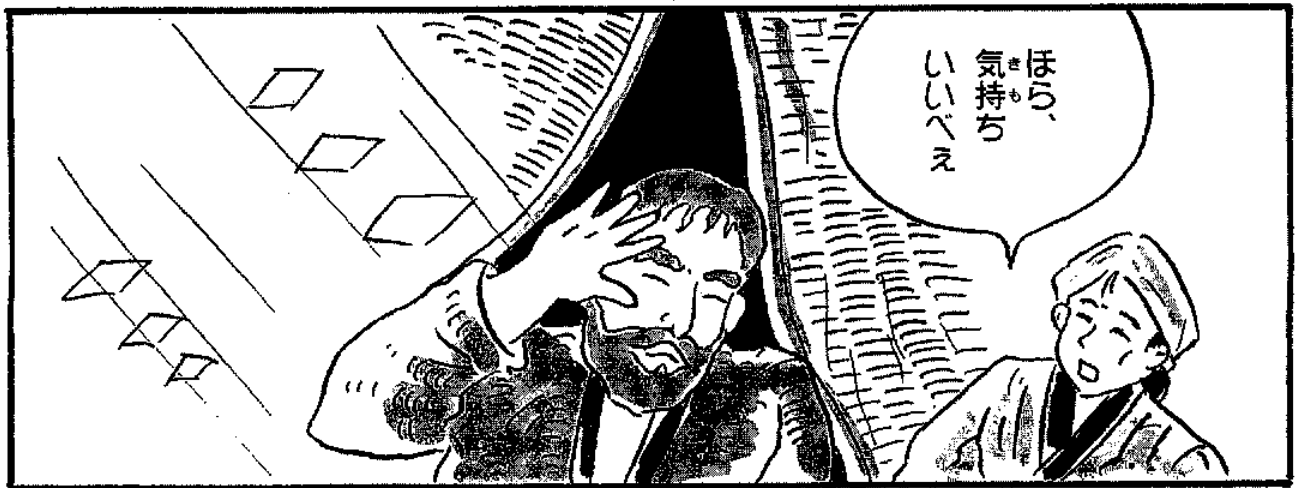
十月三十一日の
夜よるが明あけました。

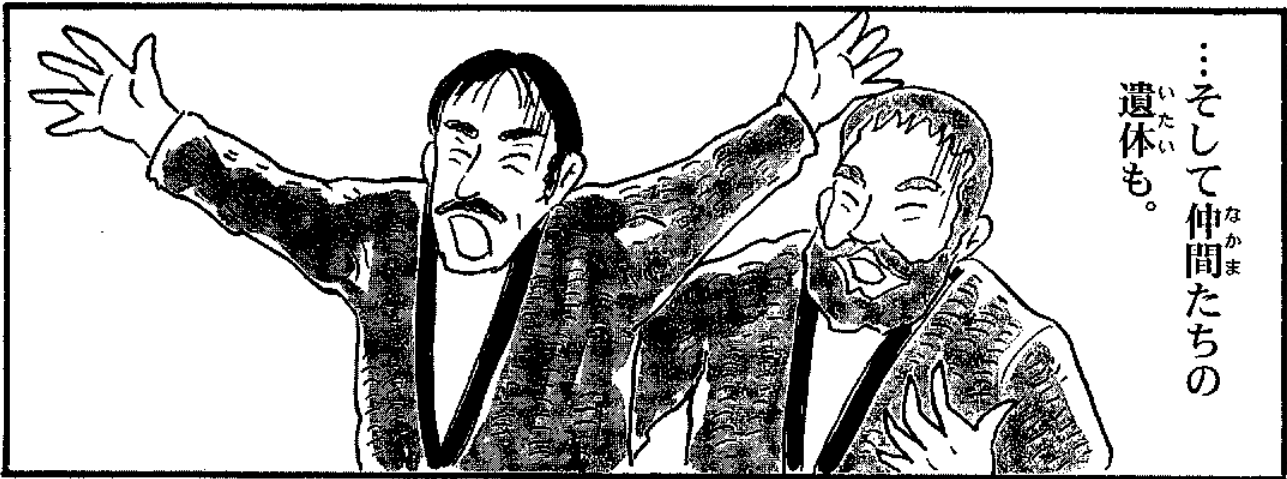


四人は昨日きのうのことを思いおこし
事故じこのこと、流れついたこと、
助けたすられたことなど
頭あたまの中で考えかんがてていました。

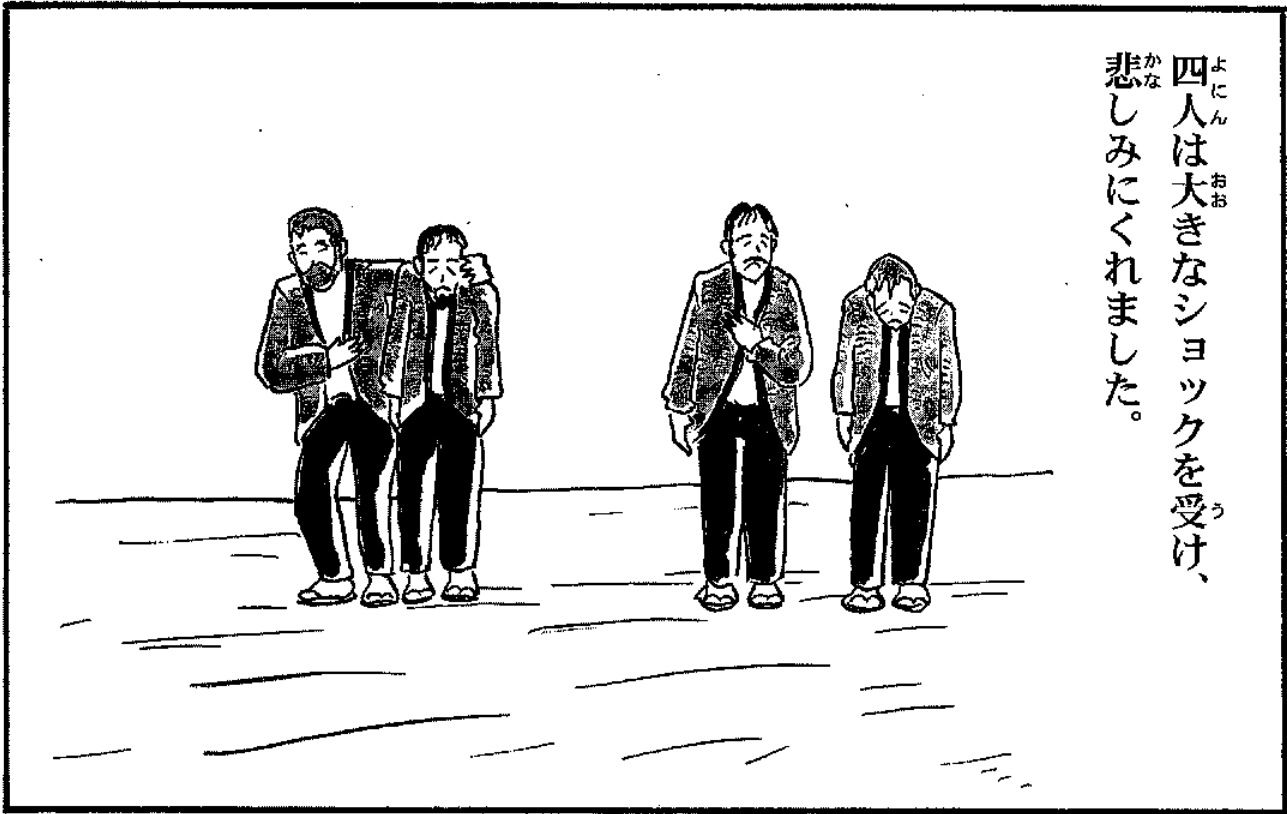
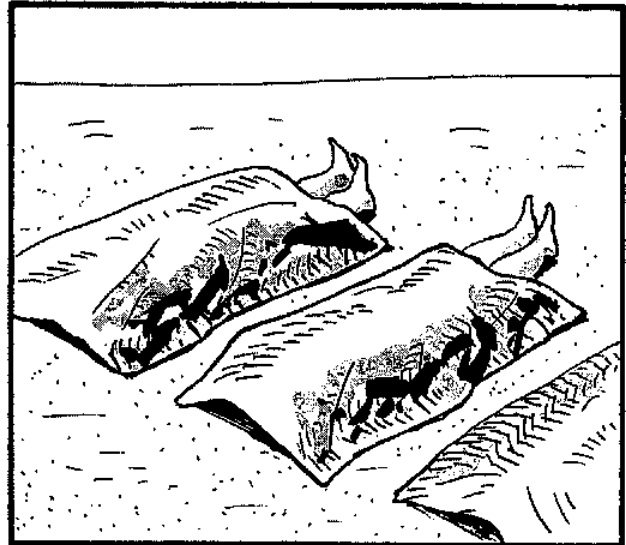








…そして仲間たちの
遺体も。



四人は大きなショックを受け、
悲しみにくれました。



うんだな
中で
お茶つこ
飲むべ

いま
ごはん
つくと
いそぐ



悲しいもの
見へて
まっただな



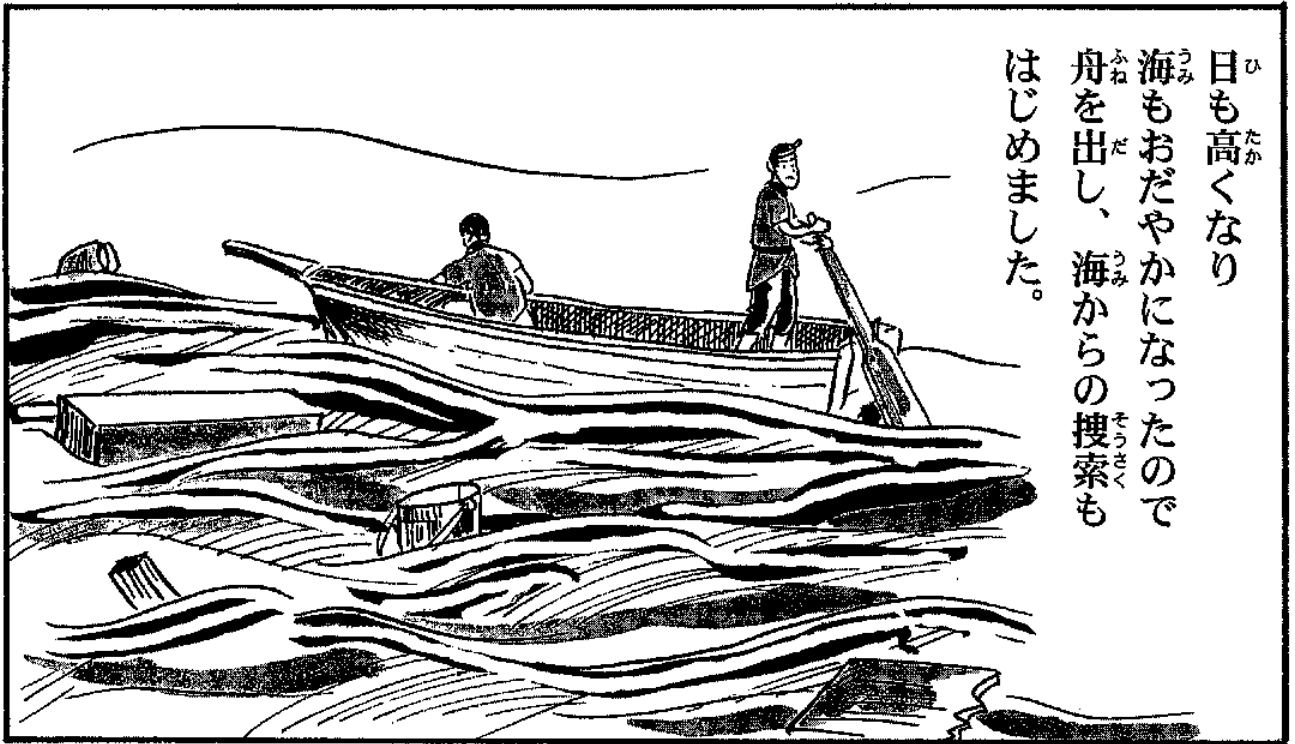
その頃、県庁に走った
寅吉と兵次郎は
警察本部の吉村護美警部補、
青森県師範学校の英語の
教師である中西保人先生を
案内して、七里長浜をめざし
歩きつづけていました。

あつた
どうも
走ると
ついでまっただな

寅、走るなよ
先生たち
ついて
これねえへ！



日も高くなり
海もおだやかになったので
舟を出し、海からの捜索も
はじめました。



ウイルソン、リーガン
ベセバ、ベックは
すっかり元気になり
食欲おうせいです。



よぐ
まあ
食つもんだ

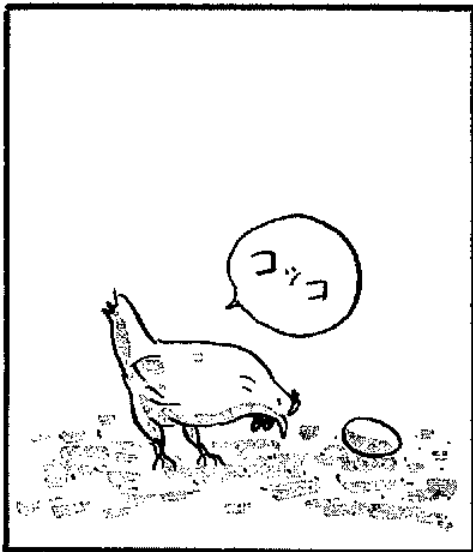


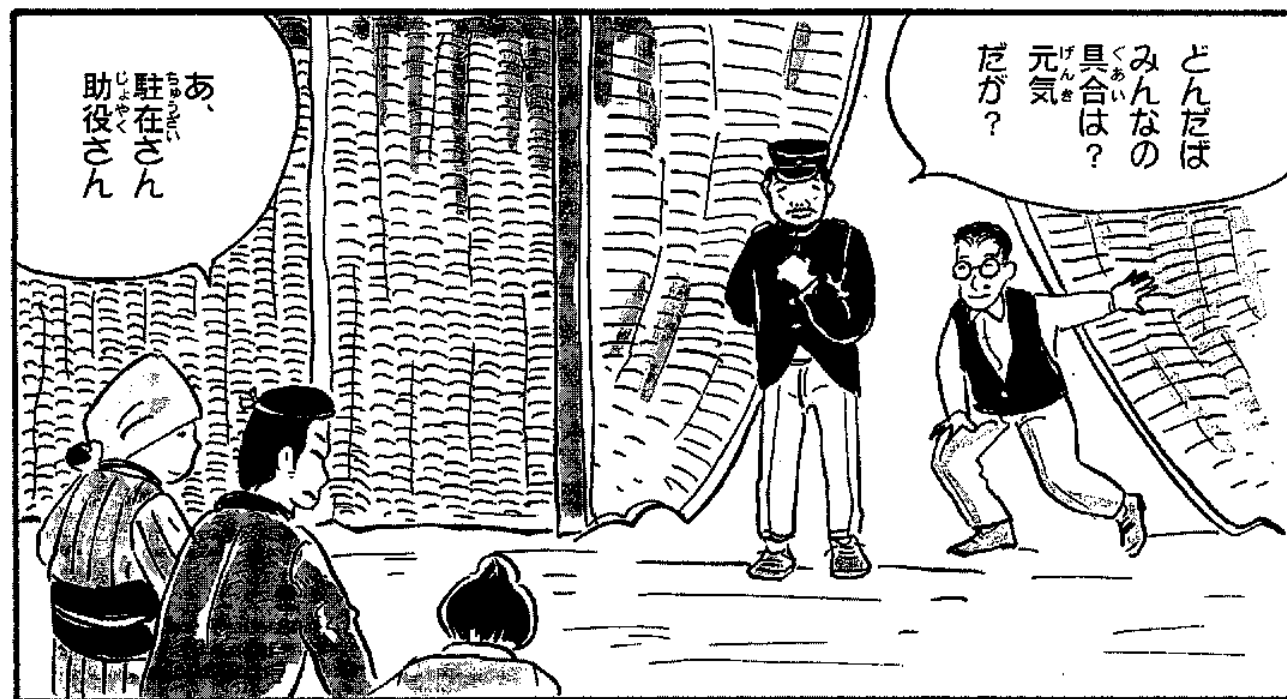
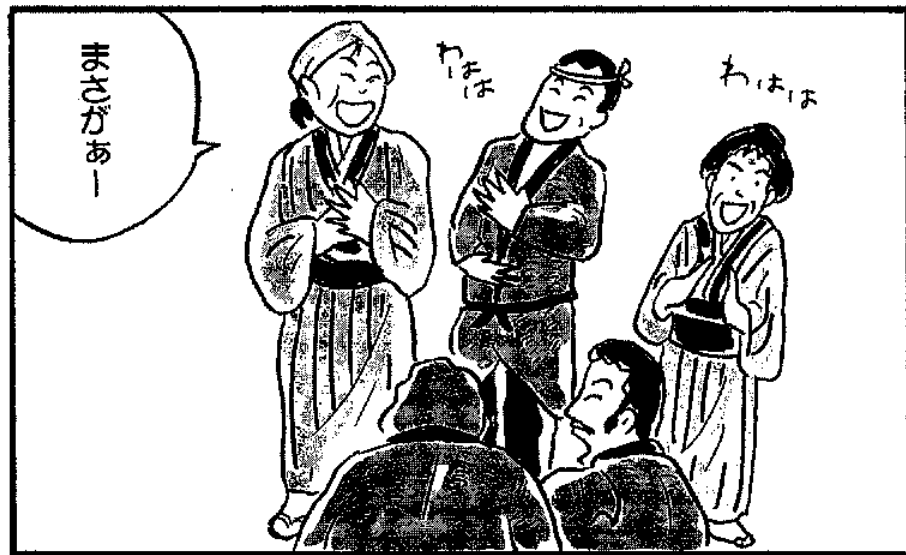
したって
るくに
食つて
ねんだもの

さんでも
ねえよ
ずんば
肉ば
くつたご

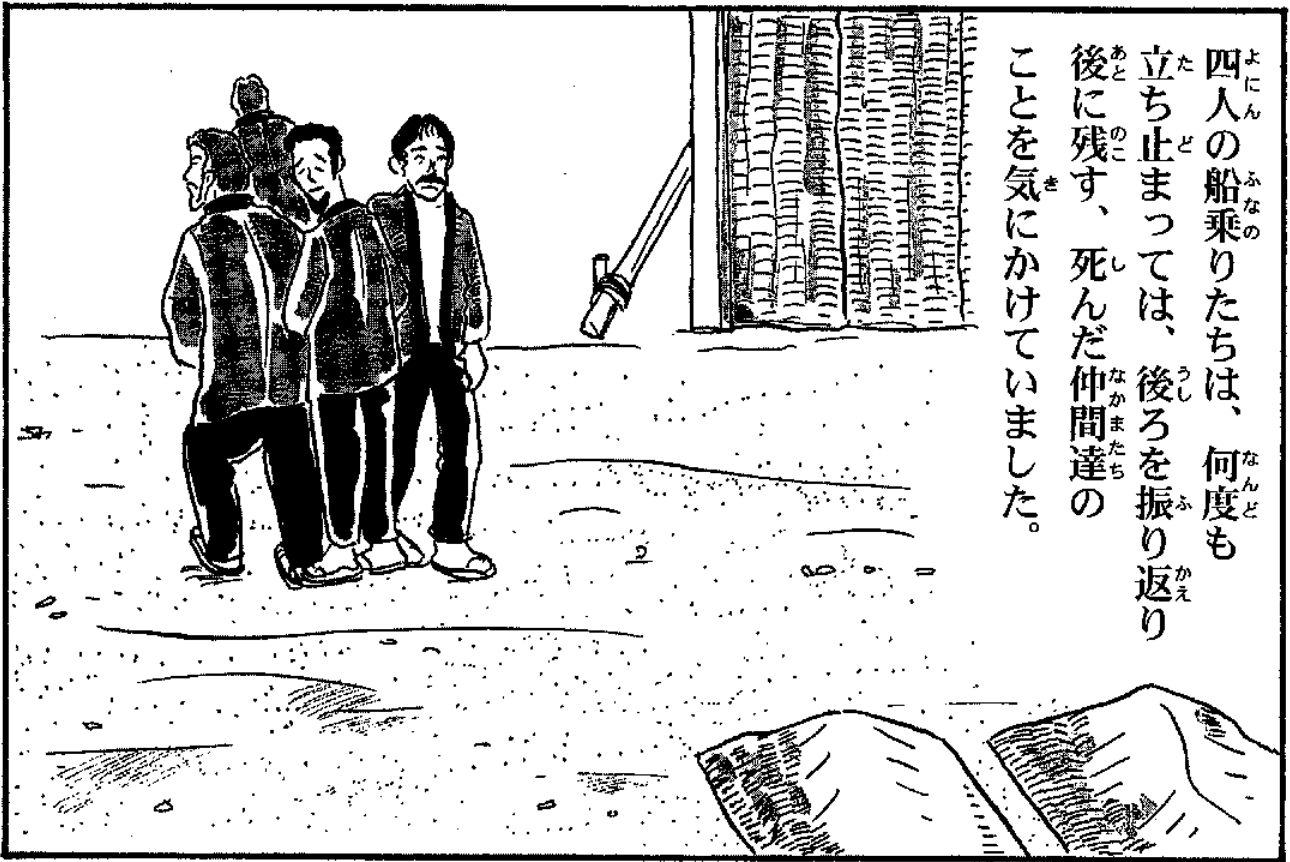


コッコ





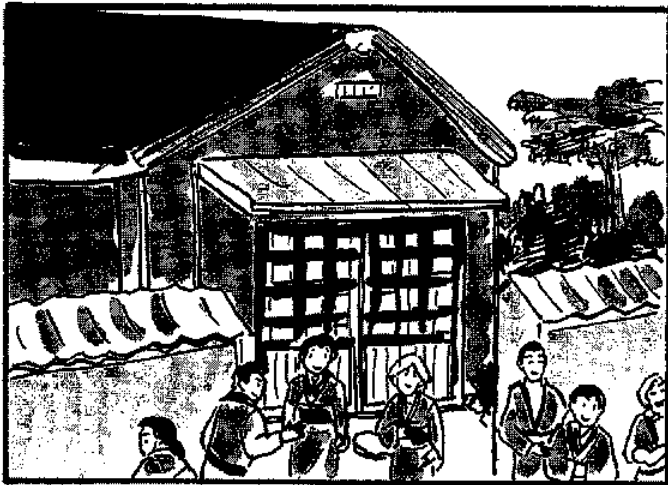




四人の船乗りたちは、何度も立ち止まっては、後ろを振り返り後に残す、死んだ仲間達のことを気にかけていました。



およそ4kmの屏風山を横切れば牛瀉の村落です。



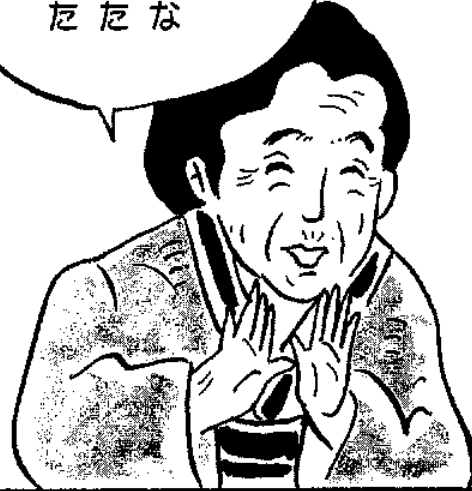
あ！
来たよ

ウイルソンたちが
 工藤五三郎の家の前まえにくると、
 どつとどよめきがおこり、
 大きな拍手はくしゅがおこりました。



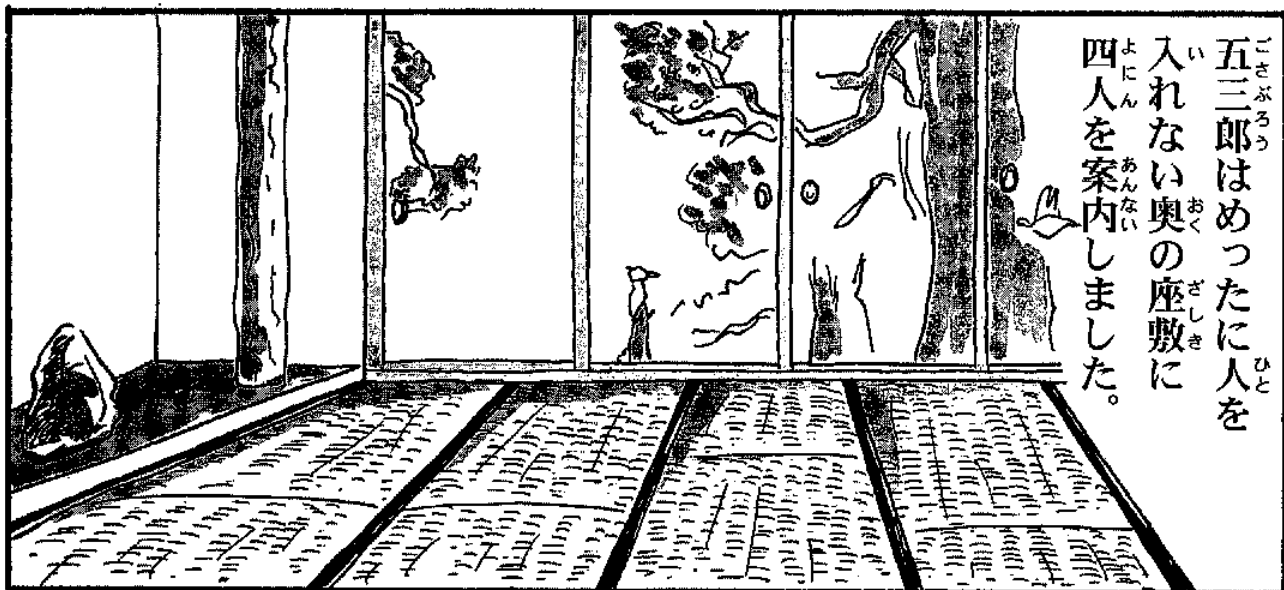
村人むらびとにとって、四人よにんの
 船乗りふなのは死しとたたかい、
 見事みごとに勝ちぬいた
 勇気ゆうきのある人ひとたちでした。

大変たいへん
 だつたな
 よく来た
 よく来た



貧しい村むらの人ひとたちの生活せいかつは
 一日いちにち一日いちにちが生きるための戦たたかい
 です。死しに打ち勝かつた四人よにんは、
 限りかぎない力ちからを村むらの人ひとたちに
 与あたえてくれました。

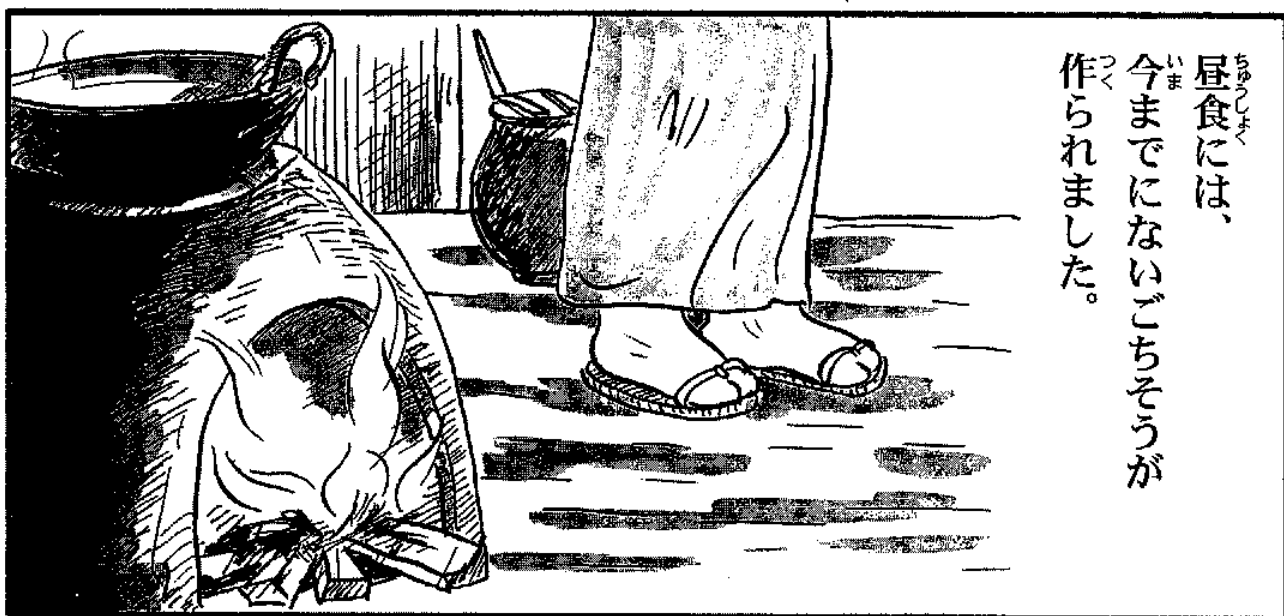




五三郎はめつたに人を
入れない奥の座敷に
四人を案内しました。



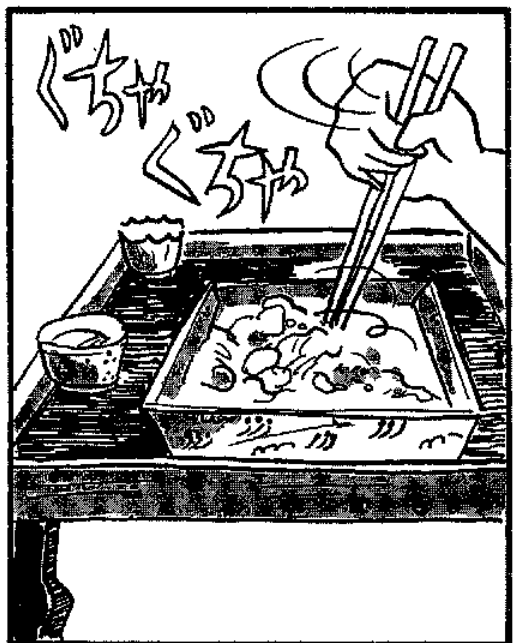
初めて見る日本の民家に、
みんな珍しそうに
眺め入ります。

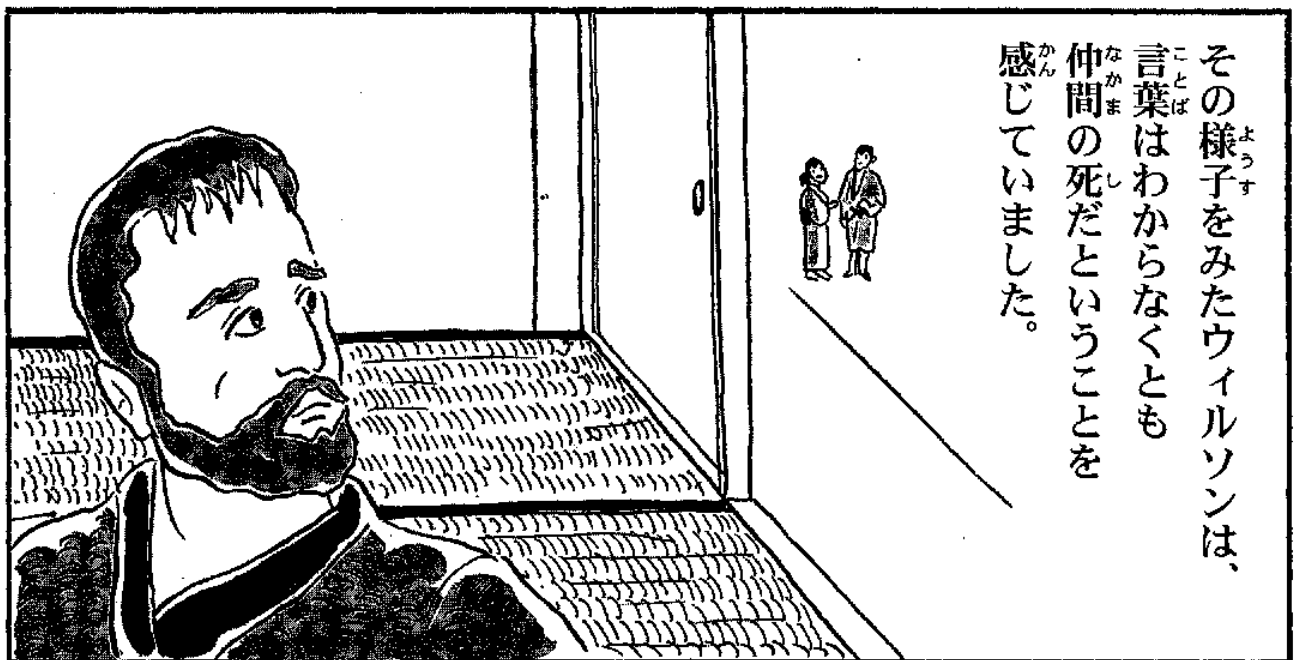


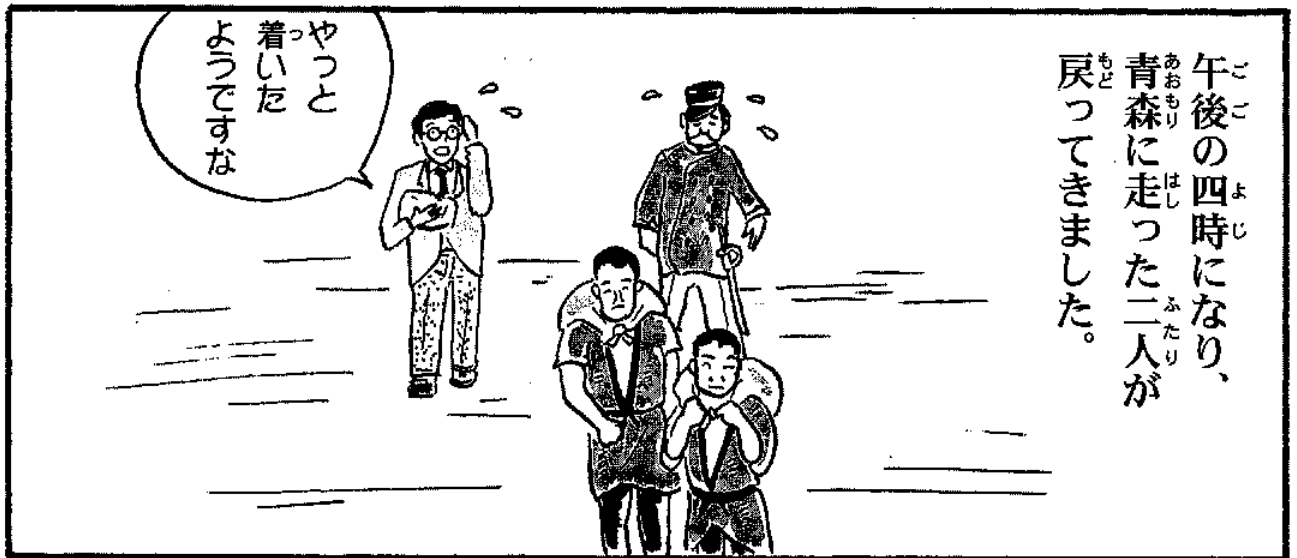
昼食には、
今までにないごちそうが
作られました。



見るのも食^たべる
のも、初^はじめての
ウイ^ウルソ^ソンは
ご飯^{はん}の上^{うえ}に色^{いろ}々^{いろ}
な^{いろ}お^{いろ}かず^{いろ}を
乗^のせ、か^まき^ま回^まし^ま出^だし^ます。









医者様は
来たか？



今、戻って
きたとー



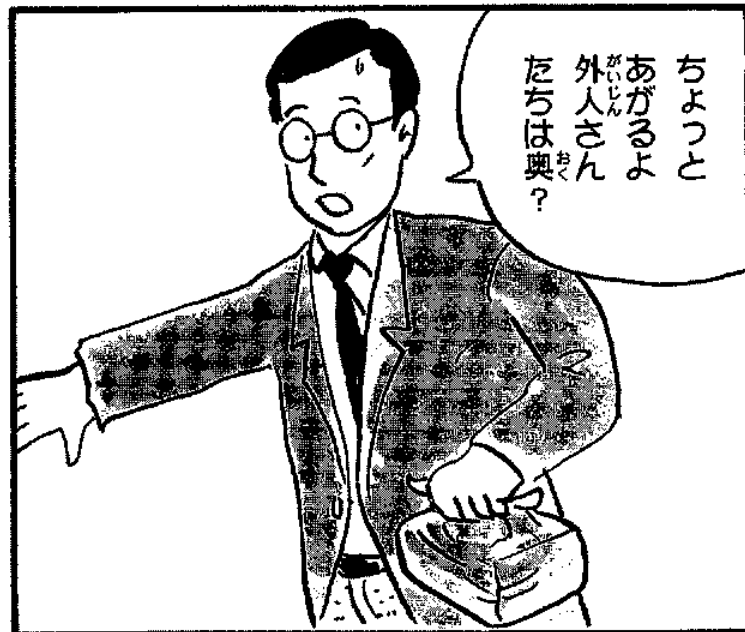
ほかの
人たちは、
みんな
運が
なかったな



ま、
今になって
医者様来て
ても
手遅れだべ



医者様は
鰐ヶ沢から
よこすつて
知事が言つて
たど



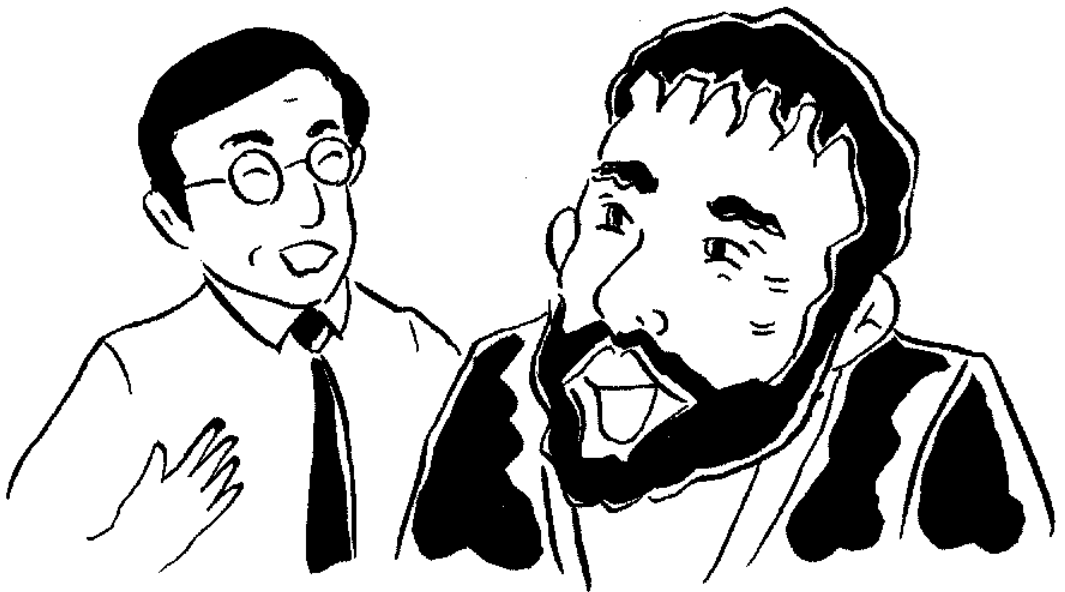
ちよつと
あがるよ
外人さん
たちは興？

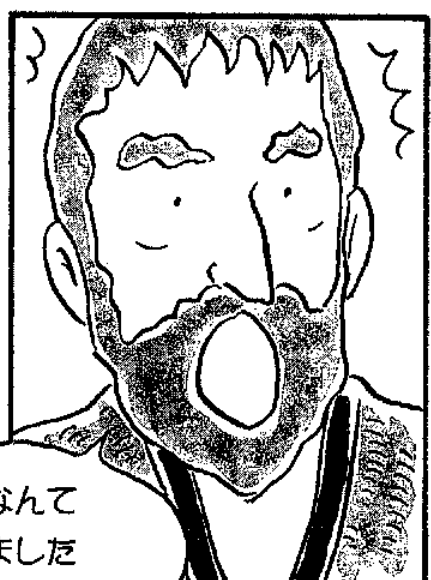
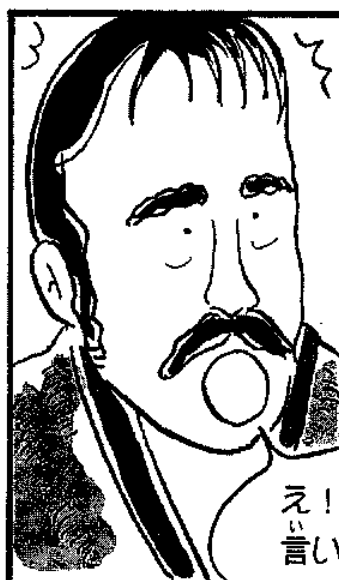


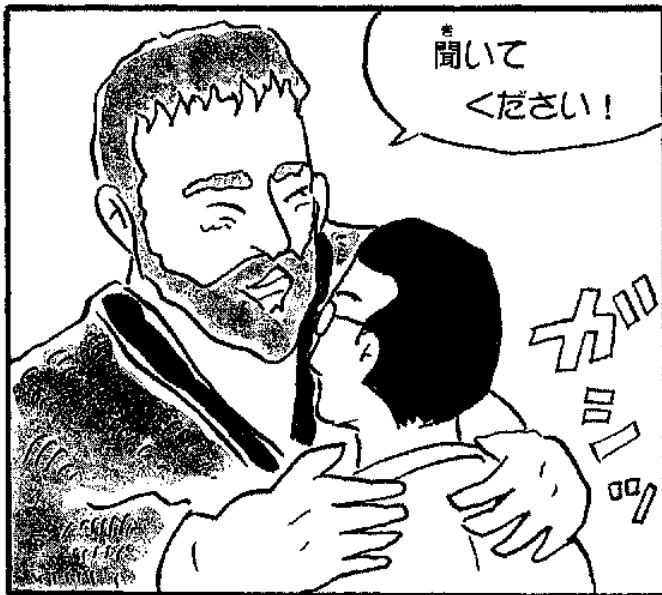
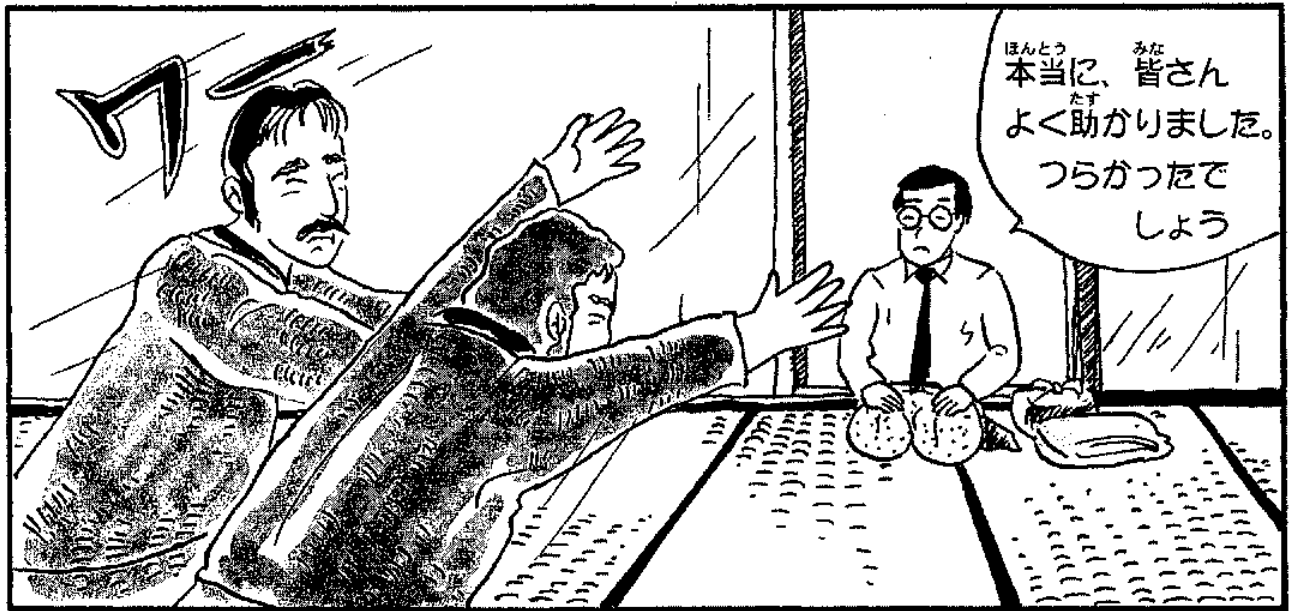
そつが、
助かつたのは
四人だけが…

第5話

— 言葉が通じた —
ことば

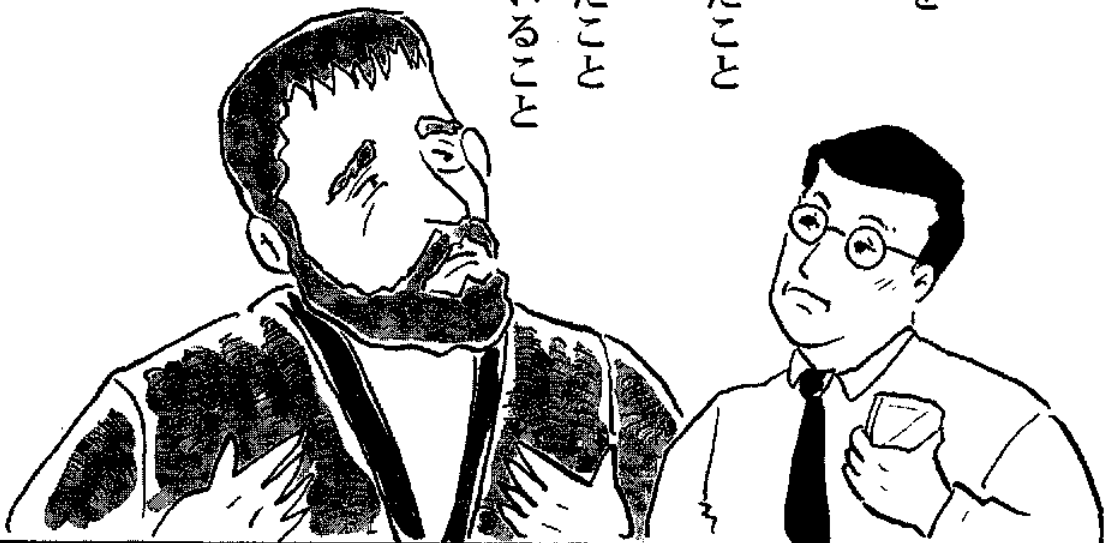


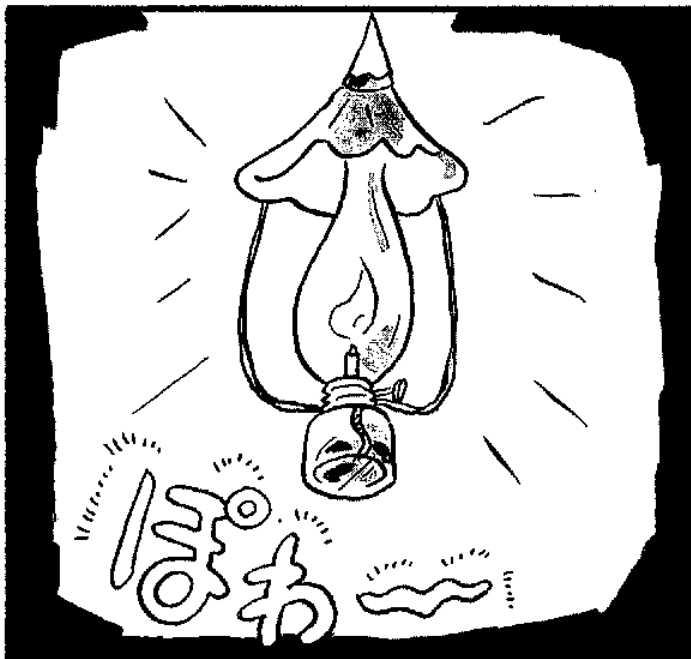


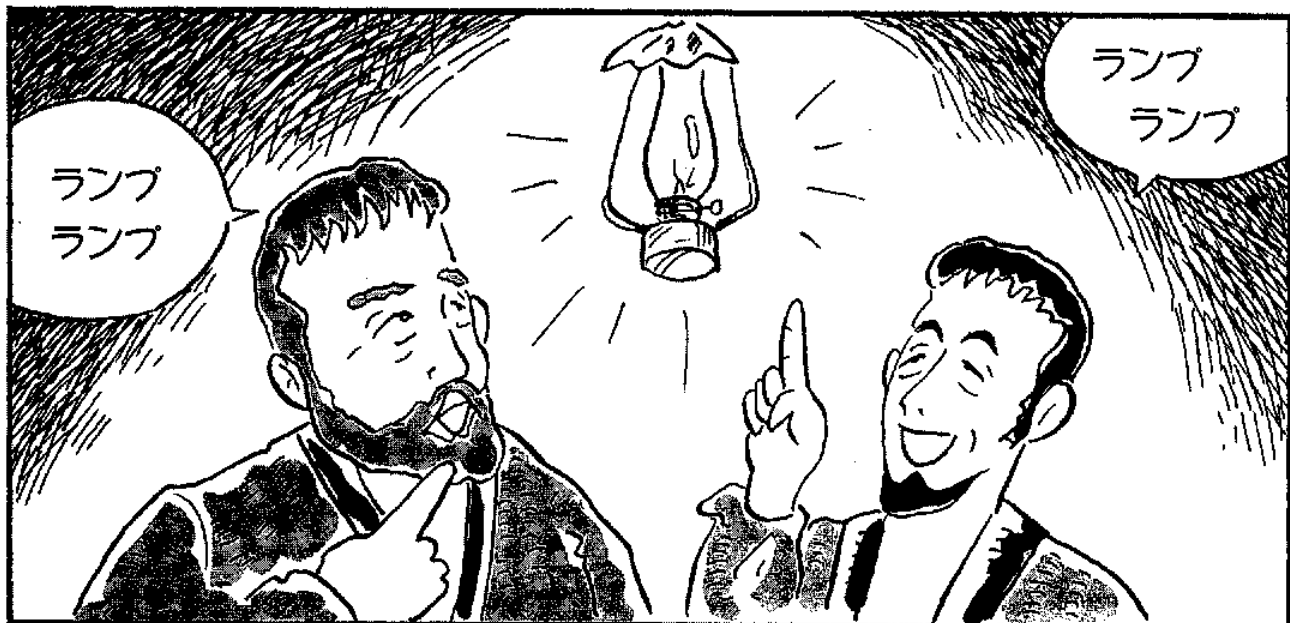




四人は
今までの出来事を
代わる代わるに
話をしました。
アメリカから来たこと
遭難したこと
村人に助けられたこと
とても感謝していること
そして、
自分の住む家に
帰りたいこと
いろいろ話を
しました。







ランプ
ランプ

ランプ
ランプ



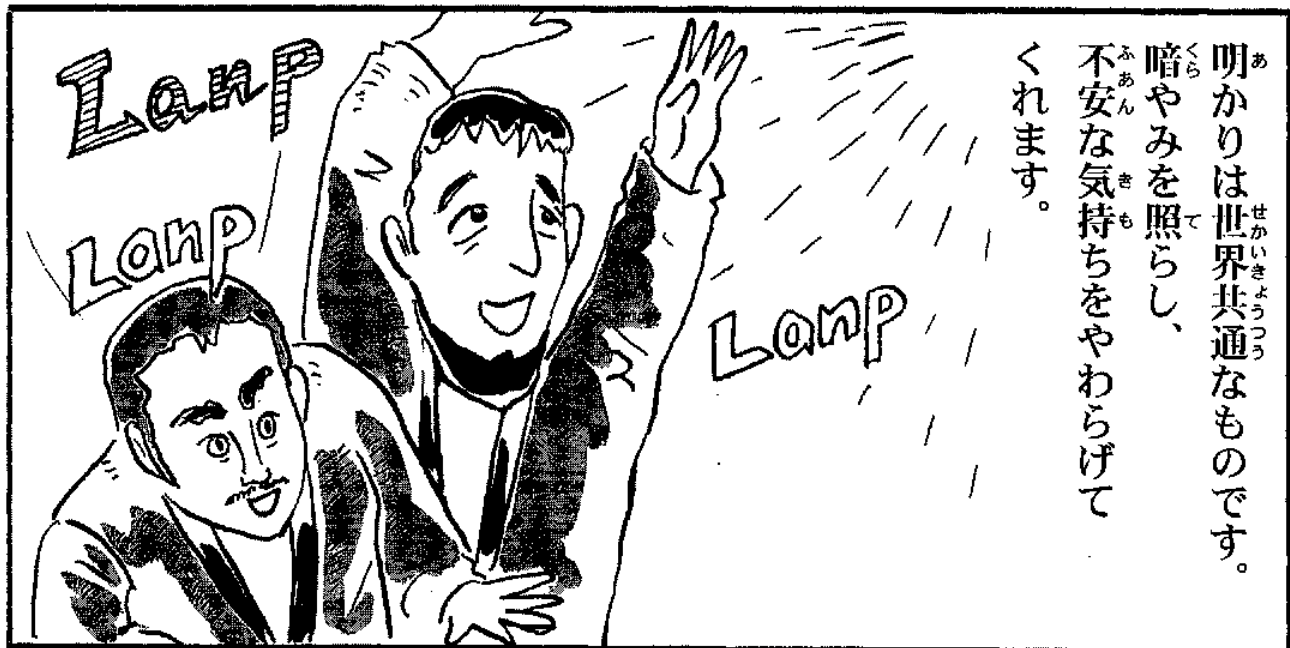
ランプ

ランプ

ランプ



へえー
アメリカでも
日本と同じく
ランプって
言っただ



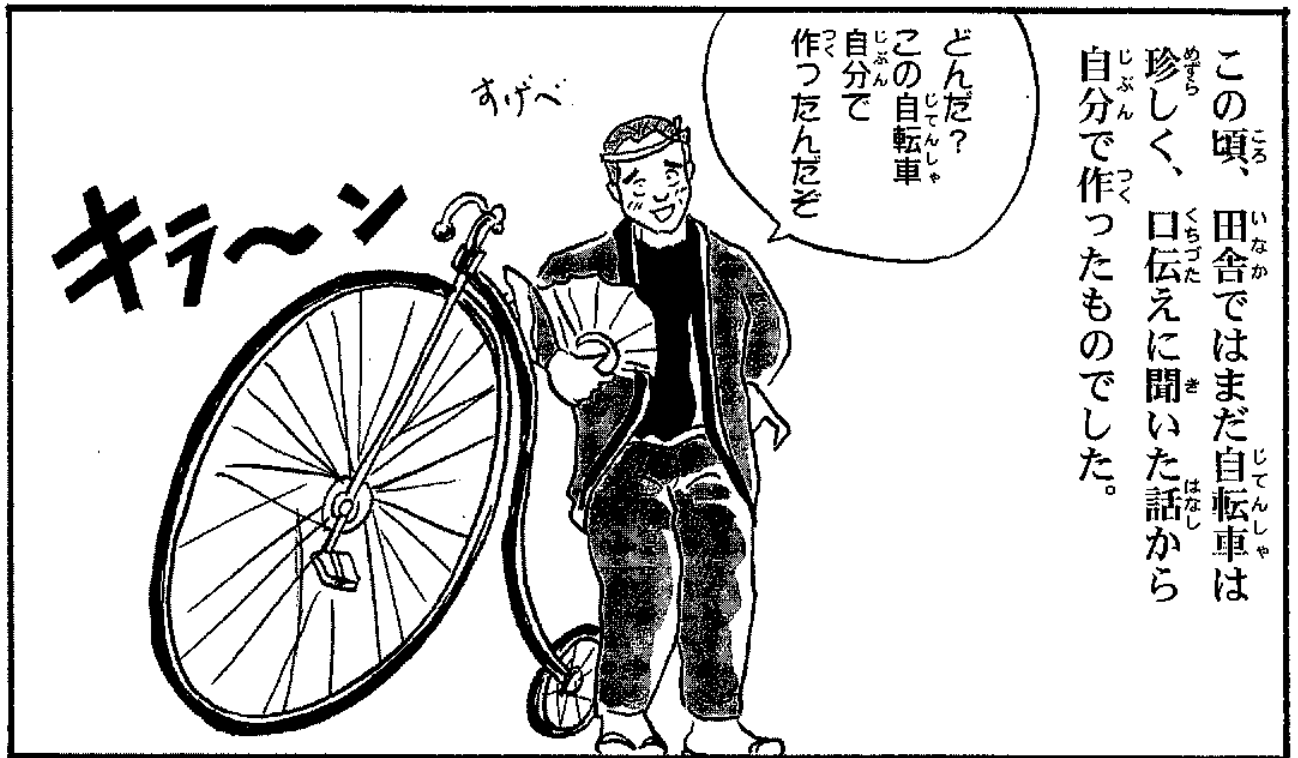
あ
明かりは世界共通なものです。
せ
かい
き
よう
つ
う
くら
暗やみを照らし、
て
ふ
あ
ん
不安な気持ちをやわらげて
き
も
く
れ
ま
す。



いつしか雪が
降ってきました。



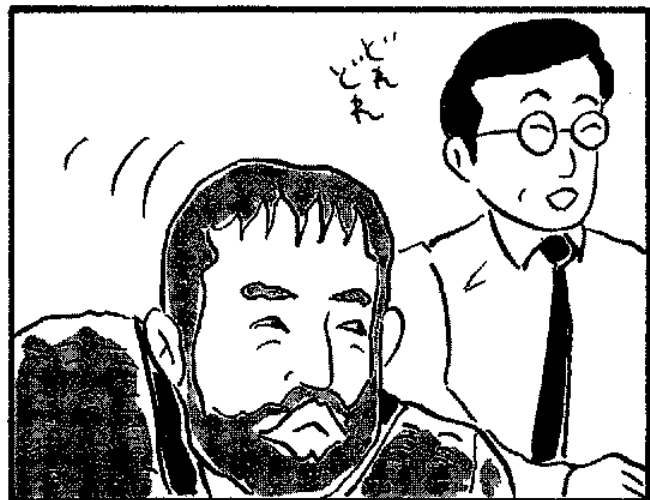
野鍛治
工藤豊太郎



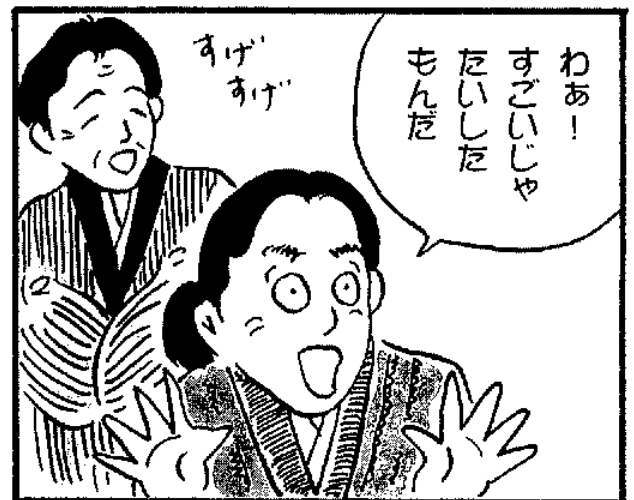
この頃、田舎ではまだ自転車は珍しく、口伝えに聞いた話から自分で作ったものでした。

どんだ？
この自転車
自分で
作ったんだぞ

キラ〜ン

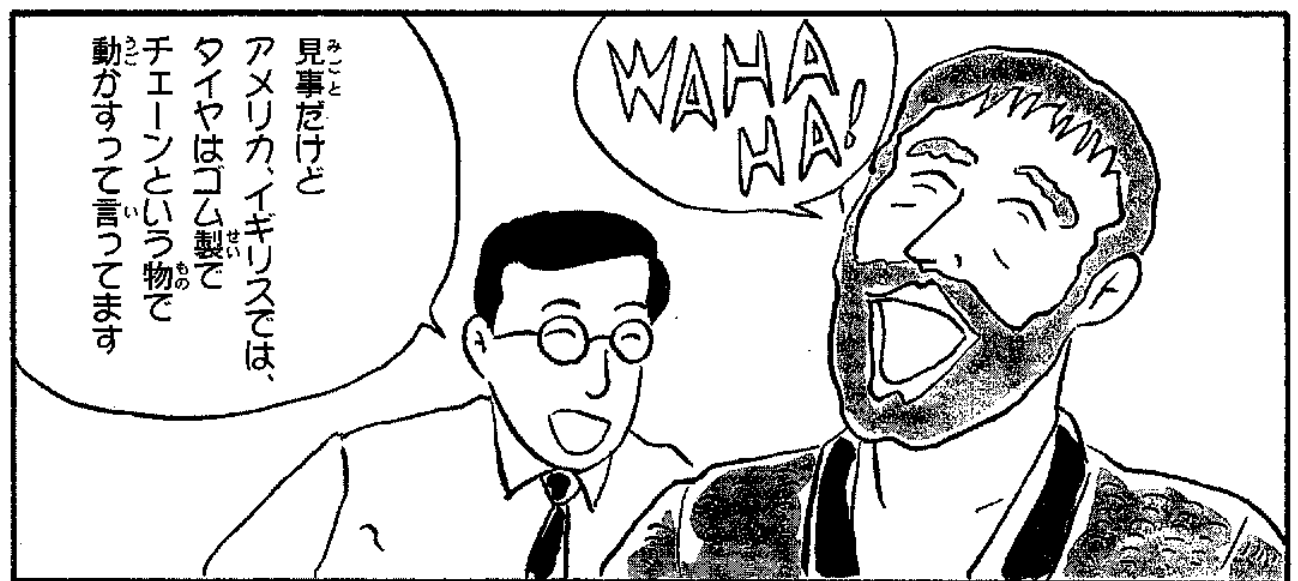


どんだ
え



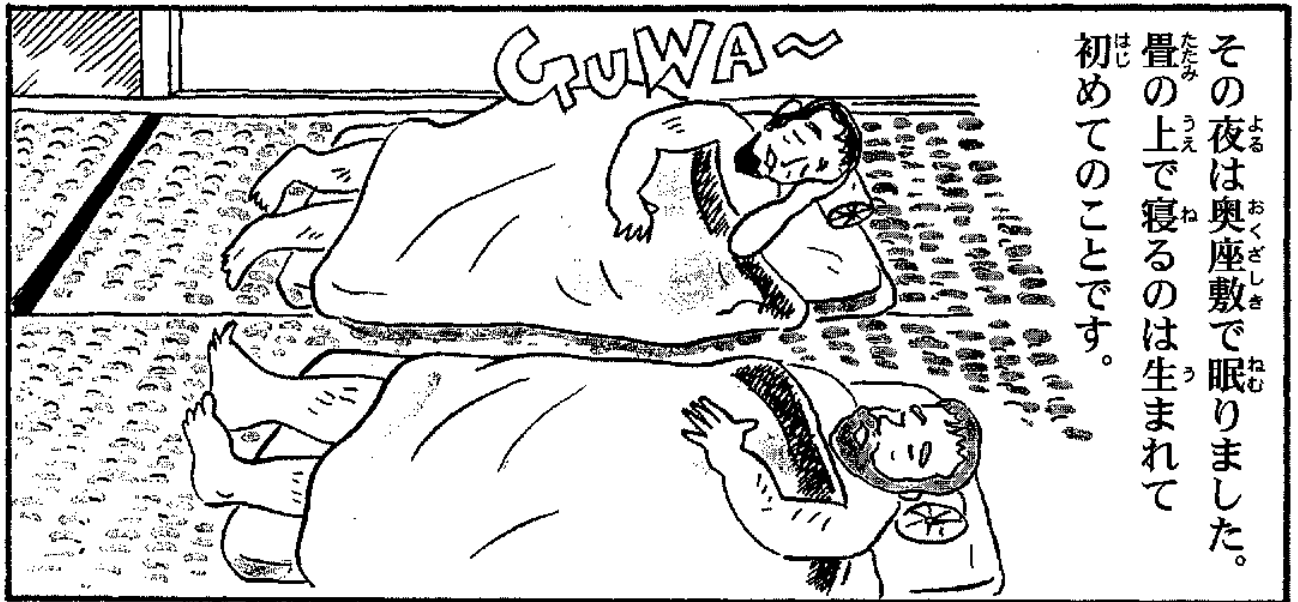
わあ！
すごいじゃ
ないした
もんだ

すげ
すげ



WAHA
HA!

見事だけど
アメリカ、イギリスでは、
タイヤはゴム製で
チエーンという物で
動かすって言うてます





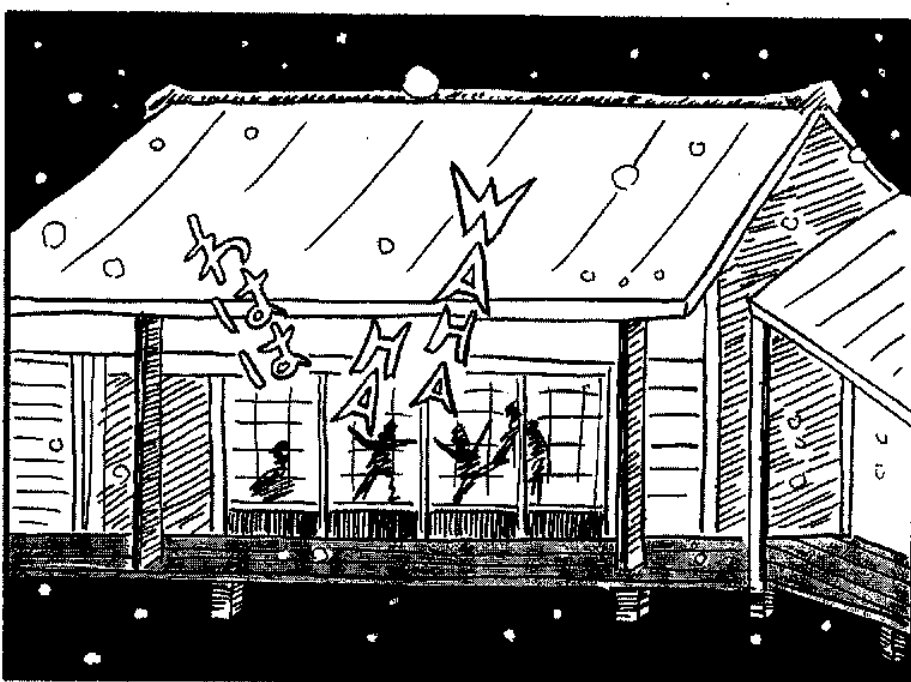
ウイルソンとベックは
とても話好きで
中西先生と盛んに
話をしました。



それでも楽しく話を
していました。



ときおり先生の英語が
よたよたしてわからない
こともありましたが…



これだば
あしたは
大丈夫だべ

第6話

—
出しゅつ

発はつ
—



十一月二日、
四人が青森に出発する日です。
初めて縫った洋服も
仕上がりました。



それは洋服と
いうより、
だぶだぶの

ももひきに
羽織のような
上着でした。



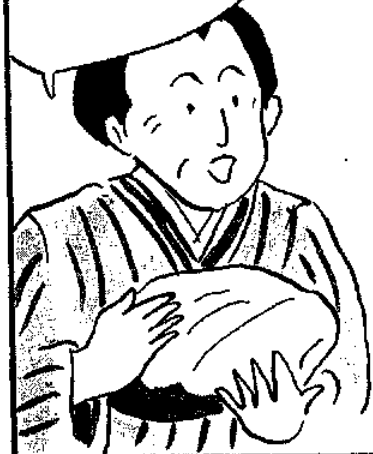
こんなもんで
いいのかなあ

外は雪だし、
寒さしのぎ
にはなるべ



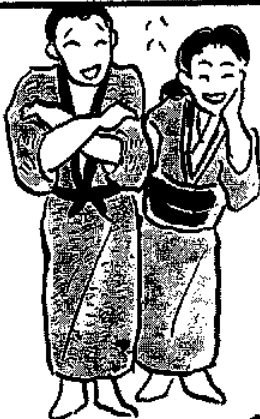
なにしろ本物の洋服など
見たこともないのですから。

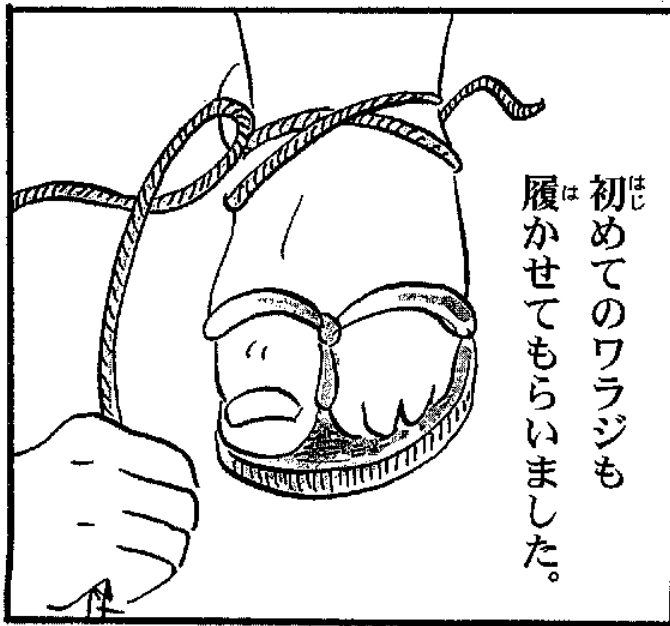
これ、
かぶれば
いいよ



お高祖頭巾に似た
ほっかぶりも縫いました。

ナンダベ...





初めてのワラジも履かせてもらいました。



村人の優しさがつまった服です。四人は有り難く身支度をしました。



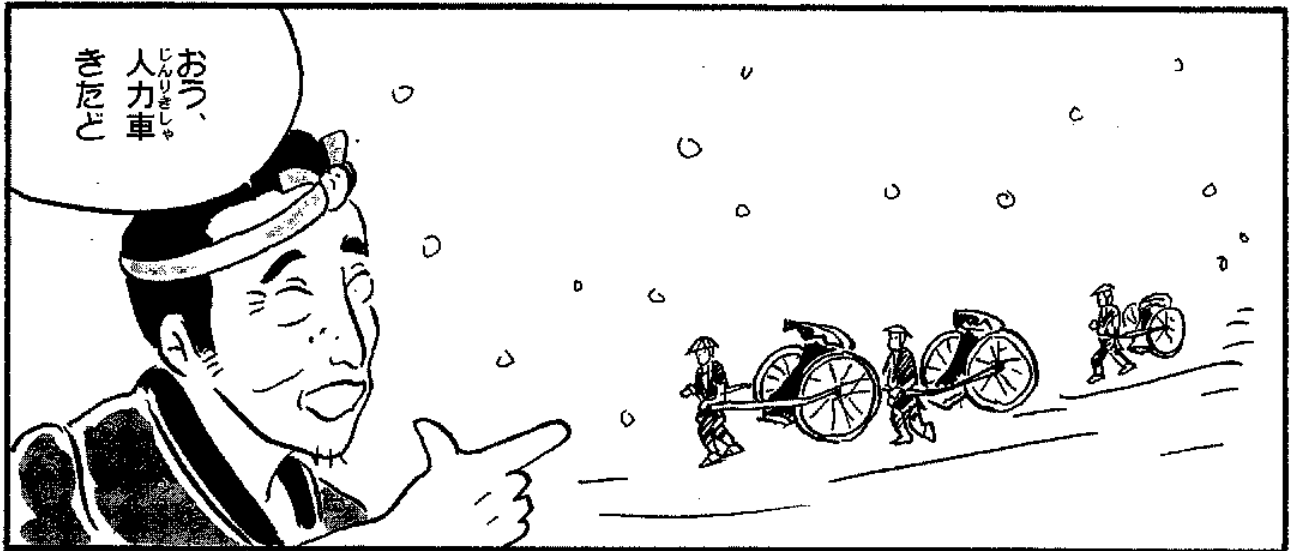
四人は、生きて帰国できる歓びと多くの仲間たちを失った悲しみに、複雑な心に満たされています。

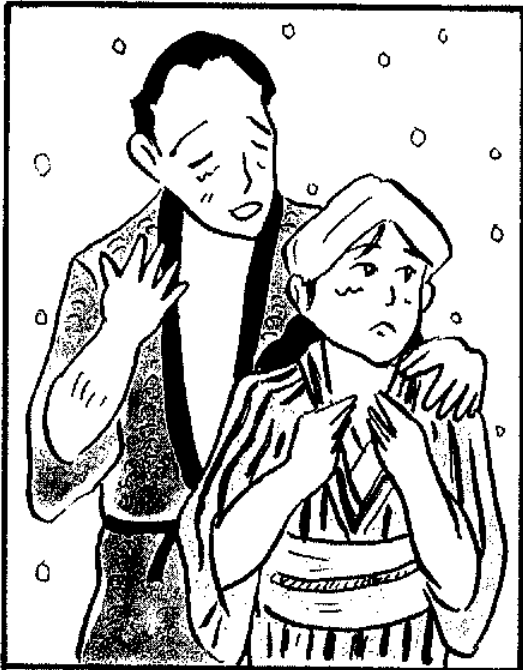
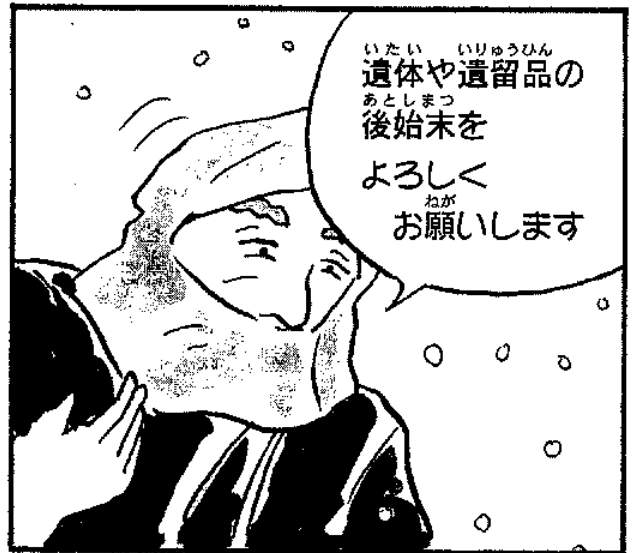
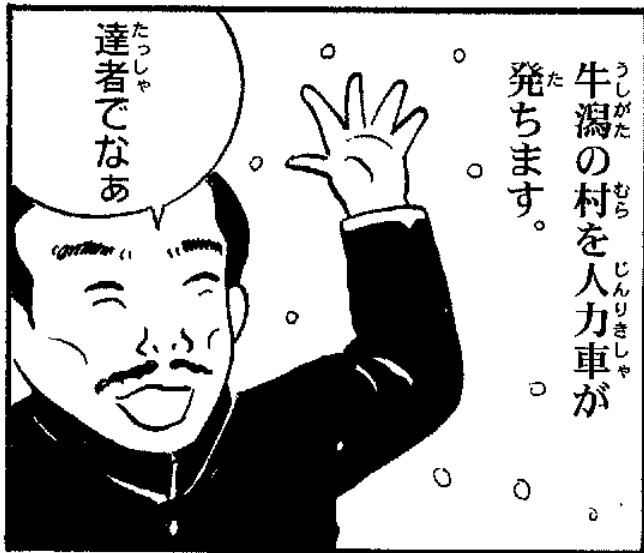


神様にもらった命を大切に



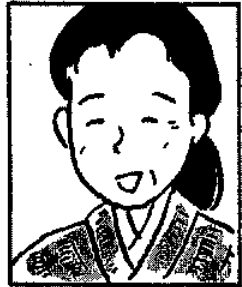
…そして村人たちへの感謝の心にも。







サンク
 THANK
 ユー
 YOU
 へばな
 HEBANA

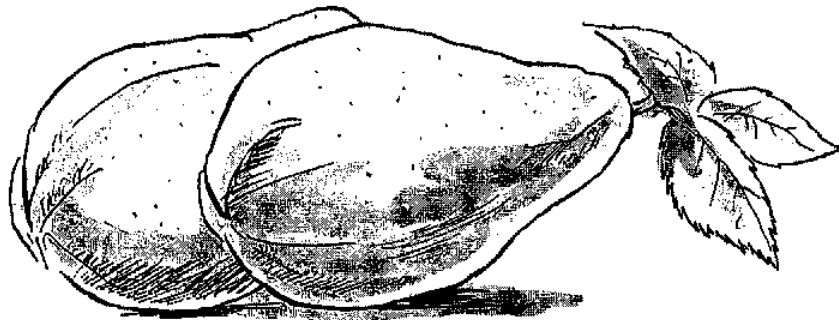
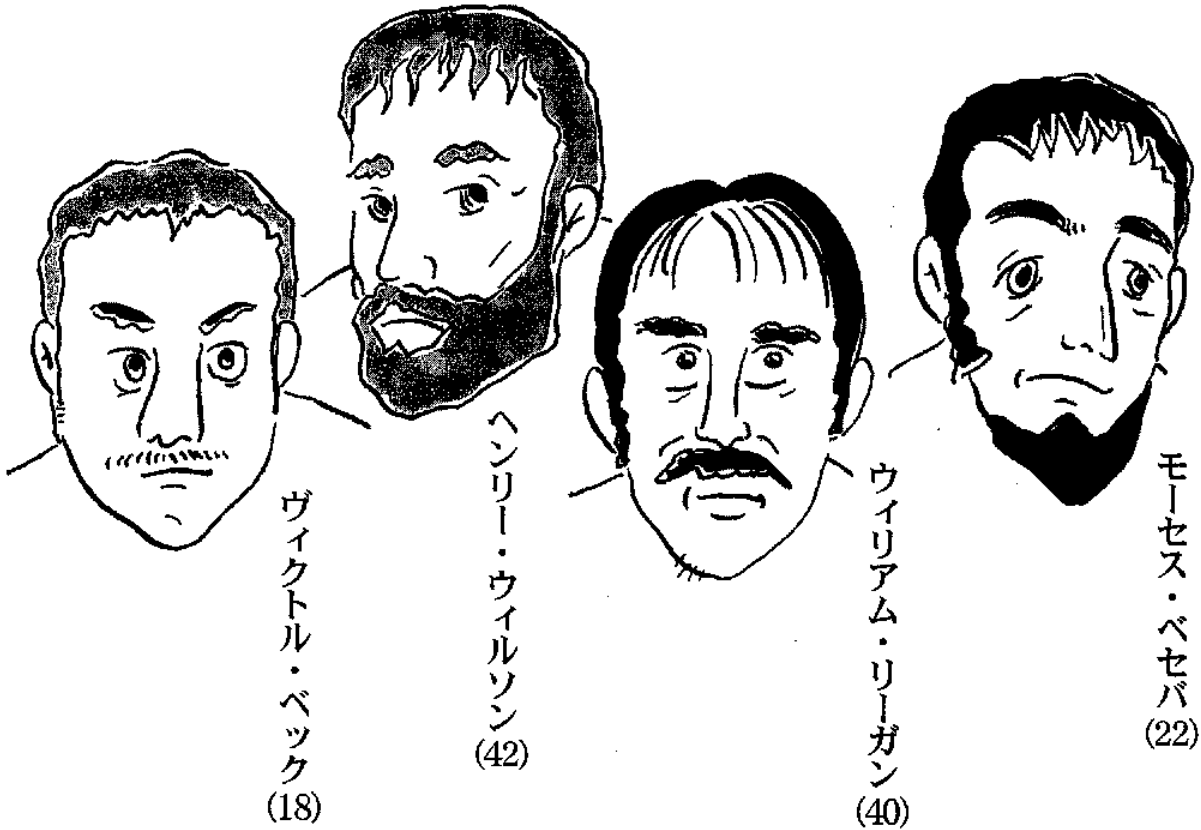


車力村しゃりきむらのみなさん、
 ありがとうございます。
 みな 皆さんのことは、一生いっしょうわす忘れません。

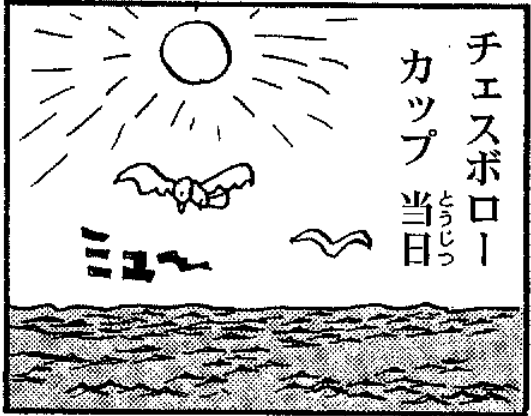
ヘンリー・ウイルソン

翌十一月三日、
 青森にてゆつくり
 休んだところで
 函館港に向かい、
 ちようど横浜港に
 向かう船をみつけ、
 その後、家族の待つ
 アメリカ
 メーン州バス市に
 帰って行きました。

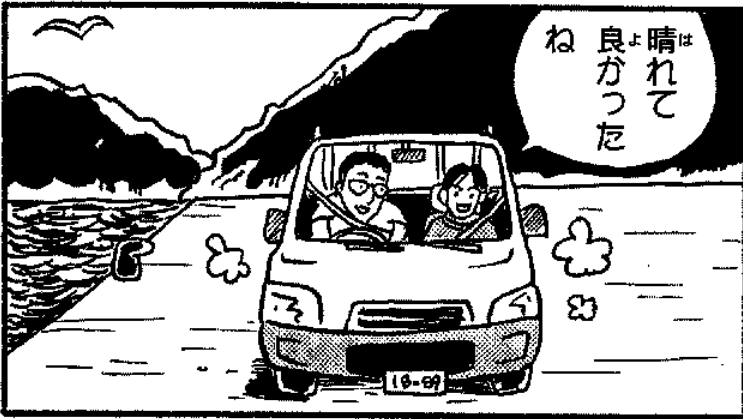
明治22年11月
 (1889年)



チエスボロー
カップ 当日



晴れて
良かった
ね



うん!
まだ途中
だけど、
てらすごく
感動した

コウキ、
本読んで
みたか
すごい話
だったろう



けど、
死んだ
十九人の
人たちは
かわいそう
だったね

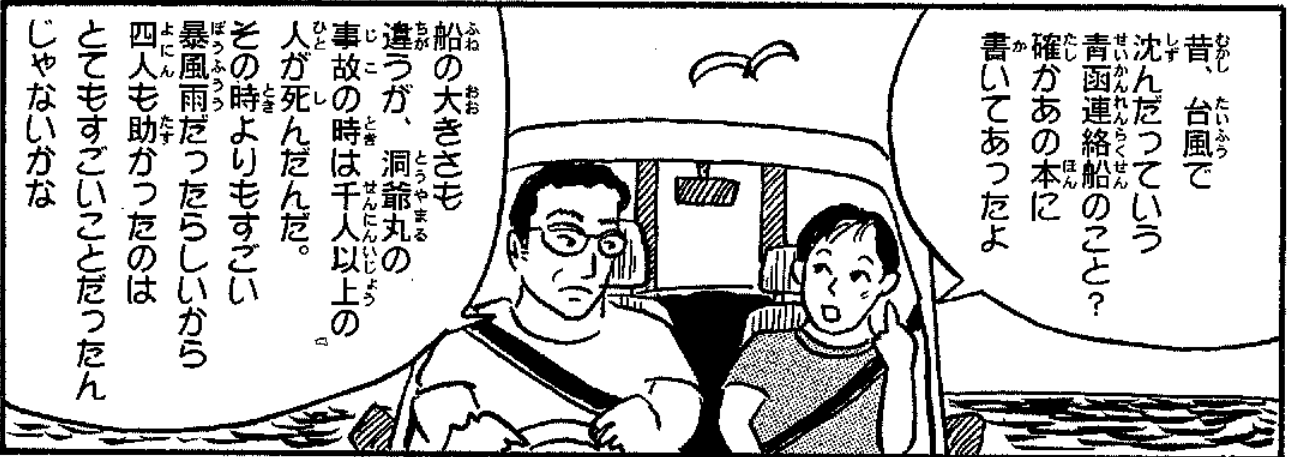


コウキ、
洞爺丸って
知ってる
か?



昔、台風で
沈んだっていう
青函連絡船のこと?
確かあの本に
書いてあったよ

船の大きさも
違つが、洞爺丸の
事故の時は千人以上の
人が死んだんだ。
その時よりもすごい
暴風雨だったらしいから
四人も助かったのは
とてもすごいことだったん
じゃないかな



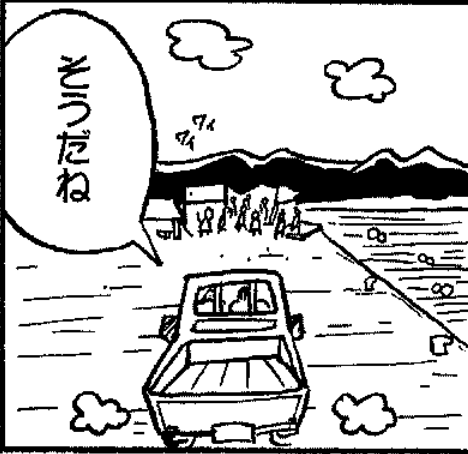
村の人は
たちは
頑張った
んだ



ああ
人の命は何にもまじつ
かえがたいもの
なんだよ



そうだね



あとがき

しゃりきむら せんじんたち みずか きげん かえり あ くる なみ ぼうふうう なか
車力村の先人達は、自らの危険を顧みず、荒れ狂う波と暴風雨の中で
そうなんしゃ きゅうじょ
遭難者を救助した。

こおり つめ はだか みずか たいおん そせい
氷のように冷たくなったウイルソンを裸になり、自らの体温で蘇生さ
くどう
せた「工藤はん」さん。

くら やまみち ほし つづ ふたり わかもの
64kmの暗い山道を走り続けた二人の若者。

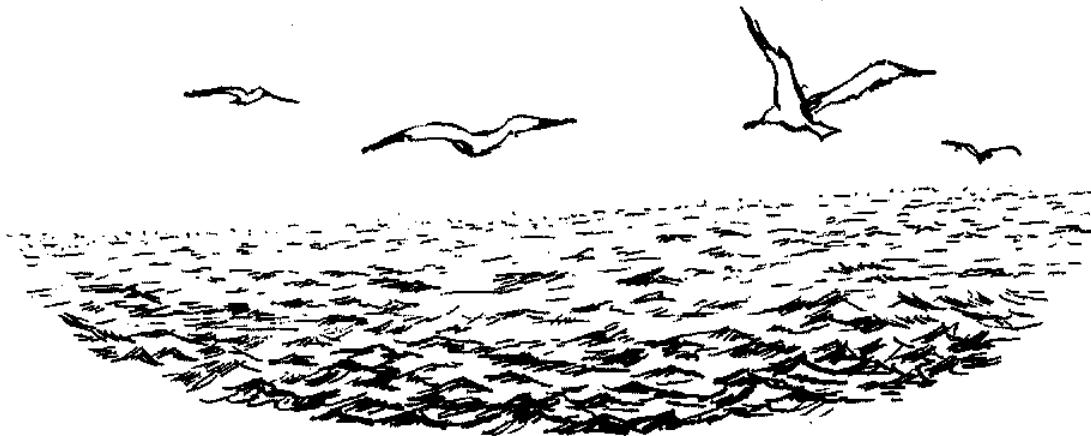
せいかつ まず ほんかくてき ふゆ まえ じぶん きちよう しょくじゆ ていじゆ
生活も貧しく、本格的な冬を前に、自分たちの貴重な食糧を提供した
おお むらびとたち
多くの村人達。

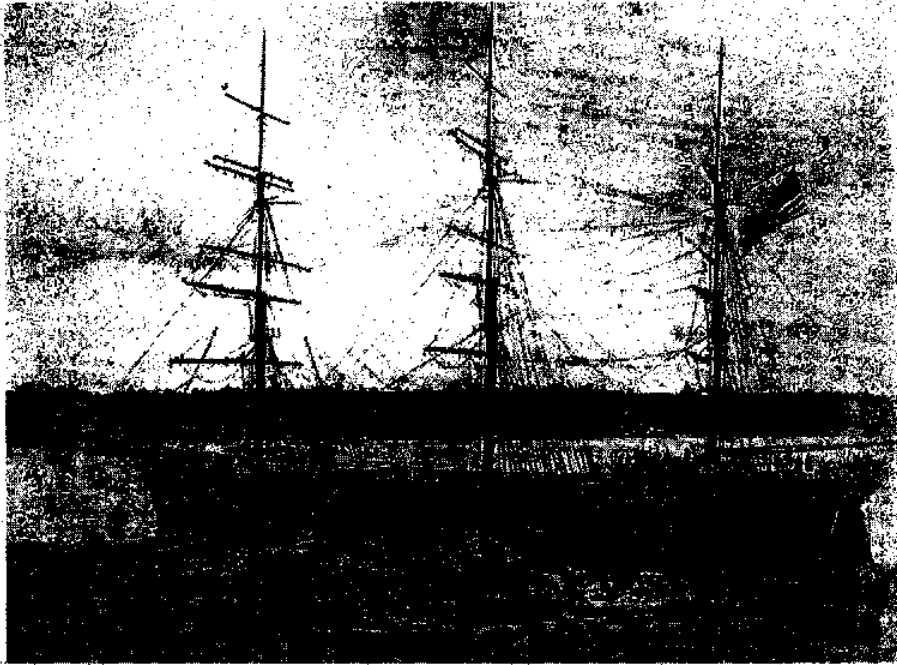
まぎ ゆうき にんげんあい
そこには、どれをとっても紛れもない勇氣と人間愛があった。

か こ しじつ うす なか こどもたち ぜ ひ しゃりきむら ほこ
過去の史実が薄れていく中、子供達には是非このことを車力村の誇り
おも いのち たいせつ こころ やさ ひと ひと い
と思い、「命の大切さ」や「心の優しさ」そして「人は、人のために生き
ひと
て人」ということを深く心に刻んでもらいたい。

ほんし せいさく あおもりし おおたかこう せんせい ちよしよ べいこくはんせん
なお、本誌制作にあたり、青森市の「大高興」先生の著書「米国帆船
こう さんこう どうし ただい きやうりやく
チェスボロー号」を参考にさせていただいたほか、同氏の多大なご協力
ふか かんしゃ れい もう あ
に深く感謝とお礼を申し上げます。

しゃりき せん ちよう なり た さ た ろう
車力村長 成田佐太郎





アメリカに於けるチェスボロー号の積荷作業風景

漫画 和田 恒

協力 大高 興

米国帆船

チェスボロー号 漫画誌

二〇〇四年二月一〇日発行

編集・発行 車 力 村

青森県西津軽郡車力村大字車力
字花林六五(〒〇三八一三三九)
TEL〇一七三三五六一二二二

印刷 有限会社アト印刷

(無断転載、複製を禁ずる)